近世私塾の教育史的研究

２００７年度山本ゼミ共同研究報告書

慶應義塾大学文学部教育学専攻山本研究会

はじめに

近代教育の視線から眺めると、江戸時代の「私塾」とは極めて特異な性格をもつ教育組織であったといえる。いうまでもなく、近代教育の中心たる「学校」とは、国家がその発展のために必要な所定の知識・技能を子どもたちに授け、それを通して子どもたちを「国民」として相応しい存在へと形成していくことを課題する教育組織である。それゆえ、国家の立てた教育目標に基づいて、教員養成、児童・生徒の受け入れ、カリキュラム編成、教授方法の開発などを組織的・計画的に執り行うことを、組織構成の大前提としている。

では、「私塾」はどうであったか。そこでは教師になるための特別な養成課程など存在しない。それなりに学問を修めた学者がいれば、それを慕って学問を志す学生が集まってくる。学者は学生たちの師となり、教育の場が構成される。だが、師は本来職業的な教師ではなく、あくまでも一人の学問探究者なのである。門人の受け入れについても、何らかの制度に基づいていたわけではない。一般的に、門人になるには、相応の学問的能力のほかに信頼できる紹介者、あるいは入門時の謝礼（束脩）を必要とするといった慣習があったが、本文中で後述するように、全くの「出入り自由」な塾の存在も伝えられている。カリキュラムや教授方法についても、一部の例外を除くほとんどの塾において、それらは未整備な状態にあった。

つまり、近代教育の視点からは、「私塾」とは極めて未発達で未整備な教育組織としてしか見えないはずなのである。一定の計画も組織形態ももたない、その限りにおいて不安定で非効率な組織として「私塾」のことを評価したとしても、それは無理からぬことというべきであろう。

だが、その一方で「私塾」には単にそれを劣等視するだけでは済まされない事実も伝えられている。まず、そうした不安定で非効率な組織であるにも拘わらず、江戸時代を通じてほぼ 1,500 校もの「私塾」の存在が確認されている（海原徹『近世私塾の研究』思文閣出版、1983 年、18 頁）。後世には伝わらなかったであろう小規模な塾の存在まで視野に含めれば、この数字は相当に大きなものになり得るはずである。因みに、文部科学省「学校基本調査」（平成 18 年度）の数字を見ると、今日 4 年制大学が全国に 744 校（私立 568 校）、高等学校が 5,385 校（私立 1,325 校）設置されている（文部科学省ホームページ「統計情報」のサイトを参照のこと）。単純な比較は乱暴だということは重々承知の上で、敢えて大胆な推測をするならば、江戸時代の学問的文化を支えたものとして「私塾」の果たした役割には、今日の高等学校・大学のそれに劣らないものがあったのではないか。

「私塾」の学問水準についても、もちろんそれを客観的に裏付けるデータが用意されているわけではないが、伊藤仁斎や荻生徂徠らの独創的でしかも実証的な学説形成、本居宣長の緻密な古典学の足跡、あるいは福澤諭吉の「智力思想の活潑高尚なることは王侯貴人も眼下に見下す」（『福翁自伝』〔『福澤諭吉著作集』第 12 巻、慶應義塾大学出版会、2003 年、所収〕、113 頁）という「適塾」時代の述懐等々を踏まえるならば、それが相応に高い水準にあったことは十分に窺い知れるところである。

そうした高い水準にある学問の発信拠点が、江戸や京都・大坂といった大都市だけでなく、例えば本居宣長の「鈴の屋」（伊勢国松坂）や、菅茶山の「廉塾」（備後国神辺）あるいは江川担庵の「韮山塾」（伊豆国韮山）などのように、地方に散在していたことにも驚かされる。「私塾」は、当時の交通事情に伴う諸制約を乗り越えて、全国的な学問活動普及の拠点として機能していたのである。

さらに、「私塾」の中には、伊藤仁斎の「古義堂」のように 240 年以上も継続したものや、廣瀬淡窓の「咸宜園」のように約 4,600 名もの来学者を数えたものもあった（前掲『近世私塾の研究』、51 頁）。もちろん「私塾」の多数がそうであったわけではない。短期間で消滅したり塾主一代にて閉鎖したりしたもの、極めて小規模なものも少なくなかったはずである（同上書、序章第二節、参照）。だが、「不安定で非効率」な組織であったはずの「私塾」の中に、こうした開設年間や来学者数を誇るものが存在したことには、我が国の教育史上重要な意味があったはずである。

そして何よりも、上記のような「私塾」の性格は幕府や諸藩の政治的権力とは無関係に形づくられていた。「私塾」は、政治の力を通して人々に学問・学習を強制するという意味合いとは無縁の組織でありながら、それにも拘わらず上記の如く江戸社会に相応の普及を見ていたのである。まさにこの点に、私たちの最大の関心は引き寄せられざるを得ない。

近代学校教育が、政治の力を背景に、「教える側」（国家）の都合と必要に基づいて成立したとすれば、少なくとも「私塾」での教育は、人々の学習要求の進展を背景に、「学ぶ側」の理由と意志に基づいて成立したといえる。仮に、教育という営みに何らかの規範が必要だとすれば、近代学校教育は「国家」がその規範を作ったのに対し、「私塾」での教育は「学問」の世界にそれを探ったと指摘することも可能である。

本共同研究は、以上のような「私塾」の諸性格を踏まえながら、それを単に過去における教育上の「遺物」としてではなく、今日の教育上の諸問題を吟味するための貴重な「遺産」として再評価することを企図して着手されたものである。もちろん、この再評価作業は、いわゆる近代学校と江戸時代の「私塾」との教育上の優劣を判別することを目的としてはいない。今日の教育を江戸社会のような様態に戻すべきとするような、社会の歴史的構成を無視した短絡的見解を擁護しようとするものでもない。

私たちが目指すのは、第一に江戸時代の「私塾」の教育様態をそれ自体として精密に把握することであり、第二に「私塾」がいかなる歴史的文脈に基づいて存立することができたのかを明らかにすることである。そうした歴史的文脈を理解することなしに、安易に今日的な教育関心に引き寄せて「私塾」を再評価するというアプローチを、私たちは極力回避することに努めた。そうすることで、「私塾」の側の論理から今日の学校教育の諸問題を客観的に分析するための視座を確保することを目指したのである。

では、私たちは、この共同研究を通して、「私塾」の実態や歴史的背景をどこまで把握できたのか。また、どのような教育上の「視座」を獲得することができたのか。さらに、その「視座」に立って現代教育にどのような視線を注ぐことができたのか。その評価につい

ては、読者からのご批判・ご叱正を待つのみである。

なお、本研究においては「私塾」を、①師と門人との教育的関係が学び手の側の自由意志に基づいて形成された教育組織（教育的関係が政治的に準備された幕府の直轄学校や藩校と対比される）、②「手習い」の段階より高い学問的水準にあった教育組織（「手習い」を中心とする「寺子屋」と対比される。それゆえ「寺子屋」を「手習塾」と、「私塾」を「学問塾」と呼ぶべきとする主張もある〔辻本雅史『「学び」の復権』角川書店、1999 年、57 頁〕）、③主に江戸時代に発達し、地域や身分に関する封建秩序の枠を超え出た教育機関、として理解しておく（この整理は、沖田行司『日本人をつくった教育』大巧社、2000 年、第八章、を参考にした）。

また、「私塾」の種類としては、大きくそれを漢学塾・国学塾・洋学塾に分類するのが一般的であるが、これを踏まえ、本研究では漢学塾として「講習堂」「藤樹書院」「古義堂」「咸宜園」「松下村塾」、国学塾として「鈴の屋」、洋学塾として「鳴滝塾」「適塾」を考察の対象とした（もちろん、この分類が便宜的なものであることはいうまでもない。例えば、「松下村塾」で講ぜられた内容は「漢学」の範囲を超え出ていた）。全八章からなる内容構成も以上の各塾の順序に従った。

もとより学部学生の論文に、学術的観点から内容上・形式上の不備が生ずることは避けがたい。しかし、本共同研究では敢えて、学生たちから提出された完成原稿をそのまま掲載することにした（形式上の表記については、統一をはかるため若干の修正を施した）。学生たちに、現時点での自分自身の学問的力量・態度について何が不足しているのかを自覚してもらうことを意図してのことである。その意味で、本共同研究が学生たち（卒業者〔現四年〕・進級者〔現三年〕に拘わらず）の今後の学問的成長を反省的に促す契機となることを期待してやまない。

２００８年１月３１日　山本正身

目　　次

はじめに …… 2 頁

第一章　講習堂―知られざる功績―
　はじめに …… 7 頁
　１．設立（終焉）の経緯・歴史的考察 …… 7 頁
　２．塾主の経歴・学問的背景および門人たちの身分、範囲 …… 8 頁
　３．教育活動の実態と特色 …… 11 頁
　４．歴史的意義 …… 12 頁
　おわりに …… 13 頁
第二章　藤樹書院―近江聖人による儒教学舎―
　はじめに …… 16 頁
　１．塾主の経歴・学問的背景 …… 16 頁
　２．藤樹書院の設立及び終焉 …… 19 頁
　３．教育活動の実態と特色 …… 20 頁
　４．門人の身分・範囲 …… 22 頁
　５．歴史的意義―むすびにかえて― …… 23頁
第三章　古義堂―近世の学問研鑽としての私塾―
　１．塾主の経歴 …… 26 頁
　２．学問的背景 …… 26 頁
　３．設立の経緯 …… 28 頁
　４．門人の身分・範囲 …… 28 頁
　５．教育活動の実態と特色 …… 29 頁
　６．塾の中断と興隆 …… 30 頁
　７．歴史的意義 …… 32 頁
第四章　咸宜園―近世最大の私塾―
　はじめに …… 35 頁
　１．塾主の経歴・学問的背景 …… 35 頁
　２．設立の経緯・歴史的考察 …… 36 頁
　３．教育活動の実態と特色 …… 37 頁
　４．門人たちの身分・範囲 …… 38 頁
　５．歴史的意義 …… 40 頁
第五章　松下村塾―時代に立ち向かった私塾―
　はじめに …… 42 頁

１．設立・終焉の経緯、歴史的背景 …… 42 頁
２．塾主の経歴・学問的背景および門人たちの身分・範囲 …… 44 頁
３．教育活動の実態・特色 …… 46 頁
４．松下村塾の歴史的意義 …… 49 頁
第六章　鈴屋―江戸期を代表する国学塾―
はじめに …… 53 頁
１．鈴屋設立の経緯 …… 53 頁
２．鈴屋設立の時代的・社会的背景 …… 54 頁
３．宣長の経歴と思想 …… 54 頁
４．門人たちの身分・範囲 …… 56 頁
５．教育活動の実態と特色 …… 57 頁
６．歴史的意義―むすびにかえて― …… 60 頁
第七章　鳴滝塾―外国人塾主の到来―
はじめに
１．シーボルトが来日に至る経緯 …… 64 頁
２．鳴滝塾成立の経緯 …… 65 頁
３．鳴滝塾の終焉 …… 65 頁
４．教育活動の実態と特色 …… 66 頁
５．鳴滝塾の門人とシーボルト帰国後の展開 …… 67 頁
６．シーボルト以前の外国人による教育組織での教授について …… 68 頁
７．歴史的意義 …… 70 頁
第八章　適塾―自由闊達な俊秀たち―
はじめに …… 73 頁
１．設立・終焉の経緯と歴史的背景 …… 73 頁
２．緒方洪庵の経歴・学問的背景 …… 74 頁
３．教育活動の実態と特色 …… 75 頁
４．門人たちの身分と範囲 …… 78 頁
５．歴史的意義 …… 79 頁

第一章　講習堂―知られざる功績―

はじめに

後述するように、252 年という長期間において、京都の地に儒学塾として存在した塾、それが講習堂である。この講習堂は、長期間塾を継続させ、そして木下順庵や貝原益軒といった現在有名とされている学者を生み出した。今回の研究では、このような功績を持ちつつも、他の塾と比較してマイナーとされている講習堂の本来の姿を、第一節では設立（終焉）の経緯・歴史的考察を、猪口篤志・俣野太郎の『日本の思想家①藤原惺窩・松永尺五』と大江文城の『本邦儒学史論攷』を中心に、第二節では塾主の経緯や門人に関して上記の俣野の著書を中心に、第三節では教育活動の実態と特色、第四章では各著者の今日までの歴史的意義の再検討を通して、明らかにできればと思う。

１．設立（終焉）の経緯・歴史的考察

では早速、まずは第一節、講習堂の設立（終焉）の経緯・歴史的考察から述べていくことにする。講習堂を設立し、江戸初期から明治初期まで、約 250 年間京都の代表的儒学塾として継続できた基盤を築き上げたのは、京都の朱子学者、松永尺五である。まず、講習堂設立年代に関してであるが、これに関する詳しい記述は、大江文城の『本邦儒学史論攷』に記されている。

> 西洞院二條南の地に春秋館を剏立したのは、寛永五年その四十歳のときで、堀川二條南に講習堂を剏立したのは、九年後なる同じく十四年四十九歳のときである。而して御所堺町御門側に尺五堂を剏立したのは、またその十一年後なる慶安元年六十歳のときである[(1)]。

ここで注意しなければならないのは、松永尺五が関わった塾が三つあり、それぞれの塾の設立年代が非常に近いということである。これにより、三つの塾の設立年代が混乱してしまいがちである。しかしながら、伊藤敏行も「従来諸書講習堂と尺五堂とを混淆して居るが、全く誤謬である。講習堂は寛永十四年の創設で、（中略）尺五堂は慶安元年の設立で」[(2)]と指摘していることからも、大江の記述は正しいと見ていいだろう。

次に、講習堂設立の経緯である。大江の記述によると、「京都所司代板倉周防[(3)]が、尺五の学徳を敬慕し、その隠棲の地を講学の園とし、且つ資を捐てて屋宇を建てたのである」[(4)]としている。これと同様の記述として、俣野は、

> 「行状」に明らかなように、講習堂は全く京都所司代板倉周防守重宗の篤志によったものだが、その篤志は、永年の交際から生じた、尺五の学徳への並々ならぬ敬慕の念

に発するものであったらしい[5]。

と記述している。ここでいう永年の交際に関しては、京都所司代重宗の父伊賀守勝重[6]と、尺五の父松永貞徳[7]との交際が長年にわたり存在ことが挙げられる[8]。どのような交際があったかに関しては詳しい記述がないが、京都所司代板倉周防守重宗の尺五に対する敬慕の念が、講習堂を設立させたと見てよいだろう。講習堂設立の 11 年後には、後光明天皇[9]から堺町御門前の土地を下賜され、「尺五堂」を建てた。この際も再び、板倉所司代が力を貸した[10]ようであるが、尺五堂に関してはここでは省略する。

上記のような過程を経て始まった講習堂は、各地方から門人を引き寄せ、人気を博した。その理由として俣野は、父貞徳の名声と師藤原惺窩[11]の存在と、彼自身の謙退温厚の調和的人柄、儒学への弛まざる精励[12]を挙げている。

最後に、講習堂の終焉の経緯である。講習堂の塾主は後に寸雲、思斎、尺短軒、方鳩など十二代を経て、明治 22（1889）年、塾主信蔵の時、252 年間にも及ぶ講習堂は幕を閉じたのである[13]。講習堂が幕を閉じた理由としては、「明治二十二三年の頃三井氏が買収した」[14]と、大江が記述しているのみであり看献には触れられてはいないため、詳しいことはわかっていない。

２．塾主の経歴・学問的背景および門人たちの身分、範囲

第二節では、塾主の経歴を中心に検討していくが、ここで注意しなければならない事実がある。それは、塾主の年齢が、各著書で異なっている点である。しかし、当時の詳細を記していると思われるのは、『尺五先生行状』であると考えられるので、したがって以下、年齢に関しては、『尺五先生行状』に基づき、統一をした記述を行うこととする。

江戸時代の儒学者、松永尺五は朱子学の先駆者である藤原惺窩の門人であり、林羅山・堀杏庵・那波活所らと共に窩門四天王の中の一人である。中でも林羅山、松永尺五の二人は、師の他界後の半世紀近く、東西の二大朱子学者として令名があった[15]。

松永尺五は、鎌倉時代より続いた、れっきとした武将の家系である。曽祖父入江政重は摂津の国高槻城の太守であり、祖父の入江永種が、松永久秀の一子久通の養子となり、松永姓を名乗ったもので、正確に言えば、戦国時代の謀略家として顕著な松永久秀は遠縁にあたることになる[16]。松永姓になった永種の子勝熊がすなわち松永貞徳であり、この人が松永尺五の父である。父貞徳も祖父永種も共に歌道をもって高名であった。また永種の父松永久秀も、国家騒乱の時代にあって幼少の時から学問道徳に入れ込み、弘治二（1556）年には、明経博士清原枝賢をその居城に呼んで「中庸」「孟子」の講釈を聴いており、その当時にしては稀にみることであった。松永尺五はこのような文学愛好の家に生まれた[17]。

松永尺五の人生は、後陽成天皇（第 107 代）の時代で文禄元年（1592）、松永貞徳の長男として、京都の教業坊、詳細に言えば京洛の西南、西ノ岡で生まれて始まった[18]。貞徳が二十二歳のときであった。諱（いみな：生まれた折に父貞徳から与えられた実名）は

昌三、通称は昌三郎といった。また儒学者に特有のあざな（元服の折に改めて定める別のよび方）を遐年（かねん）といった。その性格は能く人を愛し、慈悲深く、孝行の心があり、質朴で誠意があり、うやうやしく畏まっており、倹約し贅沢を禁じて、謙虚で諂わず、よく儒教の教えを実践した人物であったらしい[19]。慶長二（1597）年、尺五が六歳のころに母が死去し、以後祖母に育てられることになる。慶長四年、尺五は八歳になると書を読み始め、藤原惺窩に従事して学び、父貞徳の歌会にも出席し修練にいそしんでいた。尺五は藤原惺窩と遠縁ながら血のつながった関係にあり、惺窩はこの少年は誠実、簡黙であり故に儒者として名を成し、父母を顕わさん者と見て、深衣と幅巾を授与した[20]。深衣とは儒服のことで、原始儒教の基本的経典である五経の一つ『礼記』の中に「深衣」の一篇があって古代の制服すなわち深衣の制を伝えている。幅巾とは冠の代わりにかぶる頭巾のことで、主として処士（学識が充分ありながら自己の信条に従って官吏に就かず、民間に在って不安定な生活に堪える人物のこと）や、隠士（処士が更に、市井の地を避け、林間や山や谷の裡に隠れ住む場合をさす）の頭にいただくものである。慶長七（1602）年、尺五は十一歳で漢詩を作り、佳句を用いて人を驚かした。林道春・堀正意などと詩会を開いて尺五の作が佳作であったから、藤原惺窩に献じ、惺窩は驚異したと云う。この頃から、尺五の学問的センスは現れていたと見ることができる。慶長九年、尺五が十三歳の頃、四書及び六経に精通しているとの尺五の学問童子ぶりが噂された。その噂はやがて大阪城内にまで伝わり、豊臣秀頼の招聘を蒙って大阪城に出講し、御前で書経の講演を行い、居並ぶ郡侯や家臣たちを驚倒させた。その結果、京都へ帰った後の学問童子の世評はいよいよかまびすしく、この少年を師と仰いで儒学を究めようとする人々が次々に、尺五のもとに訪れたと云う。またその後、豊臣秀頼は執事役の片桐且元を使者に立てて、尺五を出仕せしめようとしたが、尺五は断っている[21]。慶長十年代後半ごろ、尺五は父である貞徳と共に三条通り衣棚の高棚南町に住み始めた。ここは衣類販売を主業とする商家ばかりの町並みであった。この場所で、尺五は私塾を設け、それを補助する形ででもあったのか、尺五の漢学教授も盛んであった[22]。また貞徳と共に経伝を講説して、来て学ぶ者は多くいて門前に溢れていたという[23]ほど、尺五の教授は有名高貴であった。その三条通りでの講席の繁昌の結果、尺五は一時自己の住まいを五条坊の別宅に移した。慶長十九年（または翌元和元年）には尺五は妻を娶った。妻の旧姓は柏氏であり、詳しいことはわかっていない。また、元和四（1618）年四月に祖母を亡くし、翌年九月には恩師である藤原惺窩を亡くすという二年続けての不幸を経験した。祖母は享年七十五歳、藤原惺窩は享年五十九歳であった。さらに追い討ちをかけるように、元和六年十一月には、数え年二つの第三児乙亀を、痘の病のために喪っている。同元和六年、貞徳の命によって尺五は『松永家々譜』を撰した。列国の諸侯から仕官の申し込みがあったが、父の命に従って仕えず、市井において教授し、上は公卿から下は士庶に至るまで、学を受けた者は多かった。

元和の元号も寛永にかわり、寛永三年のころには父貞徳の主宰する年少子弟向きの塾が盛んだったらしい。ここでは幼少の木下順庵、伊藤仁斎、林羅山の三男春斎、四男守藤な

ど、後の錚々たる儒者たちの卵が教育を受けたと云う[24]。そして寛永五（1628）年に尺五は春秋館を創設した。その経緯は以下の通りである。尺五は、永年三条衣棚の家に父と同居し、父の私塾を助けるかたわら、学ぶ者の増加に伴って、五条の地に別宅を設けて分教場を開くまでになった。ところが上京方面の弟子たちの中から、もっと近い場所へとの要望が強くなったのでこの年、西洞院二条南の地に場所を決めて、春秋館と名づける建物を建てて儒学専門の塾を開設した。父の私塾での補助者として素読専門であったらしいが、五条の分教場や新しい春秋館では、むろん四書五経や『近思録』『小学』ないし『通鑑綱目』など朱子学の専門書が用いられた。

寛永十四（1637）年、尺五が四十六歳のときに、京都所司代板倉周防守重宗の篤志により、二条城の東門、堀川を隔てた西向きの一閑地に建設された邸宅に、尺五は移り住んで自ら講習堂と名づけた。竹林を背にした閑寂なこの地は、市井の間にあっても車馬の喧騒もなく、東西十八間、南北三十間の広さがあり、これは現在でいう五百四十坪に相当する。貴族や身分が高い武士などが来聴したといわれている。

慶安元（1648）年、尺五が五十七歳のときに、尺五は後光明天皇から禁闕（京都御所の内裏のこと）の南の数十弓（一弓は八尺）の土地を与えられた。この場所に皇子皇孫の学問のための尺五堂が造営された。京都所司代である板倉周防守重宗は今回もまた造営に力を貸した。尺五堂が造営されたことで門人はますます多くなった。

慶安三年には後光明天皇の意思をうけて、尺五は『草書抄』および『水仙花詩註』を撰した。またこの時期に、儒官に推薦しようとした板倉周防守重宗の厚意を断っている。この点に関して衣笠は、「官位はないが自然と備わった立派な人格や気品を大切にしたからであるだろう[25]」としている。

明暦三（1657）年、尺五が六十六歳のとき、親戚子弟を招いた桜満開の花見の宴を開いた。その宴の半ばで尺五自身の口から死の予告があった[26]。そして同年六月二日、尺五は死去した。死因は、ものが胸・腹につかえて通じなくなる痞隔病といわれている。諡（贈り名）は恭倹居士で、洛東の鳥辺山に葬られた。後に、改めて先祖の墳墓がある城南の本国寺に葬られた。また、分骨され、父貞徳の葬られた実相寺にも尺五の墓は設けられた。こうして尺五の六十六年間の人生は幕を閉じた。

ここで尺五の学問的背景を考えてみる。藤原惺窩は深衣道服を林羅山に与え、更に尺五にも与えた。また尺五には『周易』『河図洛書』『洪範九畴』『春秋の奥義』を伝えて、一子相伝の盟誓を立てたことは『尺五先生行状』からわかっている。この点から察すれば、藤原惺窩は尺五に対して自己の学問の真髄を伝えんと考えたのだろう。尺五の学は朱子学を中心としてさらに仏教にも及んでいる。林羅山は藤原惺窩への入門前に各種の書を広く読み、既に自分の学風を持っていた。故に藤原惺窩も林羅山には一目置いて秀才として他の門人とは区別して扱い、自己の学を継ぐ者は尺五であると藤原惺窩は考えた。さらに尺五の祖母は藤原惺窩の妹であるという血縁関係もあった。

門人たちの身分は様々で、講習堂に貴族や身分の高い武士などが来聴し、尺五堂には皇

子皇孫が集まった。また、父貞徳と三条通り衣棚で講説していた時は、上は公卿から下は庶民にいたるまで学を受けていた。藤原惺窩に従って豊臣家に出入りして講説も行ったりもした。尺五は仕官することは生涯なかったが、諸侯よりの招きがあれば、例えば加賀・能登・越前の太守のもとに出向き講説したと云う[27]。春秋館、講習堂、尺五堂などに具体的にそれぞれ何人ほど門人がいたのか、ということはわかっていないが、門人たちは総合すると五千人前後に及び、松門と称せられていたと云う[28]。

３．教育活動の実態と特色

前節では、塾主の経歴や門人に関して述べてきた。この節では、講習堂における教育活動の実態と特色に関して述べていく。

講習堂は、寛永十四（1637）年松永尺五が四十六歳の時、京都の所司代板倉周防守重宗の父である伊賀守勝重の曾て経営していた二条城東門外の一閑地に建てられた。この土地は重宗より尺五に与えられたもので、重宗は学を好んで尺五を重んじ、度々招いてその説を聴き懇意となっていた[29]。この点に関しては、先に記したので、ここでは詳細は載せない。

堀川を隔てて西向きに建築された講習堂は、竹林を背にした閑寂な地で、規模は東西十八間、南北三十間と伝えられており、これは今で言う 540 坪に相当する[30]。そのため非常に広い空間で弟子たちは学問に励むことができたようであるし、環境や立地条件も仕官の野心をもたない市井の儒者にふさわしかったようである。

文部省編の『日本教育史資料』九巻によれば、講習堂は、今で言うところの教師は一人、生徒は男三百二十二人・女三人で構成され、塾主氏名は松永昌言とある。この講習堂内の概要の調査年代は明治二（1869）年である。

講習堂の特色として、第一に以下の記述が先行研究で記してある。

> 創設より尺五は朝夕聖経を講じて怠らなかったので、貴族や身分が高い武士などが来聴し、門下に入るものが多く、或いは付近より講習堂に勤学するものも少なくなかった。また打続く戦乱の京都の衰退のため、釈奠の礼が絶えていたので之を再興し、学生を集め、伶人（雅楽を演奏する人）を招き、辺豆（竹・木で作った食べ物を盛る、脚つきの器）を設け、典礼を家塾に挙げて、毎年春と秋、すなわち二月と八月の上の丁の日に孔子を祭る祭典を行っていた[31]。

この祭典に関しては、当時においては画期的であったといえる。しかし、何を使用して教授していたかに関してや、具体的な教授方法に関しての記述は大して明らかにされていない。ただ、講習堂が儒学の私塾であり、また講習堂より以前に建てられ、尺五自身も教授を行っていた春秋館では、四書五経や『近思録』[32]『小学』[33]、ないし『通鑑綱目』[34]などの朱子学の専門書が使用されていたこと[35]から、講習堂でも同様に四書五経

や朱子学の専門書を使用していたと推測する。

講習堂の特色として、他には尺五が詩にも精通していたため、弟子たちと共に外へ出て、詩をつくる活動も行っていたこと[36]が挙げられる。この点に関して『叢書・日本の思想家①』の著者である俣野太郎は、尺五が詩作も行っていたことの理由の一つとして、以下のように述べている。

> 私塾の競争相手とて未だ皆無に近かった当時の京都で、儒名の確立につれて生じた生活の寛ろぎと経済上の豊かさとが、社交的必要とも相俟って、学術上への刻苦精励よりも、より多く文雅風流の嗜好へ、……詩作へと赴かせたのではなかったろうか[37]。

上記の記述には出てこないが、尺五が詩作にも力を入れた理由を探る上で、父松永貞徳の影響を挙げずにはいられないだろう。尺五堂恭倹先生行状に「八歳より書を読み……父の歌海に出て」の記述が存在すること[38]から、尺五は八歳の時点ですでに詩作の最初の一歩を踏み出したこととなる。尺五はこの後、藤原惺窩の門下となっていくわけであるが、この時に始まった詩作への思いが、後に自分が教授する側となった際に教授の一つとして現れた、と考えることもできる。

４．歴史的意義

それでは最後に、松永尺五と講習堂が遺した歴史的意義とはいかなるものであったのかということを考えてみたい。

第一の歴史的意義は、松永尺五の教育者的功業である。前述の俣野太郎は、講習堂の歴史的意義に関して、

> 門人五千人と称せられたのは、何の資料によるかわからないが、のちに木門の学と称せられ、事実上京学の後継者となった木下順庵を初め、柳川の安東省庵、福岡の貝原益軒、岩国の宇都宮遯庵など、優れた朱子学者たちを育てた功績は、むしろ徳育の面に卓越した、生来の教育家的資質を偲ばせる[39]。

と述べているし、また他にも、

> 特に、尺五が、四十年にもわたって京洛の地に朱子学の旗幟をかかげ、先師の遺業を継承していわゆる京学の伝統を維持し、木下順庵・安東省庵・貝原益軒・宇都宮遯庵ら、数多くの俊秀を育てた教育者的功業は、大きく評価せられねばならない[40]。

という記述や、小高が書いた『新訂 松永貞徳の研究』371 頁にも尺五の教育者としての優秀さを評価する記述が存在する。尺五による具体的な教授法などは大して明らかにされて

はいないために、どういった点が優れていたかは詳細に記すことはできない。しかし、これほどまでに多くの優れた学者を生み出す私塾が、他にいくつ存在したであろうか。尺五が、後世に名を残すほどの逸材を育てたという事実は見逃せない。よって、門下に幾多の俊才を輩出せしめているという教育的功業を第一の歴史的意義とする。

第二の歴史的意義は、孔子廟の祭典である釈奠を行ったことである。講習堂を建てた後に、尺五は当時行われなかった、孔子廟の祭典である釈奠を、毎年門人を集め、伶人（雅楽を演奏する人）を招き、辺豆（竹・木で作った食べ物を盛る、脚つきの器）を設けて、春秋二上丁の日に行った[41]。このことを『日本儒教史（四）近世篇』の著者である市川は「日本儒教史上大いなる貢献である」と述べている。この点に関しては、他の追随を許さない。

第三の歴史的意義は、京学の普及である。藤原惺窩が儒学を独自に体系化し、京学派を開いた。その京学は「惺窩の正統は、政治的傾向の強かった羅山よりもむしろ尺五の側にあったと言ってもよい」[42]とのことで尺五に引き継がれた。この学統は、尺五以外では堀杏庵・那波活所・石川丈山・三宅寄斎らにも伝承されたと云う[43]。歴史的意義として「朱子学に基づいた京学の普及、とくにその教育面での活躍に顕著なものがあった」[44]という記述があるが、実際にどこまで普及させたのかという具体的な事はわかっていないが、尺五の京学継承には注目すべきである。以上が予想されうる三つの歴史的意義である。

おわりに

講習堂は、松永尺五が死んだ後も継続して存在し続け、最終的には寛永十四（1637）年～明治二十二（1889）年まで、約 250 年以上続いたことになる[45]。この事実は、単なる幸運ではなく、文化・文明が進歩していく成り行きに、講習堂が貢献していたからであるだろうと推測される。現在ではほとんど知られていないが、他の私塾に勝るとも劣らない歴史的意義を持つこの講習堂を、もう一度このように検討しなおすことは、非常に価値があることであると考えられるだろう。

〔註〕

（1）大江文城『本邦儒学史論攷』全國書房、1944 年、145-146 頁。
（2）伊藤敏行『京都府教育史上』第一書房、1983 年、98 頁。
（3）板倉重宗のこと。勝重の長子。在職期間（1620～1654）。
（4）前掲『本邦儒学史論攷』、146 頁。
（5）猪口篤志・俣野太郎『日本の思想家①藤原惺窩・松永尺五』明徳出版社、1982 年、259 頁。
（6）駿府町奉行、江戸町奉行、関東代官と歴任し、京都所司代となる。在職期間（1601～1620）。
（7）松永尺五の父。貞門派俳諧の祖。
（8）前掲『日本の思想家①藤原惺窩・松永尺五』、259 頁。

（９）在位期間は、ちょうど、徳川家光から家綱の時代（1643～1654）にあたる。激しい性格の持ち主で幕府に対しても抵抗していたと伝えられている。一方、学問好きであり、儒者藤原惺窩の影響を受け、朱子学にのめり込んでいた。

(10) 前掲 『日本の思想家①藤原惺窩・松永尺五』、262 頁。

(11) 松永尺五の師。京学派を築いた。

(12) 前掲 『日本の思想家①藤原惺窩・松永尺五』、278 頁。

(13) 衣笠安喜編『京都府の教育史』（思文閣出版、1983 年）、337 頁。

(14) 前掲『本邦儒学史論攷』、146 頁。

(15) 前掲『日本の思想家①藤原惺窩・松永尺五』１７１頁。

(16) 伊藤敏行『京都府教育史（上）』第一書房、1983 年、96 頁。市川本太郎『日本儒教史（四）近世篇』汲古書院、1994 年、59 頁。前掲『日本の思想家①藤原惺窩・松永尺五』、225 頁。前掲『本邦儒学史論攷』、137 頁。

(17) 前掲『本邦儒学史論攷』、137 頁。

(18) 同上。

(19) 前掲『日本儒学史（四）近世篇』、59 頁。

(20) 前掲『日本の思想家①藤原惺窩・松永尺五』、231-232 頁。前掲『日本儒学史（近世篇』、60 頁。

(21) 同前『日本の思想家①藤原惺窩・松永尺五』、238 頁。

(22) 同上、248 頁。

(23) 前掲『日本儒学史（四）近世篇』、60 頁。

(24) 前掲『日本の思想家①藤原惺窩・松永尺五』、253 頁。

(25) 前掲『京都府教育史（上）』、99 頁。

(26) 前掲『日本の思想家①藤原惺窩・松永尺五』、264 頁。

(27) 前掲『日本の思想家①藤原惺窩・松永尺五』、250 頁。前掲『日本儒学史（四）近世篇』、60 頁。

(28) 小高敏郎『新訂 松永貞徳の研究』臨川書店、1988 年、371 頁。前掲『京都府の教育史』、64 頁。

(29) 前掲『日本儒教史（四）近世篇』、60 頁。

(30) 前掲『日本の思想家①藤原惺窩・松永尺五』、258 頁。

(31) 前掲『京都府教育史（上）』、97 頁。前掲『日本の思想家①藤原惺窩・松永尺五』、260 頁。

(32) 中国、宋代の哲学書。十四巻。朱熹・呂祖謙編。1176 年刊。北宋の代表的な哲学者、周濂渓・程明道・程伊川・張横渠の言葉の中から、初学者に適当なものを選び、分類して編集したもので、宋学の入門書として必読のものとなった。

(33) 中国、宋代に作られた幼童用の入門書。六編。朱熹の指示によって門人の劉子澄（しちょう）が編述。1187 年成立。日常生活の心得から、修身の格言、忠臣孝子の事跡などを集める。日本でも江戸時代に初学者の教科書として広く用いられた。小学書。

(34) 資治通鑑綱目のこと。『資治通鑑』の記事を大義名分論・正統論の立場から再編した編年体の史書。

(35) 前掲『日本の思想家①藤原惺窩・松永尺五』、254 頁。

(36) 竹内弘行・上野日出刀『叢書・日本の思想家⑦木下順庵・雨森芳洲』明徳出版社、1982 年、

270 頁。

(37) 前掲『日本の思想家①藤原惺窩・松永尺五』、260 頁。

(38) 同上、229 頁。

(39) 同上、278 頁。

(40) 同上、172 頁。

(41) 前掲『日本儒教史（四）近世篇』、61 頁。

(42) 岩崎允胤『日本近世思想史序説（上)』新日本出版社、1997 年、119 頁。

(43) 前掲『近世日本政治思想の成立』、404 頁。

(44) 前掲『京都府の教育史』、64 頁。

(44) 同上、337 頁。

＜上原　惇・大﨑紳平＞

第二章　藤樹書院―近江聖人による儒教学舎―

はじめに

中江藤樹の藤樹書院に関する本研究では、「塾主の経歴・学問的背景」、「設立・終焉の経緯」、「教育活動の実態と特色」、「門人たちの身分及び背景」、「歴史的意義」の５点を明らかにすることをその目標に置き、各節においてその詳細を記載する。

第１節では、塾主の経歴と学問的背景を明らかにする。研究に用いる資料として、「藤樹先生年譜」、山住正己の『中江藤樹』、久保田暁一の『中江藤樹　道に志し孝を尽くし徳を養う生き方』、大橋健二の『日本陽明学奇蹟の系譜』をとりあげる。第２節では、門人直筆の資料である「藤樹先生年譜」を参考にしながら藤樹書院の設立及び終焉の経緯を明らかにする。ただし、藤樹書院設立に関する直接的な記述が存在しないため、山住正己の『中江藤樹』と後藤三郎の『中江藤樹伝及び道徳』を参考にしながら設立に関する一説を提示したい。第３節では、「藤樹規」と「学舎坐右戒」を参考に教育活動の実態と特色を明らかにする。前者は藤樹書院における学問観を示し、後者は書院の規則であるからして、藤樹の学問や教育に対する性格があらわれていると考えることができるからである。また藤樹の教育の一例として、大野了佐に対する教育を取り上げることにする。第４節では、「門弟子並研究者傳」を用いることとし、総勢 80 名を越える藤樹書院の門人たちの身分や出身地を表にしてまとめる。第５節では、以上の研究をもとにして藤樹書院の歴史的意義を考察する。

１．塾主の経歴・学問的背景

中江藤樹は、1608（慶長13）年に、現在の滋賀県高島市にあたる近江国高島郡小川村に生まれた。

藤樹満８歳の時、米子藩主加藤貞泰に仕えていた藤樹の祖父吉長が小川村に訪れ、孫の養育を引き受けることを希望する。藤樹は他の子どもたちとは違った落ち着きと聡明さを持っており、吉長はそんな彼を村に残すのは惜しいと考え、武士に育てようとしたのである。当初は猛反対をしていた両親も、吉長の強い希望に承諾せざるを得なかった。そして藤樹は彼と共に米子へと旅立ち、その後の転封に伴い、各地を転々とした。

米子へと移った藤樹は、そこで初めて文字・句読を習うことになるが、その上達ぶりは非常に早いものであり、その年の終わりにはほとんどの文字が読めるほどであった。吉長の代わりに遠近の書簡を全て代筆していたほどであり、彼の才能は人々を驚嘆させた。

９歳の時、藩主の転封に伴い、伊予大洲へと移るが、同年の冬には吉長の風早郡宰就任に伴い、風早に移った。すでに前年から吉長の代筆を務めていたが、このような日常生活に必要な文字を習得するだけでなく、彼は古典に立ち返った学習を始めていた。まずは手始めに『庭訓往来』や『貞永式目』を学んだという。どちらも非常に形式的であり、小さ

い子どもを形の上からまず慣れさせるという視座に立った本であった。これは藤樹を士族的な形式主義へと貶めることになるが、道徳の身体化という教育の目標と、窮屈な形式主義との矛盾に対する悩みや苦しみが、彼の偉大な学説を生む母胎となったと小出哲夫は指摘している[1]。

10歳の時、初めて『大学』[2]を読み、その一節の「天子より以て庶人に至るまで、壱に是皆、身を修むるを以て本と為す」を読み、「書ヲ恭敬シ嘆シメ曰、聖人學デ至ルベシ。生民ノタメニ、此経ヲ遺セルハ何ノ幸ゾヤ。コヽニヲイテ感涙袖ヲウルヲシテヤマズ、是ヨリ聖賢ヲ期待スルノ志アリ」[3]と考えた。この『大学』を繰り返し読むうちに、彼はこの書物が説く教えは、「家をととのえることから天下を平らかにするに至る全てのことが孝・弟・慈をはずしては道にはずれたものになるというところにある」と理解した。つまり、孝、親兄弟が互いに慈しみあうことの大事さにあるといったものであった。

13歳の時、曹溪院の天梁和尚について習字を習い、その合間に漢詩を学び、しばしば佳作を作った。この頃、祖父を訪ねて来た家老大橋作衛門の話を傾聴したものの、そこには何も学ぶべきことを見出せなかったと批判した出来事があった。これは、身分の高い武士はそれにふさわしく、その言動は常人より優れているはずだという理想主義者藤樹の期待が裏切られ、これにより彼の武士社会への理想がはやくも傷つけられた事を意味している。そして、これが後に性（心）において人物は貴賤之殊なく平等である、といった人間観に結びついてゆくことになる。

14歳の時、吉長が死去し、その後跡を継いで出仕する。

16歳の時、京都から学僧が訪れて『論語』の講釈が行われるが、当時の大洲の風俗は武を尊び、学問を軽視する精神的風土が浸透していため、受講したのは藤樹一人だけであり、彼は学問的に孤立の状況にいた。それでも藤樹は継続して受講したが、『論語』20篇のうちの前半10篇の講義が終わったところで、師は京都に帰ってしまう。こうして藤樹は再び独学の必要性に迫られることになるが、独学をするための基礎がほぼでき始めていたこともあり、『四書大全』を入手し、これを頼りに独り勉強を続けることができた。しかし、依然武を尊ぶ大洲の気風のなかにあり、藩士たちの誹謗罵りをはばかるために、昼は藩士と武術に励むかたわら、深夜に勉強するという生活を余儀なくされた。まずは『大学大全』、ついで『論語』、『孟子』と歩を進めていった。

19歳の時、中川貞良[4]が同志２、３人と共に藤樹に弟子入りをし、藤樹は彼らに『大学』を講じ、彼の教育活動への姿勢をここに見せた。

20歳の時、彼を慕って集まってくる弟子の数が増えたため『四書大全』を元に『大学啓蒙』[5]を著した。この頃には、学問の方もだいぶすすんでいたが、朱子学的唯物論を奉じており、一挙手一投足にも礼法を守り、極端にまで形式にとらわれていた。『大学啓蒙』や「安昌玄同を弑する論」[6]にも表れていて、ここに後の藤樹学に見られる「愛」の精神はまだ見えなかった。

25歳の時、中国の『韓詩外伝』の皐魚の伝記[7]を読み、その一節「樹静かならんと欲

すれども風止まず、子養わんと欲して親待たず」に胸を打たれた。その前年に藤樹は帰郷しており、母を伴って大洲へと戻りたいと考えていた。これは孝行を尽くすためには、親が遠く離れていたのでは実行できないと考えたためである。しかし、母はすでに老いており、故郷を離れて見知らぬ土地へ行くのを好まず、同行を拒否したのだ。よって藤樹はやむを得ず単身で戻り、さらには道中で喘息を患う結果になってしまう。この喘息の病は生涯つきまとうことになり、彼に執筆の中断、著作の未完成をくりかえさせることになる。しかし、老母の奉養を諦めたわけではなく、この頃から藤樹は帰郷のため致仕願い（辞職願い）を幾度も提出するようになる。しかし許可が得られなかったため、その年の**10**月、禄米や財を蔵に残すかたちで清算を済ませて脱藩を決行した。この時、18年間の藩仕生活を顧みて、自己本来の自由を喪失して本来の人間性が発揮できず、「格法」に拘束されていたために、「和楽して且つ耽む」ことを妨げていた武家社会そのものへの批判を、悔悟の念とともに述懐している。藤樹の脱藩の要因に母親の奉養が挙げられるのは勿論だが、彼の述懐からは武家社会への倦厭もあったように窺える。その他の脱藩の理由としては、大洲藩内の文治派と武断派の対立、家督をめぐる内紛などからくる武家社会への不信など、諸説が絡んでいる[8]。

藤樹は27歳の時、筮儀(占いの法)[9]を学び、易の師を求めて京都に赴いたが、適任者には出会えなかった。そして、『易学啓蒙』[10]三巻を入手し、またもや独学につとめたのである。この時の藤樹の学問は、『四書』より古典に立ち返って『五経』、なかでも『易経』を中心になされていた。その教育思想は、『明徳図説』や『持敬図説』に表れている。「上帝」（超越的「天」、万物創生した人格神）を畏れる宗教性、および「徳性」を尊ぶ道徳性を身に付けることが第一義であるとしている。こういう考えを押し出した背景に、彼の朱子学への批判の芽生えがあったという説がある。彼の批判は、朱子学の言う「敬」（心を一つのことに向け、顔つきや言葉遣いをととのえ厳粛にすること）の対象や過程が何であるのかが不明確であり、そのため結局迷いが生じてしまうというものであった。彼の唱えるところでは、有徳の君夫の前では自然に心は慎み深く素直になって不善はできないようになるのと同じで、天網恢恢な上帝にたいする敬虔な心があれば、自然に心がそこへ集中し、自然に容貌・言語も整斉厳粛になるという。ここで“自然に”ということが格別に重視されていることに注目したい。外面をととのえ形式・規範にこだわっていた朱子学的「格法」から離脱し、各人の内発性を尊重するという方向がここに見られる。この精神は、大野了佐という不肖の弟子の学習意欲に付き合い、ついには了佐が分かり易いようにと『捷径医筌』を書き記したという藤樹の個性教育を伝える逸話からも読み取ることができる。

32歳の時、藤樹の代表的著作ともいえる『翁問答』を著した。この書物は、大洲藩にいる学問上の同志・弟子たちの切なる求めに応じ、聖徳を修める道を懇切丁寧にかな書きでわかりやすく記述したものである。『孝経』の受容によって「何ごともみな、父母の恩ならざるはなし。父母の恩は廣大無類にして、恩の大根本なり。しかるゆへに、父母を愛敬するを本とし、おしひろめて餘の人倫を愛敬し、道をおこなふを孝と云、順徳といふ」[11]

と考え、「敬は愛に本づく」という「愛」中心の倫理観に至り、全ての人に普遍的に備わっている「孝」という概念を中心に置いた。自分たちが両親の子どもであるように、両親はその身を天地に受け、天地はまた宇宙の根源、大極にその身を受けたものであると、全てを帰属関係で捉えた。「ばんみんはことごとく天地の子なれば、われも人も人間のかたちあるほどのものは、みな兄弟なり」(12) と、本質的には人間皆平等であるとし、時代に逆らって、「天下の万事は皆末なり。明徳はその大本なり」と説き、「明徳」(天より与えられた心の本体)を明らかにして、身を修め、生活の中で行い磨いていく営みが、正真の学問であると説いた。

同じ時、『王竜溪語録』を読み、これが陽明学に触れるきっかけとなった。藤樹は非常に触発されたものの、当時異端とされていた仏教の言葉が多用されていたため、禅学に近いのではないかと懸念した。

しかし、37歳の時、『陽明全書』に出会い、竜溪の学が禅学でなかったことを知り、それとともに陽明学に大いに感悟したのである。繊細過敏な内向性、熱烈なる向学心、大胆剛毅の気性という気質において自らの思想と共通し、そこに共鳴した藤樹は、王陽明の提唱した「致良知」(13) の教えに目を開かされ、『大学』に立ち返って取り組み、独自の学問を提唱していった。

朱子学を志すも、林羅山ら林家の現実主義的、あるいは実用的な御用儒学に対して強い批判を抱き、理想主義的、あるいは学問の純粋性を尊重するが、晩年までなかなか身にそなわらず、不信感を抱くようになっていた。しかし、長年思索を巡らした結果、陽明学と出会ってようやく学問の糸口を見つけることができたのである。

２．藤樹書院の設立及び終焉

1634（寛永11）年、満26歳の10月に藤樹は大洲を引揚げ帰省した。1603年に徳川幕府がたってから、時代は徐々に武から文の統治へと移行していき、その過程で大洲では武断派と文事派の両派が対立していた(14)。本人に対立する意向がなかったとしても、事実上文事派の頭領格であった藤樹は大洲に居辛くなったため帰省したという説もある(15)。

藤樹書院の発足時期についてはいくつか説が考えられる。それというのも、どの段階において書院が発足したと考えるかによって、その定義は異なってくる。

第一に、書院の建立を持って塾が発足したとする説である。藤樹が塾則を設け、邸内に講学に用いるための長屋（これを「会所」とよぶ）を建てたのは、彼が31歳の折である。ただしその理由は弟子の増加に伴い勉強のスペースを確保することにあり、それ以前に塾は開かれていたと考えられる。

つづいて、藤樹の帰省後まもなく塾が発足したとする考えもある。しかしこれについても、藤樹は帰省後しばらく、母を養うため酒の小売や金貸しの商売、さらに易学の勉強や京通いに時間を費やしていたことから、この時点で塾が発足していたとは考えるのは難しい。

また藤樹帰省後最初の来訪者が来たのは寛永13年（藤樹28歳）のことだったが、彼は江戸へ行く途中に立ち寄ったに過ぎないので、藤樹書院の発足をきっかけに訪れたとは考えにくい。

さらに山住正己の説によれば藤樹先生年譜の30歳の条に「今年始テ谷川寅・落合左兄弟来テ業ヲ門ニウク」(16) とあるため、藤樹30歳、すなわち1638（寛永15）年の折に書院が発足したという考えが有力であるように思われる。

ただし、藤樹は19歳のころより弟子を抱え、近江に帰省後も彼を訪ねる大洲時代の子弟たちもいた。藤樹の評判を聞きつけ、近辺から彼の教えを請うべくして人々が集まり、そういった弟子たちへの教授を行う中で、自然発生的に塾が発足したと考えることも出来る。先述した説のように、ある瞬間をもって藤樹書院が発足したと考えるよりは、評判を聞きつけた弟子たちが増加するとともに、規則を設け、新しく長屋を立て、塾としての体系を整えたと考えるほうが、より自然の流れに即していると思われる。そこで、塾の体系を整えた時期に着目し、藤樹31歳、1639年をもって藤樹書院が発足したという考えを、発足時期を考察する上での一つの可能性としてここに提示する。

1648（慶安元）年２月に、同志達の企画により、屋敷地を買い広め、そこに藤樹書院を建立した。藤樹は書院が落成してまもなくそこへ移り住むが、同年８月に亡くなる。なおこの書院は1880（明治13）年９月に焼失し、２年後に再建された。

藤樹が亡くなってまもなく、藤樹書院は大溝藩により閉鎖を命ぜられ、門弟たちは立ち退きを言い渡された。閉鎖の理由としては、藤樹の林羅山に対する攻撃的姿勢、林羅山による藤樹のキリシタン関係の疑念や王政復古を説いているのではないかという嫌疑などが挙げられるが、定説はない。それというのも藤樹とキリシタンとの関係、及び王政復古思想という政治理念については、明確に記述された資料がなく、裏づけされた理由とは言えないからである。しかしいずれにせよ、幕府から目をつけられていた藤樹の死をきっかけに、藤樹書院は閉鎖へと追い込まれたのである。

３．教育活動の実態と特色

藤樹書院の特色は、「藤樹規」と「学舎坐右戒」からうかがい知ることができる。前者は、後世「藤樹書院」と呼ばれる「会所」で行う学問の主眼を示し、後者はそこに学ぶ弟子たちの心得というべきものを示しており、これらは当時の藤樹の学問と教育の性格が良く表れているといえる。

「藤樹規」は、朱子の「白鹿洞書院掲示」によったものといわれているが、根本の動機は、規にあるように、学問といえば記誦詞章、つまり言葉を暗誦したり、あるいは表現するさいの言葉の綾に苦心したりするという傾向に陥っている現状を憂えたことにある。朱子の「白鹿洞書院掲示」を参考にしたといっても、これを原型に近い形で借用することはできなかった。大きな違いは冒頭の部分に見られ、朱子が真っ先に「君臣の義」以下の五倫の道(17) を挙げたのに対し、藤樹は、「明徳を明らかにする」など大学の道をあげたう

えで五倫を掲げたのである。これは、彼が五倫道徳のさらに根源となるものは何かに迫り、それを明示する必要を感じたからである。また修業を進めていく際に重要なこととして、白鹿洞では触れられていなかった「畏天命尊徳性（天命を畏れ、徳性を尊ぶ)」(18) が挙げられていたのも、重要な違いである(19)。

学問修業をすすめていく方法を示すところでは、朱子が学・問・思・弁の４つを「理を窮むる所以」としていたのに対し、藤樹は「知を致むる所以」と改めていた。この変更の理由は書かれていない。窮理と致知、理と知の違いを考えてみると、生活する人々にとっても身近に知を求め、その知からすすんで理をきわめるという道筋をたどるので、彼はまず知を重視したということになる(20)。

一方、書院における日々の生活を律する具体的な指針としてつくられたのが、「学舎坐右戒」である。女のことをあれこれ評すること、流行歌を軽々しく口にすることを禁止し、動作をきちんとした作法にのっとってすることを重視したが、夕食後については、芸に遊ぶことや、体が疲れているときには逍遥自適することをすすめた(21)。

また、この規には一日の大体の日課も決められている。起床後に孝経を暗誦し、その後は読書輪読或いは講義を聞き、それについて先生に質問し、同輩間で討論した。この討論形式を取り入れたことは藤樹の卓見であり、特徴的な教授法であったと言えよう(22)。

また、藤樹は、師弟の発達段階と、意欲の状態、能力差に合わせた教育を行うべきであるとしている(23)。この顕著なる例として、大野了佐(24) への教育が挙げられる。「了佐嫡子なりといへども稟質極て愚魯鈍昧にして、仕業継ぐに足ざるを以て、父嘗て賤業を営ましめんことを計る」(25)、つまり彼では士業を継ぐに足らないというので、父親は農業か商業、つまり武士から見ると「賤業」に従事させようと考えた。しかし、本人はこれを残念に思い、医師になることを懇望し、藤樹のもとを訪れるのである。そして、当時の医学生必読の書である『医学大成論』を使って教えたが、了佐には困難だと思われる病理論だけは除いた。藤樹は午前 10 時頃から午後 4 時頃までかけて、２、３句を 200 回ほど教えて記憶させるが、夕食後はすでに忘れているという了佐にさらに 100 回あまり読ませたという。このような有様であったため、彼の読めるような参考書を求めても求め得られず、ついに彼に適当するテキストを作成しようと試みたのである。これが『捷径医筌』(26) である。藤樹は一部の原稿が出来る度に了佐を呼んで教え、前のところも復習させるという方法で徹底させてやった。藤樹はこのテキストを作成するにあたり、和漢の医書を求め、中には中国からの新渡の書もあった。「先生は医業を行ふ医人にあらざりしのみならず、其の医学の著述も世に公表せられざりしが故に、其の医学に就ては殆ど世人に知られざりしが如し」(27) と言われているにもかかわらず、これを了佐の理解しやすいように編集するという根気のいる仕事をあえて行ったのである。藤樹は「了佐のような低能の者でも、努力を積み重ねて医学の知識を習得することができた。誰でも強く志を持って学び続けていくならば、愚かな者でも聖人の域に達することができる。ましてや、そこそこの才能を持っている者が、どうして中途半端で投げやり的な求め方ですませて良いであろうか」(28)

と語っている。このような熱心な指導の結果、了佐は一人前の医師として家族数人を養うことができるほど成長したという。

４．門人の身分・範囲

藤樹書院の門人に関する資料として「門弟子並研究者傳」[29]を用いることにした。この資料は藤樹直門の諸氏を中心に据えて、その直門の諸氏から教授されたと思われる縁類者なども藤樹書院の門人として取り扱い、藤樹先生年譜、藤樹先生行状聞伝、藤樹先生書簡集、藤樹先生文集、加藤家臣録、大洲秘録、近江人物誌などを原拠にし、確認できる限りの門人を追究している。この資料によると、門人の総数は 80 名を越えることがわかる。門人の身分は確認できるかぎり、大名池田光政をはじめ、武士がほとんどであったが、その他に平師職（御師）、職人（名工）、住職、医儒などもあった。門人の多くは藤樹書院の開かれた小川村の人や近江国高島郡の郷士が多く、また藤樹が脱藩するまで仕えていた伊予国大洲藩の藩士も多数を占めていた。大洲藩士の門人が多くあった理由として、ひとつに当時瀬戸内海・淀川・琵琶湖を連結する交通幹線が存在していたこと、さらに藩主加藤貞泰はかつて大溝城主であったことから大洲藩士の多くは高島生まれのものが多かったことが挙げられる。（左表は「門弟子並研究者傳」に準じて藤田が作成）

大名	1
幕臣	2
備前岡山藩池田家臣	5
肥後熊本藩細川家臣	2
伊予国大洲藩加藤家臣	11
伊予国大洲藩加藤家臣の可能性のある者	8
他、伊予国出身者（職業未詳）	2
近江国高島郡の武士	7
他、近江国高島郡出身者（職業未詳）	1
小川村出身の武士	5
医儒	2
僧職・神職	2
他、山城国出身者（職業未詳）	2
甲斐国出身の武士	1
筑紫国出身者（職業未詳）	1
摂津国出身者（職業未詳）	1
郷貫不明の武士	1
女（老母）	2
平師職	1
名工	1

（附記）

門人や後人は愛に満ちた藤樹の人柄を敬愛し藤樹学を学んでいた、という後世の評価と門人の階層の偏狭さには齟齬があった原因として、次の二点が挙げられるように思う。まず一つ目に、藤樹が 40 歳、藤樹書院を開いて約 10 年目に早くも逝去し、書院が充分に熟しきる前に離散となったことがある。小規模な塾であったため、期間的に藤樹ゆかりの土地・人物が直門としては限界であったのだ。しかし、その門人達の藤樹学普及の尽力によりのちに広い地域・階層に広まっていき[30]、藤樹の優れた人柄が後世に伝わったので

ある。

二つ目は、当時の大洲藩主加藤泰興が文教の振興・積極的な人材登用という政策において、大洲教学の確立に少なからぬ感化を及ぼした藤樹学の門人を大いに重用したことがある[31]。藤樹の門人であったからこそ、大洲藩加藤家臣に召されたのである。関連して、17 世紀前半のまだ藩校がそれほどたくさん設けられていないこの時代、私塾は武士階級の教育を進め、その水準を向上させるのに大いに役立っていた。指導的社会階層つまり士族の成人たちに、道徳・倫理を重点に置いて業余の学問・教育を施す場であったのだ[32]。よって、藤樹の人柄や教授内容の優劣のためではなく、初期私塾の性質が士族を中心に引きつけたということが言えるだろう。

５．歴史的意義―むすびにかえて―

藤樹書院の歴史的意義については、二つの視点からアプローチできると考えられる。一つは、「孝」の思想を弟子への教育へと拡張し実践した点、そしてもう一つは藤樹が開祖とされる日本陽明学、心学の志を受け継ぐ門人を輩出した点である。

まずは、前者について述べていく。先にも述べたように、藤樹が講義に討論形式を取り入れたことは、当時の塾教育と比較すると目新しい方法であったとされる。彼は師弟間の切磋琢磨を重んじていたのである[33]。また、大野了佐に対する教育に見られるような個人の能力差や需要に応じた個性教育を行ったことも特筆すべき事項である。これらの教育は、藤樹の学問の中核にあった「孝」の思想とも関連づけて考えることができる。親に対する孝とは、直接的に尽くすことだけでなく、子孫をしっかり育てることによって親から継いだ家を繁栄させることも重要であるといえる。藤樹はこの考えを拡張し、しかも厳密に考え、自分の弟子をも含めていた。彼らを立派に成長させることによって、親を始め、先人に安心感を持たせることができる。つまり、弟子の教育も孝の実現の重要な内容として捉えられたのである[34]。

そして、後者にあげたように、藤樹の死後、門人であった淵岡山[35]と熊沢蕃山[36]が彼の志を受け継いだ。淵岡山は、京都に移り住み学館を開いて、藤樹の思想を各地に広めることに努めた人物である。彼の学館には、京都はもちろん、大阪、江戸、伊勢、熊本、会津、岡山などからも入門するものが続き、その門人たちが各地で藤樹の思想を伝えたのである。岡山は70歳で亡くなったが、その死にいたるまで自身の学館を拠点とし、藤樹の教えを忠実に普及することに挺身した。一方の熊沢蕃山も、藤樹学派として歩んでいったわけであるが、藤樹の思想を忠実に受け継いだわけではなかった。彼は、学術・言行は、時・所・位に応じて改めていかなければならず、従って自分のあとから来る者は自分の学の未熟なところを補い、言行が後の世に合わなければ改めるのが良い、という考えを持ち、そうした点において淵岡山の考え方とは異なっていた[37]。蕃山はその後、岡山藩で志を同じくする者たちと共に、学問の理想を政治の上に実現することを志向した。淵岡山と熊沢蕃山、両者の考え方・歩み方はそれぞれ違っていたが、共に藤樹書院で学びそこで教え

られた藤樹の思想を、彼の亡き後も受け継ぎ広めていったのである。

〔註〕

（1）小出哲夫『中江藤樹・熊沢蕃山集』玉川大学出版部、1966年、8頁。

（2）儒教の経書。もと『礼記』の一編。唐の韓愈、宋の２程子に推重され、朱熹が章句を作って四書の一となる。明徳・止至善・新民の３綱領と、格物(事物に本来そなわる理に窮め至ること)・致知・誠意・正心・修身・斉家(家庭をととのえ治めること)・治国・平天下の８条目を説く。

（3）「藤樹先生行状」(『藤樹先生全集』巻五、岩波書店、1935年、所収)、53頁。

（4）藤樹の家と隣り合う、大洲藩300石の家に生まれた。藤樹の４歳年上で、早くからよく知り合っていた仲。

（5）『四書大全』をもとにして書かれたものであるが、後に自分で読み直し、精密に書かれていないので残すに値しないと判断、自ら破棄した。

（6）安田安昌がその師菅玄同を弑したのを、林羅山の子・左門が安昌の罪を非難し、玄同を醇儒として擁護したのに対し、玄同の決して醇儒でないことを反論したもので、藤樹が初めて学の意義を論じた。

（7）孔子が巡行していた時､皐魚という男が親を省みずに学問に熱中している間に親が亡くなってしまったことを嘆き悲しみ、自ら枯れ木が倒れるように死んでいったのを目にして、弟子たちに親の存命中に孝養を尽くすことの大切さを戒めたという故事。

（8）後藤三郎『中江藤樹伝及び道統』理想社、1969年、78-79頁。

（9）同上、89頁。

易の筮儀を研究した動機として、年譜に「易ノ理ニ於テハ心ヲ尽クサバ万一ヲ得ン」とある。

(10) 易の由来や原義、筮法などの書かれた書物。ただし、前年の門人宛ての手紙に、すでにこの書名が出ており、読んだ形跡があるため、同じ朱子の作だが、『周易本義』ではないかとの見解もある。

(11) 中江藤樹「翁問答」(前掲『藤樹先生全集』巻三、所収)、82頁。

(12) 同上。

(13) 藤樹は「良知(人間の心の本体であって、誰もが生まれつき備えている徳性)に致る」と読み、陽明の場合よりも内省的、静観的であり、良知を曇らせる人間の意念、つまり情欲を取り除くことを大切な修行の眼目にするものである。

陽明は「良知を致す」と読み、より行動的、積極的であり、自らが事に当たって錬磨することに重心を置いている。

(14) 木村光徳・牛尾春夫『中江藤樹・熊沢蕃山』明徳出版社、1978年、35頁。

(15) 同上、50頁。

(16) 「藤樹先生年譜」(前掲『藤樹先生全集』巻五、所収)、13頁。

(17) 他は「父子親あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり」。

(18) 中江藤樹「藤樹規」(前掲『藤樹先生全集』巻一、所収)、133 頁。

(19) 山住正己『中江藤樹』、150 頁。「徳性」とは、人が上帝から受ける人としての明徳であり、そ

れを常に尊重し、そこから離れてしまわぬように努めることが大事だとしている。

(20) 同上。

(21) 中江藤樹「学舎坐右戒」（前掲『藤樹先生全集』巻一、所収）137 頁。

(22) 小野禎一『日本教師論―松陰・藤樹・淡窓に学ぶ―』近代文藝社、1991 年、145 頁。

(23) 「藤樹先生年譜」（前掲『藤樹先生全集』巻五、所収）19 頁。

(24) 新谷藩士大野勝介の二男。勝介は尾張の出身、朝鮮出兵後、福島正則に仕え、大阪の陣の後、大洲藩に仕え、新谷分封の際にこれに従った 300 石取りの武士。

(25) 「藤樹先生年譜」（前掲『藤樹先生全集』巻五、所収）19 頁。

(26) 後の 1655(明暦元)年に伊吹屋権兵衛により刊行され、一般にも流布する。

(27) 中江藤樹「医学成書」（前掲『藤樹先生全集』巻四、所収） 1 頁。

(28) 久保田暁一『中江藤樹　道に志し孝を尽くし徳を養う生き方』致知出版社、2006年、40頁。

(29) 「門弟子並研究者傳」（前掲『藤樹先生全集』巻五、所収）241-346頁。

(30) 後藤三郎『中江藤樹伝及び道統』理想社、1970 年、256 頁。

熊沢蕃山の教育活動や淵岡山学派の伝播に藤樹学の普及をみることができる。蕃山は藤樹の精神を継承発展させて、大思想家・大政治家となり、多数の書を著した。藤樹の道徳思想の実践は淵岡山を通じて各地に継承され、会津では特に盛んであった。

(31) 影山昇『愛媛県の教育史』思文閣出版、1983 年、147-150 頁。

(32) リチャード・ルビンジャー；石附実、海原徹訳『私塾：近代日本を拓いたプライベート・アカデミー』サイマル出版、1982 年、40-44 頁。

(33) 前掲『藤樹先生全集』巻二、147頁。

(34) 前掲、山住正己『中江藤樹』、135-136頁。

(35) 奥州仙台に生まれ、長じて幕臣一尾伊織に仕えた。主命で度々近江に滞在していた折、藤樹の人柄や学問を聞き惹きつけられ、教えを受けるべく小川村にやってきた。

(36) 京都に生まれ、16歳で備前岡山藩池田光政に仕えた。藤樹に学んだ後、学問の理想を政治に生かすべく努めたが、幕府の警戒するところとなった。晩年幽閉の身となり73歳で没している。

(37) 前掲、山住正己『中江藤樹』、236頁。

＜小林幸子・坂田瑞希・鳥居徹也・藤田亜美＞

第三章　古義堂―近世の学問研鑽としての私塾―

１．塾主の経歴

『古学先生行状』（以下『行状』[1]と表記する）によると、伊藤仁斎は、寛永四（1627）年七月二十日、材木商人の父了室、母那倍の長男として京都堀川の地に生まれた。諱は、はじめ維貞、のち維禎。仮名（通称）は、源吉、源佐、源七。屋号は、鶴屋七右衛門。仁斎は号であり、諡号は古学先生。主著として、『論語古義』『孟子古義』『語孟字義』『中庸発揮』『童子問』『古学先生文集』などが挙げられるが、生前は講義と著述の整理・推敲に尽力し、著作を公刊することはなかった。先祖は泉州堺の人であり、兵乱を避け、京都堀川に移住し、商業を営んだ。母那倍は里村玄仲の娘であり、祖父里村紹巴は連歌師としても名高い。

仁斎は、十一歳のときから師について句読を習い、『大学』をはじめとする四書を学んだ。また、若きころの仁斎は詩を詠み、文章を綴ることに優れており、周囲を驚かせたという。十九歳のとき、朱熹編の『延平答問』を読み、強い感銘を受け、それより朱学に傾倒し、『性理大全』『朱子語類』等の書を読む。二十九歳のとき、仁斎は家を弟の七左衛門にゆだねて、松下町に隠棲する。道学への志をもつ仁斎に周囲は医師になることを強くすすめたという。これらを押し切り、自らの志を貫いた結果が、松下町への隠棲であった[2]。

仁斎は、寛文の初年に日常の人倫に反するとの理由で朱子学を捨て、『論語』『孟子』にさかのぼって研究し、独創的な古義学を唱えた。仁斎は三十二歳のときに『仁の説』を著したが、この文章からは実とするべきものの手触りを彼が持ち始めたことを伝えている。三十五歳のときには、同志会という学習組織を作り、寛文二（1662）年、三十六歳のときに堀川に戻り、古義堂を開く。生涯仕官はせずに、この私塾で 40 年間に 3,000 人の門生を指導した。四十六歳のときには、細川候の招きを受けるが、彼は病に倒れていた母を気遣ってそれを辞し、生涯市井にあって一儒者として過ごす。五十七歳で『語孟字義』を成し、このなかで儒教の基本概念についての宋学的規定を否定しつつ、仁斎の論孟二書熟読の体験に立って解読した。この時期が、仁斎の学問の基本的な確立の時期と見ることができる。

宝永二（1705）年三月十二日、七十九歳で没する。

２．学問的背景

富裕な商人の子として生まれた仁斎は、恵まれた環境の中で幼少期を過ごし、早くからその才覚に話題を呼んでいた。十一歳のときに句読を習い始め、十九歳のときには朱子編の『延平答問』に感動し、紙がすり切れるほど反復して読んだという。これは、かつて仁斎が宋学あるいは朱子学にいかに深く傾倒していたかを物語っている。しかし、二十九歳のとき病を得たこともあり、突然家督を弟に譲って、松下町の別宅に隠棲してしまった。

その後彼は、三十六歳までの間に朱子学への強い疑念を抱くようになり、やがてそこから離脱して、古義学という新しい学問の形成を成し、後世の一切の注釈を斥けて、直接中国古代の聖典、それも『論語』『孟子』の二書に学ぶいわゆる「古学」(3) の土壌が養った。仁斎は『論語』『孟子』味読の体験を通じて、朱子学的概念としてすでにある「性」や「徳」を読みかえ、とらえ直し、そしてその体験を根拠付け、語りうる言葉を見出していった。

仁斎は、自らの学問観の核心を指すものとして「学問道徳を以て本と為、見聞を以て用と為」(4) と言っている。しかし、学問研究の方法として、なお『論語』『孟子』などの古典の徹底した考証＝実証を重視した。伊藤仁斎にとっては学問の目的は道徳にあって、それはやがて教育の理想でもあった。仁斎は個性尊重の思想をもち、個性の長所を見出してこれを伸ばすべきであると説いた。また教育を行う場合、人をだましたりこじつけたりして、自己の短所をかくしたり人に迎合したりすることあってはならないとして戒めている。仁斎の説く道とは、日常の人と人との交わりに尽きるというものでもあるが、人と人の努めるべきこととして、彼は常に孝弟忠信に眼目した。このような説は、朱子学派からしてみると、平俗・卑小と称される。しかし仁斎は、道とはただこのように孝弟忠信に眼目することの平正さに、聖人の教えの真意を把握したのであった。

仁斎の古義学とは、このことを『論語』熟読の体験によっていっそう深め、また『孟子』味読の体験によってそれを裏づけることをいうのである。このような仁斎の立場は、『童子問』と『論語古義』によって見ることができる。まず『童子問』で、

> 卑きとき則ち自から實なり。高きときは則ち必ず虚なり。故に學問は卑近を厭ふこと無し。卑近を忽にする者は、道を識る者に非ず。子夫の大地を察するや。天下地より卑きは莫し。然れども人の蹈む所、地に非ずといふこと莫し。地を離れて能く立つこと無し(5)。

「卑きとき則ち自から實」とは、日常の人々が「蹈む所」に立って、既成の学問の有する価値観を仁斎が転倒させようとし、卑近なものこそ真実であり、実質的内容を有すると示している。また、『論語古義』においては次のように述べられている。

> 蓋し天地の道は人に存す。人の道は孝弟忠信より切なるは莫し。故に曰く、「惟孝弟忠信を言て足れり」と（『論語古義』の学而篇曾子三省の章の論注）(6)

これから読み取れることは、仁斎が実としたのは卑近なものとして大地に比でられうる人の道であり、その人の道において大切なのは孝弟忠信より他にはないとしたのであった。仁斎の学問とは、『論語』を読みぬいてそれに価値を置き、仁斎の思想とは、人と人の日常の交わりに尽きるといいうる人道を根幹としたものであったといえる。

３．設立の経緯

開塾の前年である、寛文元年の冬、松下町の仁斎の家に何名かの同志が集まり、研究会設置のための打ち合わせの会がもたれた。席上、同志会という学問研究の団体を結成すること、例会の会場は仁斎の家で、例会の日には各自、お茶と果物を持参すること、原則として月三回例会を開くことなどを決めた[7]。

二十九歳から七年の間、仁斎は隠棲生活を行っていた訳であるが、隠居初期の頃は井上養白という一人の学友しか有していなかった。だが、その終期には学問を志す友人を数名招いて、上記のように同志会を結成する運びとなり、学問交流の機会を得ることができた。そして、寛文元（1661）年の冬に「同志会」なる共同研究会を創設した。

同志会の詳細については、伊藤倫厚によれば、会員が交互に講義者、賛者となり、会長を推薦で決めていた。この様に、同志会は学問的興味を同じくする仲間が共同学習し、切磋琢磨する集まりの場であった。同志会という名称からもわかるように、この会の特質は、寛容互助の同朋意識、及びおよそ師弟という関係にあっては考えられないような平等の感覚をもって運営されていたことが推察される。

開塾の直接のきっかけとなったのは寛文二年に起きた大地震だった。これを期に、七年間の隠棲生活に終止符を打った仁斎は、生家に戻り「古義堂」を開塾した。

仁斎の講義は会塾の翌年、寛文３（1663）年より始められた。古義堂設立後も、同士会は共同研究会として延宝年間（1673～81 年）まで存続した。同志会の位置づけに関しては正確なところは分かっていない。

同志会は共同研究会の一種であるが、それが古義堂の教育にどう位置づいていたかは必ずしも明らかではない。つまり古義堂では同志会に平行して入塾者を対象にした講義が行われていたと見るべきか、そうではなしに古義堂は同志会のセミナー方式が徐々に発展していったもの、同志会を中心にしながら、その周辺に諸種の教育を配したものと考えるべきか、正確なところはわからないのである。

古義堂開塾後６年を経過した寛文８（1668）年の「同志会品題式」および翌年「同志会示諸生」などをみると、同志会への参加者は品題、人物の値打ちによって三科九等のランクに分けられていて、その上下のために毎月はじめに諸生が相互にその善悪を書き付けて、塾主仁斎の許に提出することとなっていた[8]。

４．門人の身分・範囲

古義堂における門人については、『行状』にて様々述べられている。また、後述するように、「初見帳」などの門人帳簿に相当するものが、仁斎が 56 歳から 73 歳に至る 17 年分現存しており、それによるとこの 17 年間だけでも 729 人の名前がある。門人の正確な数については必ずしも定説はないが、『行状』によれば彼の人生 79 年間では 3,000 人余りの門人があったと伝えられている。門人の出身地は全国に及び、上層町衆の子弟や武士などを対象に講義が行われ、紹介形式で、漸次生徒数が拡大していった。出身地として多数を

占めていたのは山城で、近隣の近江、摂津、大和、丹波、播磨がそれに続いた。僅か７年間で全国三十九ヶ国から生徒が集まったといわれている。遠隔地としては、九州の肥前や長崎からも７名の入塾者があり、例えば貞享２（1685）年長崎出身である酒泉忠ノ進が長崎の者２名、筑前のもの２名に紹介するなど、門人が新たに他の人を紹介するといった形で拡大していったようである。次に、具体的な門人の名前を挙げて紹介する。木村信甫は秋田の人で、聾者だった。彼に対して特別な方法で講義が行われたかについては不明である。渡邊希憲は好学の人で、はるばる日州から来て京都に遊学し、仁斎の噂を聞きつけてやってきた。山下自白は懸河の人で、彼もまた京都に遊学し、勉学にいそしんでいた。渡邊元安は日陽の人で、京都で５年遊学した後、仁斎のもとへ来た。松岡玄達は京都の人で、仁斎の他に山崎闇斎にも儒学を学び、次いで稲生若水に本草を学んだ。のち本草学者となって吉宗の享保の改革に伴う国産薬の調査に加わり、力を発揮した。そして、仁斎の門人の中でも抜群の才能を持っていた１人が、並河天民である。伏見横大路に生まれ、“天資聡明”だった。始めは仁斎のもとで黙々と学んだが、物足りず、孔子・孟子の真の教えを自得しようと試み、日夜研究に励んだ。有名な門人としては、大石良雄が挙げられる。播磨国赤穂藩の筆頭家老で、赤穂事件で名を上げ、忠臣蔵で有名になった。「内蔵助（くらのすけ）」というのは通称である。古義堂には元禄６年（1693 年）に入門した[9]。

５．教育活動の実態と特色

繰り返しになるが、十一歳で句読を習い、漢詩を作り始めた仁斎は、十九歳の頃には儒学を志して多くの朱子学関係書を読んだ。このころの仁斎は、ほぼ独学同様に朱子学を学び始め、とくに超感覚的な根源的実在の認識を志す理気二元論に傾倒した。彼の著述は二十七歳にして朱熹の「敬斎蔵」に感じて「敬斎記」を草したのが始まりであった。寛文二年（1662 年、三十六歳）、自宅に私塾「古義堂」（ただし、仁斎の生前にこの名称が使用されていたことを裏付ける資料は確認されていない）を開設してからのちは、古義学という仁斎独自の学説に基づき、「三書古義」等の成稿につとめ、生涯それらの改稿補訂を続けた。総体的に、仁斎学は朱子学の克服を目指して形成され、まず朱子をはじめとする先行の注解を排除して『論語』『孟子』を熟読することが求められた。後年、仁斎はその仁斎学の大綱ともいえる『語孟字義』『童子問』を著したが、彼は生前自ら著作を一冊も刊行しなかった。なお、仁斎は母方（里村氏）の影響や上層町衆との交友もあってか、和歌もたしなんでいた。

古義堂の塾風は、仁斎の人柄が反映され温厚篤実、共同研究・演習的要素の学習法が採用された。堀川をはさんで相対し、厳格な講義が行われていた山崎闇斎塾（朱子学）とは対蹠的であったという[10]。古義堂は幾度か火災に遇い、蔵書の一部を処分せざるを得ない貧苦な時期もあったが、二百四十年余歴代塾主により受け継がれ明治期まで及んだ。

古義堂開講と同時に設けた「同志会」は、共同研究会として、例会日を定め、輪番で講者を努め、のち質疑を行う学問研鑽の場であった。師の講釈が主であった当時の塾にあっ

て、古義堂の学習法は他に類を見ない独自のものといえる[11]。毎月３と８の日に『論語』『孟子』『中庸』の三書を反復講義し、そのかたわら『易経』『大学』『近思録』『書経』『春秋』などの論講も行われた。この同志会を通じて得た成果は、『誠修筆記』に四十八則（条）にまとめて筆録されている。同志会は約十一年続き、仁斎が父母の喪に服している延宝元（1673）年から同四年の間に休止され、その後再開されなかった。喪が明けて後、元禄二（1689）年仁斎六十三歳の頃には、講義日割は、３と８の日の他、１０と５、１と６の日も加わり、また当日は朝食後、昼過ぎ、夕方の四回、つまり早朝から夕刻まで一日中講義をするといった進め方であった[12]。

古義堂において、門弟に学問の真偽や処世の善し悪しを問うたものに「私擬策問」というものがあった[13]。仁斎のそれは、『古学先生文集』巻五に、寛文元年（三十五歳）から元禄十年（七十一歳）の二十篇が収録されている。ここに収められているものから推測されることに、策問は聖人の諸説中の矛盾の批判、曾子の三省に孝がない理由かなぜか、学問の真偽を論じ、仁義の區別等々の問題などについて、「願はくは其の説を聞かん」「幸に隠すこと勿れ」などとしたもので、そこに仁斎の学的な疑問と見るべきものが現れているのを見ること、問題を弟子たちに提示することによって、及び弟子よりの問題解決の暗示を得ることによって、仁斎自身の古義思想そのものが愈々進展していったのであろうことを察することができる。この思想的教育である策問は、仁斎の時代に最も長く行われた古義堂の教授法であり、その具体的な質問内容は主に古典解釈に関するものであった。これは東涯の時代になっても続けられ、盛んに行われた事が記録を通して知られている[14]。

また古義堂では、仁斎が漢文力を高める方法として、漢文を読み下し文にし、さらに原文に戻すという教授法を初学者に実践していた。この訳文会と称される漢文学習会は、天和三年（１６８３）九月から始められ、古義堂文庫には仁斎自筆の自身の訳文[15]も十四枚伝存する。この訳文会を発展させたものに、元禄七年（１６９４）八月発足の制義会がある。制義とは、中国において官吏登用試験の際に用いられた論文形式であるが、仁斎は課題を漢文で論説することによって、その文章力を向上させようとして制義会を設けた[16]。これは、後世の漢文教授におけるいわゆる復文であり、仁斎の独創的な教授法であり、制義は中国の宋明の科挙の法に基づいたものではあるが、これをとって教育の方法としたのは仁斎が初めてであった。

仁斎は、このような教授法に基づいた講義を行う傍らで、『論語』の注釈に生涯精根を傾けた。その注釈書が『論語古義』であり、朱子学的解釈を排し、孔子本来の思想・原義を究明し、古義学を唱道する起点となった基本著作である。『論語』『孟子』に『中庸』を加えて「三書」と呼び、その解説に心血を注いだ仁斎は、『語孟字義』において『論語古義』『孟子古義』の二書の成果を集約した古義学の精髄ともいうべき著作を残した。この中で、上下二巻に「天命」「忠信」「徳」など計三十項目の要語・実践倫理の徳目をあげ、自己の思想を展開した。また、『童子問』は、童子との問答形式をとり、生涯にわたり思索・究明してきた思想を述べたもので、『語孟字義』とともに、古義学の真髄を窺い知る代表作であ

る。

６．塾の中断と興隆

仁斎は４０代後半期に、あいついで災難にみまわれた。延宝元年５月の京都の大火では、自宅が延焼し、学者にとって命ともいうべき蔵書やノートの類が灰となってしまった。一家は京極大恩寺に仮住まいすることになるが、その二ヶ月後の７月には三年間、肺結核を患っていた母の那倍が避難先で病状を悪くして他界した。

大火のあった歳の暮れには、堀川の新居が完成するが、翌年の９月に、母の喪があけきらぬ仁斎の元に更なる不幸が重なり、父了室を失う。この後、4 年間の年月を父母の喪に服する事（１７）になるが、その間飢饉に見舞われ、救米を受けるまでの貧困を極める事となった。

この様に度重なる災いによって、学業に勤しむことさえ困難な状況におかれた仁斎は、塾での講義及び同士会での研究活動は、中断を余儀なくされることとなった。
長期に渡る服喪は、仁斎をやむなくして学問より離れさせ、さらには毀瘠という名の病にもおかされ体の衰弱を招いた。

両親の喪があけてほどなくして、延宝４年 10 月、五十歳の仁斎は講義を再開し始めた。この頃から講義の形式は、「行状」の記録するところによれば、毎月三と八の日を定めて輪読するスタイルがとられるようになった。『論語』『孟子』『中庸』の三書を順次取り上げ、終わればまた初めに戻るという具合に読み進め、講釈を仁斎が行った。ほかにも、論講といって、門人達に公爵を担当させる輪読も行っており、その範囲は『春秋』『周易』『大学』『近思録』などの書物にも及ぶというものであった。この形式は仁斎が七十九歳で没するまで、約 30 年間に渡って連綿と続けられていくこととなる。

講義を再開してから、仁斎に対する世間の評価は、日に日に高まっていく。仁斎の息子である伊藤東涯が記した『行状』には以下の様な記述が残っている。

> 名望日に隆にして、遠邇に達す。搢紳家、左を虚しくして持って待す。乃至士庶の従来して京を過ぎり、稍志有る者、有学無学を問わず、一たびその面を識り、一たびその講を聴くことを願わざるごとなし。道要を叩問し、疑難を質正し、虚にして往き実にして帰り、歎服せざること莫し。刺を投じ来謁する者、録に著すること凡そ三千余人（１８）。

晩年の仁斎は、実際、京都あるいはその周辺の数多くの高級医人、専門文化人、公卿、さらには豪商といった貴紳と足しげく交友している。この様な幅広い人脈を持つことで、仁斎並びに古義堂の評判が高まったのはいうまでもなく、門人に関して、東涯は『盍簪録』という書物の中にも以下の様に記している。

先人生徒を教授すること、四十餘年。諸州の人、國至らざること無く、唯飛騨・佐渡・壱岐等、二三州の人、僻遠にして録に著れず。門に及んで謁を執るの士、殆ど千を以って數ふ[19]。

前出の「凡そ三千余人」もしくは「殆ど千を以って数ふ」の部分は多少誇張の要素も否めないが、仁斎自筆の門人帳（『初見帳』および『諸生納禮志』）に、延宝９年から元禄 12 年までの間に塾を訪れた人士として、実に 729 人の名姓・郷里が記されている点からも相当数の生徒が古義堂を行き来していたのは間違いないだろう[20]。この様な、多数の人士の中には、仁斎の学問・人格に惹かれて門を叩いた者の他にも、物見遊山のついでに好奇心から仁斎の風貌にひと目接しただけの者も含まれていただろう。いずれにせよ、仁斎は晩年に至って、名声嘖々、紛れもなく京都方面の学会における重鎮となっていた事が、多くの人士が彼を慕い遠路はるばる集まってきたという事実から推察される

民間の一私塾が何故ここまで普及繁栄したのであろうか。仁斎自身の出身が洛中の有利な商人であり、幅広い人脈をもっていたことも事実であるし、人々を指導し助成するいわゆる教育者としての才覚があったことなども無視できない。塾の位置した京都が学問文化の中心として全国各地から多くの好学の集めていたことも大きいであろう。其の他、種々の要因が考えられるが、やはり決定的には古義堂の登場した時期、すなわち寛文年間（1661～73）の頃は、まだ昌平校（幕府直轄学校）や諸藩が設置運営する藩校などの、いわば官立学校がほとんどなく、私塾が事実上その代替物として機能したことがあげられよう。

７．歴史的意義

古義堂における教育について最も注目すべき点は、江戸時代の早い時期から、講義形式ではなくゼミナール方式が採られていたという点である。『行状』に「或は私擬策問して以て書生を試み、経史論題を設けて以て文を課す。月ごとに率ね以て常と為す」[21]とあるように、聖人の諸説の中に見られる矛盾への批判・曾子の三省に孝のない理由・学問の真偽・春秋の解釈についての疑問・仁義の区別等の問題など、仁斎の学問的煩悩又は疑問と見られるものについて、「願はくはその説を聞かん」「諸君以て如何と為す」などとして師弟に問題を提示し、師弟からの問題解決の暗示を得ることによって、仁斎自身の思想そのものが進展していったであろうことが察せられる。また、このように絶えず進みつつある努力の成果を門弟に示すことによって、仁斎学的精神や考え方を門弟にひしひしと伝えることにもなった[22]。後、門人の数が増えるにつれて講義形式に変わっていくこととなったが、江戸初期からこうした授業形式の在り方を見せたという点は、注目に値する。

また、このような仁斎の学問や教育は、肯定的であれ否定的であれ、日本全国の諸学派に大きな影響を与えた点も重要である。例えば徂徠学は、仁斎学への批判から護園学派を形成していった。また、仁斎の教育方法は水戸学にも影響を与え、曾澤正志斎の『下學邇言』では「伊藤氏は古学を唱へ天地を以て活物とす、其の言、仁を以て旨とし、擴充、培

殖、火然、泉達の義を発明す」[23] などと賞賛されている。

〔註〕

（1）『行状』については、『古学先生文集』（近世儒家文集集成第一巻『古学先生詩文集』ぺりかん社、1985 年、所収）巻之一に収録されているものを利用した。

（2）子安宣邦『伊藤仁斎の世界』ぺりかん社、2004 年、42 頁。

（3）「古学」とは、一般的に、山鹿素行の「聖学」、伊藤仁斎の「古義学」、荻生徂徠の「古文辞学」の総称として理解される。後世の解釈によらず、論語などの経典を直接実証的に研究する。その実証的な研究態度は国学などに影響を及ぼした。

（4）伊藤仁斎『語孟字義』（日本思想 11『伊藤仁斎集』筑摩書房、1970 年、所収）、173 頁。

（5）伊藤仁斎『童子問』（日本古典文学大系 97『近世思想家文集』岩波書店、1966 年、所収）、73 頁。

（6）前掲、子安『伊藤仁斎の世界』、38 頁、の引用文に従った。。

（7）伊藤倫厚『伊藤仁斎・伊藤東涯』明徳出版社、1983 年、30 頁。

（8）加藤仁平『伊藤仁斎の学問と教育』第一書房、1979 年復刻版（原本は、目黒書店より 1940 年に刊行）、85-99 頁。

（9）この項での記述は、基本的に同上文献・同上箇所の記事に拠った。

(10) 天理大学附属天理図書館編『古義堂文庫展:伊藤仁斎没後三百年を記念して』天理ギャラリー、2005 年、21 頁。

(11) 同上、22 頁。

(12) 山本正身「伊藤仁斎の生涯と教育活動に関する素描」（慶應義塾大学三田哲学会『哲学』第 111 集、2004 年、所収）、116-121 頁。

(13) 東涯の註記するところによれば、「或は策問と曰ひ、或は私擬策問、私試策問と曰ふ。本と義例無し、皆、本に従ふ」（『古学先生文集』巻五、二丁）とある。なお、以上は、前掲の加藤仁平『伊藤仁斎の学問と教育』、109 頁より引用。

(14) 同上書によれば、「『紹述文集』巻十七に「策問類」がある」（112 頁）と説明されている。

(15) 『古学先生訳文』をさす。これとは別に『古学先生訳林』があるが、これは古義堂三代東所が編纂したもので、五巻から成り、仁斎及び東涯と小河立所など門人たちの訳文を集めたものである。加藤仁平『伊藤仁斎の学問と教育』によれば「東所自筆の明和七年（１７７０）序文には、仁斎が意図した訳文の効用が述べられている」（同書 23 頁）と説明されている。

(16) 加藤によれば、「元禄七年から同九年にかけての門人たちの制義文を、後年東涯が編集したものが『制義録』である。これからは、毎月一日を会日として活動していた様子が窺える」（同上書、24 頁）と説明されている。

(17) 儒者である以上、喪に服する事は必須であり、母のために期年の喪、父の為に３年の喪に服した。

(18) 前掲『行状』（前掲『古学先生文集』、所収）、10 頁。

(19) 伊藤東涯『盍簪録』巻之二（全四巻）「紀實篇」（慶應義塾大学図書館所蔵の写本を使用）。

(20) 前掲『伊藤仁斎の学問と教育』、157 頁。
(21) 前掲『行状』(前掲『古学先生文集』、所収)、10 頁。
(22) 前掲『伊藤仁斎の学問と教育』、109 頁。
(23) 曾澤正志斎『下學邇言』清岡殿蔵梓、1847 年、巻二、 7 頁。

＜佐藤由衣・富田沙木子・山口沙織＞

第四章　咸宜園―近世最大の私塾―

はじめに

本章では、広瀬淡窓の咸宜園について以下のように明らかにすることを目的とする。第一節「塾主の経歴・学問的背景」では、淡窓の経歴、そしてそれがどのような学問的背景を生み、塾にどのような影響を与えたのかを考察する。第二節「設立の経緯・歴史的考察」では、淡窓が塾を開く決心をするまでの経緯と、塾が咸宜園として成立するまでの推移、また、塾のあった日田の歴史について考察する。第三節「教育活動の実態と特色」では、月旦評、三奪法を中心とした咸宜園の特徴的な教育活動を考察する。第四節「門人の身分・範囲」では、門人の身分や出身地を考察し、また、それらと咸宜園教育の特色との関連も考察する。第五節「歴史的意義」では、第四節までを踏まえ、そこからどのような歴史的意義が咸宜園に見出せるのかを考察する。

１．塾主の経歴・学問的背景

まず、淡窓の経歴について考察する。淡窓の経歴に関して用いられる一般的な史料は淡窓が嘉永元（1850）年に著した『懐旧楼筆記』である。

淡窓は天明二(1782)年、豊後日田・豆田魚町の商家広瀬家の長男として生まれた。

2 歳の時、伯父月化夫妻の家である堀田村の秋風庵に移った。秋風庵は、森や田園に囲まれた日田の郊外にあり、淡窓はそうした自然豊かな環境の中で、俳諧の道に精進していた伯父のもとで育てられた。

6 歳の時、魚町の実家に戻り、父母のもとで読書、習字を習い始めた。その後も淡窓の勉学は急速に進み、その才子ぶりが評判となった[(1)]。

16 歳の時、淡窓は福岡の亀井塾に入門し、詩の指導を亀井南冥から、文章の指導をその息子の昭陽から受けた。亀井塾は徂徠学派であり、寛政異学の禁の影響により当時塾の規模は大幅に縮小していたが、淡窓はこの塾での勉学によって古学派の流れを受け継いだ。しかし、淡窓は 19 歳の時に病にかかり、僅か三年で亀井塾を去ることになった。その後淡窓が療養しながら独学で学んだのは程朱学が中心であり、このように若い頃に様々な学派について学んだことが、後の淡窓の思想を生むことにつながったと考えられる。

淡窓の経歴を見ていく中で忘れてはならないのが淡窓の「病気」である。淡窓は生まれつき病弱で、その生涯の三分の二を病床で過ごしたとさえ言われ、生命が危険にさらされるような大病には三度もかかっている。病弱であるが故に家督を継がずに儒者として身を立てる決心をしたのであるから、病気は淡窓の職業に影響を与えたと言えるが、それだけでなく、淡窓の思想にも影響を与えた。淡窓が抱えた病気の中の一つに眼の病気がある。淡窓は若い頃経書を詳しく読み進めると眼が腫れて痛み、眼を使いすぎると中年以降は失明すると医者に診断された。これは読書が必須の学者にとっては致命的で、淡窓は不本意

にも細かい註釈を読まずに経書の本文を読み進める本文主義をとった。しかし、本文を自分なりに解釈したことで、結果的には淡窓独自の思想をつくり上げることになったのである[2]。そして淡窓のこの姿勢が、学派や淡窓の思想を門人に強制しない咸宜園の学風に表れているとも考えられる。

では、淡窓は一体どの学派に属しているとするのが適当なのであろうか。深町浩一郎によると、江戸時代の儒学の学派は、幕府の官学であった程朱学派（程子・朱子らの学説による学派）と、私塾を中心とした伊藤仁斎・荻生徂徠の古学派（孔子・孟子などの古典を直接研究しようとする学派）と、これらを折衷した折衷学派の主に三つが挙げられる[3]。この分類に基づくとすると、前述したように、淡窓は古学派の塾で学んだのであるから、古学派に属するとまず考えられる。しかし、「淡窓は徂徠と異なり学問を経世済民の学としなかった」[4]、「徂徠の敬天[5]は政治的、淡窓のそれは生活上・人生上の命題である」[6]など、古学派に属するとする説に対しては多くの反論がある。また、淡窓は当時異端とされていた老子の思想に興味を示し、老子に基づいた著書『析玄』を書いているので、老荘学派に属すると考えることができる。しかし、淡窓の老子への傾倒は晩年のことであり、生涯を通じて老荘学派であったとは言えない。そこで大正時代に入って、折衷学派に属するという説が出てきたが、折衷学は程朱学と古学からそれぞれの長所を寄せ集めたという面が強く、前述したように注釈を読まずに本文主義をとっていた淡窓を、程朱学でも古学でもないという消極的理由で折衷学派とするのには裏付けが足りない。また、淡窓自身も自分の学問について折衷学派であることをはっきりと否定している[7]。よって、淡窓はどの学派にも属さないとするのが現在は有力である。ただし、どの学派にも属さないと言い切るための「独自性が十分に捕らえられていない」といった反論もあり、現在までに研究者の間ではっきりとした結論は出ていないようである。しかし少なくとも、淡窓のこのように学派の断定が難しい自由な思想が咸宜園にも反映され、当時の人々にも受け入れられたことは確かであろう。すなわち、世の若者やその親は塾に入って漢籍を読む能力を身に付けることをまず期待しているのであり、学統学派を継承するような学者になることを目指しているわけではないのである[8]。

２．設立の経緯・歴史的考察

前述したように、淡窓は家督を継がずに儒者として身を立てる決心をした。しかし、そのような決心に至るまでに、淡窓には様々な迷いがあったことが分かっている。当初は多くの友人、知人に勧められた医業を志そうとしたが、医を学ぶには遊学が必要であり、病身で遠方への遊学は覚束なく、思案をめぐらす中に、一二年が過ぎてしまった[9]。また、病弱であるから、江戸・京都・大坂で塾を開くことも士官することも不可能であり、儒者として身を立てるには日田で塾を開くしか道がなかったが、生計するに足る生徒が集まる保障がないという不安があった[10]。このように自分の進むべき道を迷っていた淡窓は、文化元(1804)年、日田に来訪した倉重湊に書を送り、自らの進路について助言を請うた。

倉重は肥後の医師であり、以前に淡窓の重病を治した人物である。しかし、数日経っても倉重からの返事はなく、淡窓は倉重を直接訪問することにした。すると、倉重は届いていた書を地面に投げ捨て、淡窓が儒学に優れていながら進路を迷っていることを厳しく叱責し、儒者として身を立てる覚悟を決めるよう激励したのである[11]。この倉重の叱咤激励により、淡窓は塾を開くことを決意した。

文化二(1805)年、淡窓は 24 歳の時、豆田町長福寺の学寮を借りて初めて塾を開いた。そして淡窓自身も学寮に転居した。実家に近い長福寺にわざわざ淡窓自身が転居したのは、倉重から「独立自営し依頼心を剪除せよ」[12]との助言があったからである。しかし、学寮には旅の僧が泊まることが多くなり、約三ヵ月後に、やむなく実家の土蔵に塾を移した。

この年の８月、淡窓は長福寺と同じ豆田町の大坂家林左衛門の持ち家に転居した。そして新しい塾を「成章舎」と名付けた。「月旦評」の制度が開始されたのはこの成章舎の時からである[13]。

文化四(1807)年、淡窓は豆田の裏町に書塾を新築し、「桂林園」と名付けた。入門者が増加してきたためである。この年の淡窓は健康状態が良くなかったため、桂林園では起居せず、魚町の実家で寝起きし、桂林園に出かけて講業をつづけていた[14]。

淡窓はその後も実家から通っていたが、淡窓が塾生と同居していないため、指導が行き届かず、塾生の規律は乱れがちであった。よって淡窓は、閑静な郊外に塾を移して、自身も塾生と起居を共にし、もっと教育指導に打ち込みたいと望むようになった[15]。そして新たな塾の場所を堀田村秋風庵の近くに見出した。秋風庵は前述したように伯父夫妻の家であり、淡窓には伯父母の恩に報いたいとの希望もあったのである[16]。文化十四(1817)年の春、桂林園の移築が完成し、咸宜園と名付けられた。

淡窓が咸宜園を開くまでの経緯は以上の通りである。では、淡窓が塾を開いた日田という土地にはどのような歴史があったのだろうか。

豊後国日田郡日田は、現在の大分県日田市である。北部九州の中心に位置することから、古代より各方面に道が開け、交通の要衝であった。そして寛永十六(1639)年に九州の幕府直轄領を支配する日田代官の役所が置かれ、以降日田代官は西国郡代となって平均約 15 万石前後の天領地を支配した[17]。このような背景から、日田は商業が発達し、商人の家々を中心にした町人文化が興った。特に文芸面では俳諧が盛んで、前述した淡窓の伯父月化は日田俳壇の中心であった[18]。

以上のように、日田は江戸・京都・大坂から遠く離れた地でありながら、交通網が発達していたことから町人文化が興り、淡窓は幼い頃から学習機会に恵まれていたのである。

３．教育活動の実態と特色

咸宜園の教育の特色としては、徹底的な実力主義であったこと、塾生の自主性が重んじられていたこと、そしてその上で厳密に組織化されていたという三つのことがあげられる。

まず実力主義ということだが、それは、塾の基本的な仕組みから見て取れる。その仕組

みの重要なものとして、まず三奪法がある。これは、年齢・身分・学歴の三つを奪うという意味である。塾生はみんな白紙の状態からスタートするわけである。そしてさらに、月旦評によって、塾内での序列がなされた。月旦評とは、塾生全員の課業、および試業・解説等の優劣を審判し、上下九階級に分けてその学業の程度を明確に示すものである。天保十一(1840)年九月以降は、「真権の法」が立てられ、より一層細密化された評価法となった。咸宜園の学科は、四書、五経、諸子、和漢の歴史、詩文などであり、素読、輪読、輪講、会講、講義、独見、質問、推敲などの形式で学んだ。日常の課業で得た点、月九回の試業で得た点が毎月末集計されて、月旦評の昇級を決定する資料となった。この月旦評によって淡窓は門生の勤怠を把握し、皆にもそれを明らかにし、門生の勤学意欲をかきたてた。三奪法と月旦評に代表的に表れているように、当時の封建学校には見られなかった、実力主義が見受けられたことに咸宜園教育の特徴があると言える。また、「開かれた性格」(19)とも言われるように全ての人に開放された塾であった。これは、「身分的差別が公然たるものであった当時の藩校の教育に対するアンチテーゼであることは明白」(20)と田中も述べているように、大層革新的な気風であったことがわかる。

次に自主性が重んじられていたことを説明していく。咸宜園では塾則は細密に定められ、非常に厳格なものであった。それには、塾約、規約、都講・勧学・都検心得方二十一則があった。塾約は罰則を含み禁止項目が多かったが、破門退塾者はさほど多くなかった(21)ので、罰することが目的ではなく、放蕩の予防になっていたと思われる。また、規約における職任制が咸宜園に特徴的であった。職任制とは、塾生の役割分担であって 18 か条からなり、一人も無職の者がないように、塾生それぞれの力や個性に応じて仕事を分担させたものであった。ちなみに、月旦評の地位は仕事の割当てと関係がなかった(22)。この徹底した自治制によって「知的訓育に偏らず、指導力や組織力をも培い、新時代の指導者を養成する意義をも担っていた」(23)のである。自由であった点として、入門、大帰に時期の制限がなかったことがあげられる。出席も断続的であることが多かった。また、月旦評において昇級の遅速はあったが、落第は行われなかった。つまり制度的な強制はなく、明確な到達点は示されず、各人の目標は様々であったのである。このことから、学習のあり方が、学習者の自由意志に委ねられていたことがわかる。塾生は皆自発的に来学し、高い意識をもって学習していたのである。

この二点を生かした上で、円滑な組織化をも成し得たというのがもう一つ重要な点である。先程述べたように、咸宜園では学習の進度や目標は各人に任せ、塾の運営も自治させる一方で、塾生を塾則で統制し、月旦評によって塾生の学習状態も塾主にきちんと把握されていた。このような仕組みで見事に組織化していたことによって、咸宜園は大規模ながらもうまく教育組織として成り立っていたのである。

４．門人たちの身分・範囲

まず、塾生の年齢層から見ていく。天保二年以降の門人帳によると、入門者の年齢は、

下は 7 歳、上は 59 歳まで幅広く分布しているようだ。その中でも最も多かったのは、16 歳から 21 歳までであり、平均年齢は 18.9 歳になる。年齢の幅が大きかったのは、三奪法により年齢の多寡を問わなかったからだろう。最も多かったのは、16 歳から 21 歳までの年齢である[24]。これは、この頃になると、高度な漢学を学ぶために人々の学校に学ぶ期間は長くなり、正規に数年間在学するようになったという傾向の表れである。

次に、塾生の出身地について見ていく。出身地は広範囲にわたって分布しており、ほとんど全国に及んでいる。19 世紀に入ると、咸宜園のような私塾への遊学が著しく普及したのである。咸宜園の子弟の出身地は 64 カ国[25]で、大坂のような大都会のみならず、本州北端から日本海側の農村地域や四国地方まで、広く分布していた。日田地方自体は、塾生全体の 8 分の 1 を占め（583 名）、日田郡を含む豊後一国になると、全体の 4 分の 1 を占めていた。豊後に続くのは、近隣の筑後(570 名)、豊前(553 名)、肥前(426 名)などであった[26]。九州地方以外で塾生が多かったのは、関門海峡や瀬戸内海を船でやってくる、比較的交通の便に恵まれた地方だった。これらのことを考えると、やはり距離的に近く、交通の便が良かったことも、魅力の一つであったことがわかる。また、淡窓が特定の人々と特定の関係にあったことも重要である。たとえば、彼の塾は日田代官所の援助を受け、その見返りに教育活動を行っていた。よって彼の最初の講義は、代官のもとで行われ、また初期の門人は代官との関係で来学した者が多いようだ[27]。また、長福寺は多くの僧侶を咸宜園へ入塾させた。そして淡窓は府内藩の顧問格に任じられ、この地にしばしば赴き、教育問題の助言をしたので、その関係で府内藩士で入塾する者がかなりいた。では、交通が不便で、淡窓との関係もない地方からも入塾者があったのはなぜかと言うと、そのような地方では、農業経済が発達し、遊学費や入塾後の学費を捻出できるような富農層が生み出されていたのである。いずれにせよ、多数の人々が全国から咸宜園を目指してやってきたことがよくわかる。

では出身階層はどうであったか。享和元年から明治四年にいたる期間での、咸宜園塾生の身分の内訳を見てみると、武士 6.4%、庶民 93.6%である[28]。庶民が圧倒的に多かったことがよくわかる。武士が少なかったのは、19 世紀に入って、藩校が各地に発達したことが反映されていると思われる。咸宜園に来学した者は、まだ藩校が設立されていない地方からやってきたようだ。僧侶の数は極めて多く、塾生の 33.8%を占めた。咸宜園は日田の長福寺と深い関わりがあり、最初から僧侶が塾生の主要メンバーであった。その他の人々(60.8%)の中では、医師が恐らく最も多く、以下、豪商、豪農、若干名の神官、画家、詩人、その他の順で続くと考えられている[29]。はっきりわかるのは、19 世紀初頭ともなると、武士以外の人々が大勢咸宜園のような私塾で漢学を学ぶようになったということである。そして庶民が多かったと言っても、比較的裕福な者たちであったことがわかる。

以上のことを考察して、特徴的として言えるのは、咸宜園の塾生たちは様々な面で大変広範囲にわたっているということである。これは、淡窓が、学業においては身分・門地によらず、平等であるべきだという教育理念をもっていたことが原因で、それがありありと

反映されている。そしてそのように、塾には様々な人々が入り混じり、かつ大規模であったため、スムーズに運営するために、三奪法や月旦評が制定され、また塾制で取り締まる必要も出てきたのだと言える。門人が、武士中心ではなく庶民が多くを占めていたことも特徴的であった。

５．歴史的意義

では最後に、今まで述べてきたことを考察しながら、歴史的意義を述べていく。咸宜園の歴史的意義とは、大きく言って、多くの面で封建体制に対するアンチテーゼを掲げた点である。三奪法と月旦評の制定や、また身分に関係なく皆を役職に付かせることで門人の身分や年齢の枠を取り外した教育を行っていたことは、当時、まだ昌平校や藩校で身分制を基にした教育が行われていたことと対照的であり、革新的なことであった。咸宜園の競争式教育について、海原は、勉強方法は試験に照準が合わせられ、立身出世の手段と化し、真実の教育が失われてしまう傾向を内包していて、政治的人間の育成に役に立たなかったと述べる[30]。しかしそれは一面的な批判であると言える。田中は、政治的権力に対する内部からの改革も有り得ると述べる[31]。政治的活躍者が少ないのは、門人のほとんどが庶民であったことが原因であるだろうし、卒業生は多様な方面で幅広く活躍した。よってこのような方式には、庶民層に新たな可能性を広げたという意義があったと言える。

ルビンジャーは、咸宜園の教育を「19 世紀初頭の 10 年間における、庶民の手になる封建的秩序への『ゆさぶり』」[32] と理解している。彼は「さまざまな教育方法や学習活動を単一の『等級化』された方式にまとめた点で、未成熟ではあるが、近代学校制度の大略を先取りしていた」[33] とも述べ、明治初年の学校制度の中には、月旦評が直接影響したと思われる箇所がないではないと指摘している[34]。このことは、現代のシステマティックな教育が土着だったことを示している。門人の身分も、武士中心ではなく庶民が多数を占めていることから、広範囲な階層の人々の教育要求に応える場であったことがわかる。

民衆教育の原理が定まっていない時代に、民衆の教育への要求に応えてその理論を提示し、また教育実践をも行ったところに時代を先取りした点があったと田中は述べる[35]。言い換えると、このような塾が生まれたことは、庶民が教育を必要としていたことの証拠となっているということだ。また咸宜園で行われたのは、生徒一人一人の個性に合わせ、学ぶ自由を保障した、個性尊重の教育であった。それは「われわれのめざす教育のいわば原基であり、根底」[36] であるとも述べられ、今日の教育につながるものがあると言える。

〔註〕

（1）深町浩一郎『西日本人物誌 15　広瀬淡窓』西日本新聞社、2002 年、25 頁。
（2）同上、54 頁。

（3）同上、193・194 頁。
（4）田中加代『広瀬淡窓の研究』ぺりかん社、1993 年、42 頁（原文は日本思想史懇話会『季刊日本思想史』巻二、ぺりかん社、1976 年、103 頁）。
（5）いかなる場にあっても「天」を常に意識し、それに「敬畏の心」を抱き行動すること（井上義巳『広瀬淡窓』吉川弘文館、1987 年、242 頁）。
（6）前掲『広瀬淡窓の研究』、42 頁（原文は前掲『季刊日本思想史』巻一五、1980 年）。
（7）前掲『西日本人物誌 15　広瀬淡窓』、196 頁（原文は淡窓の語録『六橋記聞』）。
（8）前掲『広瀬淡窓』、176 頁。
（9）井上源吾『廣瀬淡窓評傳』葦書房、1993 年、58 頁。
(10) 前掲『西日本人物誌 15　広瀬淡窓』、42 頁。
(11) 同上、43 頁。
(12) これらの２人のやりとりは、『懐旧楼筆記』巻十五に収められている。
(13) 前掲『廣瀬淡窓評傳』、63 頁（原文は前掲『懐旧楼筆記』巻十一）。
(14) 同上、49 頁。
(15) 前掲『広瀬淡窓』、47 頁。
(16) 前掲『西日本人物誌 15　広瀬淡窓』、60 頁（原文は『懐旧楼筆記』巻十七）。
(17) 前掲『廣瀬淡窓評傳』、77 頁（原文は『懐旧楼筆記』巻十六）。
(18) 同上、3 頁。
(19) 前掲『西日本人物誌 15　広瀬淡窓』、254 頁。
(20) 前掲『広瀬淡窓』、202 頁。
(21) 前掲『広瀬淡窓の研究』、342 頁。
(22) 淡窓の五十年の塾主時代に破門退塾者は約 30 人（同上、346 頁）。
(23) リチャード・ルビンジャー／石附実、海原徹訳『私塾』サイマル出版会、1982 年、71 頁。
(24) 前掲『広瀬淡窓の研究』、345 頁。
(25) 前掲『私塾』、78 頁。
(26) 海原徹『近世私塾の研究』思文閣出版、1983 年、51 頁。
(27) 前掲『私塾』、80 頁。
(28) 同上、57 頁。
(29) 同上、83 頁。
(30) 前掲『近世私塾の研究』、74-75 頁。
(31) 前掲『広瀬淡窓の研究』、347 頁。
(32) 前掲『私塾』、54 頁。
(33) 同上、68 頁。
(34) 同上、69 頁。
(35) 前掲『広瀬淡窓の研究』351 頁。
(36) 前掲『近世私塾の研究』115 頁。

＜長岡翠子・橋本有里子＞

第五章　松下村塾―時代に立ち向かった私塾―

はじめに

本章で私たちは、吉田松陰の松下村塾について、六つの側面から光を当ててみようと思う。その六つとはすなわち、「設立（終焉）の経緯・歴史的考察」、「塾主の経歴・学問的背景」、「門人たちの身分・範囲」、「教育活動の実態」、「教育活動の特色」、そして「歴史的意義」である。「設立（終焉）の経緯・歴史的考察」では、松下村塾が松陰の叔父達によって創められそれを松陰が引き継いでいく過程と、松陰が幕末の動乱に巻き込まれ政治犯となり、塾が衰退していく様子に言及する。「塾主の経歴・学問的背景」では、松陰の思想形成を語る際に避けて通れない、20 代半ばまでの生い立ちに焦点を絞って述べる。「門人たちの身分・範囲」では、塾に通った松陰の弟子について、人数や身分、年齢を明らかにすると共に、それに関して特徴的な人物にも触れる。「教育活動の実態」では、主に使われたテキストと授業形態について述べる。「教育活動の特色」では、松陰の教育活動の背景を知るため、彼の政治、人、教育に対する考えを明らかにする。そして、「歴史的意義」では、塾の最大の特徴と言ってもよいであろう、歴史的人物となった門下生達について詳しく述べた上で、彼らを生み出すことのできた根拠を、吉田松陰や松下村塾の実状に探ろうと試みている。

１．設立・終焉の経緯、歴史的背景

（１）設立

松下村塾という名称の学塾は天保 13(1842)年、松陰の叔父玉木文之進が自宅の一部で創始し、近親や付近の子弟を集めた。松本村にある塾、という意味である。６歳で家業の跡継ぎになることが決められ、山鹿流兵学師範となることを義務づけられていた松陰は兄の杉梅太郎と連れだって通学していた[(1)]。

嘉永２(1849)年、文之進が藩の代官職に就き多忙になったため、一旦閉塾されたが、外叔久保五郎左衛門[(2)]の手により再開する。杉家に隣接した五郎左衛門の家を塾舎とした。寺子屋程度の内容で読み書きそろばんを教授しており、多いときには 70～80 人が集まったという。ただ、五郎左衛門がいつ開塾したのかはわかっていない。海原徹によると、安政３(1856)年９月４日に松陰が久保五左衛門に依頼されて書いた「松下村塾記」は久保塾のためのものであるが、彼自身は安政２(1855)年に野山獄を出獄し、安政３(1856)年の春にはすでに杉家の幽室に訪れる人びとに教授を始めていたため、その頃には２つの学び場が並行していたと考えられる[(3)]。しかし翌年９月頃には来学者が次第に増えたため、杉家の宅地内にある廃屋を補修して八畳一間の塾舎にした。これは松陰とその門下生のためのものだったが、塾主を久保五郎左衛門、教師を富永有隣[(4)]としたのは、松陰がまだ幽囚中の身であったために公辺をはばかったものである。海原徹は、久保五郎左衛門が松下

村塾の名札を下ろし、松陰が譲り受けた時期は判然としないと述べている[5]。彼は、安政５(1858)年７月に家学教授を公許され塾経営を公然化出来るようになった時期には、確実に引き継いでいたと考えられるが、安政４年閏５月に五郎左衛門が女児用のテキストの執筆を松陰に依頼した事実からみて[6]、少なくともこの時期まで男女混淆の久保塾があったことは確かだとしている[7]。また、古川薫は久保塾と杉家における松陰の講座は安政４(1857)年４月頃には合併しており、その塾舎が五郎左衛門のところから杉家の庭に移ったのはその年の 11 月であると述べている[8]。

（２）終焉

安政４(1857) 年の春頃から明倫館[9]では日米修好条約締結の是非等について議論がなされるようになり、そこで幕府を支持する大多数の学生と尊王攘夷を主張する松下村塾の学生で対立していった。また松陰は日米修交通称条約の締結後、中央の政局に対応する藩の方向を示唆する上書をしばしば幕府に提出していたため、松陰や松下村塾は藩や明倫館に目をつけられるようになる。

安政５年８月、朝廷から戊午の密勅[10]の写しが長州藩に届く。尊王攘夷派の志士たちは密勅のことを知ってますます幕府への反感を強め、大老井伊直弼を憎悪した。藩政府は対処方法として倒幕の藩論を打ち出すか静観するかの案をまとめ、長州藩主は静観を選んだ。その姿勢に苛立った松陰は塾生 17 名と老中間部詮勝暗殺計画を企て、それによって安政５(1858)年、野山獄に再投獄される。

この再投獄により松下村塾は閉鎖せざるをえなくなったが、それは塾の消滅ということではない。もちろん投獄は少なからず塾生に影響を及ぼしたものの、下獄中や安政６(1859)年５月 25 日の江戸送り、10 月 27 日の刑死後も松下村塾は門下生の手によって維持されていた。しかしやはり塾生がほとんどいなくなったことの原因は、塾主の松陰が政治犯として下獄したということである。始めは松陰の再獄命令に怒った門下生が師の罪名を聞くために要路者の家に押しかけて家囚を命じられることもあったが、それが解かれた後も両親や家族に迫られて来塾や文通さえも出来なくなっていた。また、藩主伏見庸駕策[11]のような政治プランの即時実行を訴えるなどの一方的なアジテーションを重ねた獄中の松陰と門下生達の間に意見の一致がなく、村塾全体の足並みが著しく乱れていったことも原因の１つである。義弟の小田村伊之助[12]が三官のうち一官を辞して塾生の指導にあたろうとしたが公務多端であまり活躍は出来なかった。

獄中の松陰を訪ねたり、書簡の往復という形で松陰と接触したりした門下生は多かった。松陰の江戸送りを境に門下生の多くは帰郷したり他塾に移ったりした。しかし他塾で顔を合わせていた村塾出身者の久坂玄端や作間忠三郎、岡部富太郎、松浦亀太郎、小田村伊之助などにより勉強会が開催されるようになった。蔓延元(1860)年、久坂が藩命をうけ江戸遊学に出たため文久元(1861)年まで１年半不在にしており、記録はないもののその間も存続し続けた。しかし文久２年には久坂を始め久保、佐世、岡部や作間、山県、品川などの

村塾のめぼしい人々は萩を去ったため、慶応元(1865)年 11 月に奇兵隊を辞して萩に帰った馬島甫仙[13]が再開するまで、村塾は事実上空屋だった。しかし馬島による村塾はかつての村塾とは異なり、付近の少年達を相手に始めた新しいもので、明治２(1869)年まであった。その後は松陰の叔父玉木文之進や兄杉梅太郎らによって断続的に経営され、明治25(1892)年まで続いた[14]。

２．塾主の経歴・学問的背景および門人たちの身分・範囲

（１）塾主の経歴・学問的背景

吉田松陰は、天保元(1830)年８月４日、長門国萩松本村に父杉百合之助と母滝子の次男として誕生した。３、４歳の頃より父百合之助から手習いや読書のことを学んだ。その頃、萩の士族では、幼少期に吉松淳蔵の塾などへ通い、14、15 歳にもなれば明倫館にはいるというのが慣わしであった[15]が、松陰とその兄は、杉家が貧しかったため、寺子屋で学ぶことすらなかった。

５歳で父百合之助の弟である叔父吉田大助の養子となり、翌年には叔父大助死亡により、吉田家の家督を相続する。吉田家が山鹿流軍学を講ずる家であったので、松陰は成年のあかつきには明倫館へ出仕し、山鹿流の軍学を講じることになっていた。そこで、彼を軍学師範に育て上げるため、父百合之助のもう一人の弟、叔父玉木文之進による猛烈な教育が行われる。

天保９年、家学教授見習として明倫館に出仕するようになる。天保 11 年には、藩主毛利敬親の前で、山鹿素行の主著『武教全書』の「戦法篇」を講じた。この藩主へは 13 歳と 15 歳のときにも親試でそれぞれ『武教全書』と、中国の呉の孫武による兵法書『孫子』を講義しており、後者では『七書直解』を賞与されている。またこの頃、西洋陣法、荻野流砲術も学んでいる。

海原徹によると、松陰は、敬神家の父から玉田永教の『神国由来』を暗唱させられて育ったために、当時の武士子弟の平均以上に天皇や国体に関する教養を有していた。ただ、それゆえに彼が、早くから皇国の道に親しんでいたというわけではないという。山鹿流師範としての自立を期待されていた松陰の場合、学習のほとんど全てが兵学的な内容でなければならなかったからある。

漢学的素養として、少年時代によく読んだのは『論語』をはじめとする四書五経だった。

21 歳のとき、九州遊学に出る。このときに松陰は会沢正志斉の『新論』に出会っている。この本の影響力は大きく、現に、松陰はこの書を人の為に校正したり、村塾で門生に教授するなど、何度も繰り返し読んでいる。松陰の政治的開眼は『新論』に代表される水戸学が根底になっており、海原徹は、水戸学的な尊王攘夷論を身につけることからすべてが始まったと言っても過言ではないと述べている。

また、九州ではできるだけの外国関係の書を読み、手に入れようとした。『阿芙蓉彙聞』や『近時海国必読書』などは病気のため、床に横ばいになってまでして写したという。

翌年には藩主の参勤交代に従い江戸へ上り、ここで佐久間象山に出会う。池田諭の説では、松陰の思想形成に一番関わった人物として、佐久間象山を挙げている。国禁を犯して海外に密航しようとした松陰の計画は、象山との出会いが大きく関わっている[16]。

象山について説明すると、彼は文化８(1811)年信州松代藩の藩士の家に生まれ、早くから兵学や自然科学の方面で頭角を現していた。自ら新法の大砲を造り、農業技術の改変を実地で指導し、また自分の給与を担保に、藩から金を借りて、オランダ語の辞典を作ろうとするなど、学者、経世家として、当時の代表的人物だった。松陰が弟子入りしたのは、象山が 41 歳の時であった。松陰は日本の方向を定めるには、世界の情勢を知らなくてはならないと考えており、一方の象山は世界に向かって踏み出そうとしていたので、この二人は意気投合した。

松陰が象山から受けた大きな影響として挙がっているのが、象山の「法は人間の作ったもので、時代とともに変わるものである」という言葉で、これによって松陰は国禁を破るという大障害を乗り越えることができた。この、法律は絶対的なものでなく、時代とともに変化していくもの、また変化しなくてはならないものという象山の持つ意味は大きかった。現実は規則、法律に優先するという考え方は、人々を変革者に育て、変革者を支える立場でもあるからである。

また池田は、僧月性を二番目に重要な人物であるとしている。安政２（1855）年３月９日に松陰は、月性に対する書簡の中で、「天子に請ひて幕府を討つのことに至りては、殆ど不可なり。大敵外に在り、豈に国内相責むるの時ならんや。唯だ当に諸侯と心を協せて、幕府を規練すべく、与に強国の遠図を策すべきのみ」と書いている。これは、月性が中村道太郎や赤川淡水らを相手に討幕の必要を説いたことをきいて、松陰が意見を述べたものである。池田は、この手紙は松陰の思想形成において、重要な意味を持っていたと理解すべきであると言う。松陰は月性から、討幕の是非、その可能性の問題をつきつけられ、常にこの問題を考えないではいられなくなったのである。これ以後、松陰と月性がとりかわす手紙の多くは、幕府の外交問題、対朝廷の問題を中心に論じている。

（２）門人たちの身分・範囲

まず、門人の数であるが、これは海原徹『近世私塾の研究』の 488-490 頁にある表[17]を参考にすると、1856 年春以降に来学した生徒は 92 名であったことがわかる。これは延べ人数ではない。松下村塾では毎日のように講義が行われたわけだが、1 回の講義に参加する生徒は多いときで 30 名前後、少ないときは１人であった（これは松陰が１人でも生徒がいれば講義をしたためである）。この 92 名を身分で分けると左の表のようになる。

士分	60 人
陪臣	8 人
町人	3 人
僧侶	3 人
医師	4 人
不明	14 人

94 名中 60 人と士分が大半を占める中にも、様々な身分の者たちが通っていたのだ。海原は士分が多かった理由として、「松

下村塾がたまたま武士人口の稠密な萩城下にあったこと」[18]、「塾主の松陰がもと明倫館教授であったため、最初から兵学門下生が多かったこと」[19]の2点を挙げている。身分が幅広い理由としては、単に松陰が来る者は拒まず、去る者は追わずとしていたからであろう。これは身分制の厳しかった藩校明倫館と対照的である。松陰は塾生を生徒でなく友人ととらえていた。「高杉晋作に与えた佐久間象山の紹介状には、この者は自分の『友人』であると書いている」[20]というように、自ら生徒を友人と称し、意図的かどうかは定かではないが、上下関係をあまり感じさせないようにしていた。年齢も中心となったのは10代、20代であったが、12歳から40歳を超えた者まで幅広かった。このように身分や年齢を気にしないという考え方は咸宜園の広瀬淡窓の三奪法に通ずるものがある。このような松陰の姿勢は、幕末の松下村塾出身の志士たちの固い結束につながった要因とも考えられる。事実、「高杉晋作は人一倍武士意識の強い男だったが、奇兵隊を結成するとき、真っ先に商人白石正一郎を頼った」[21]ということもある。当時まだ士農工商という身分制度のある封建社会だったことを考えると彼らには階層を無視した友情があったように思われる。

後世に名を残す人物を多く輩出した松下村塾ではあるが、中にはいわば問題児もいた。吉田栄太郎（稔麿）が市の進、音三郎、溝三郎という3青年を松陰に託したのだ。松陰は3人それぞれを諭し、更生させることに成功している。例えば、溝三郎のケースでは、商人をやめて医者になりたいとした溝三郎に「骨董商であることをむしろ生かし、たくさんの古書を集めて商いと学問とを両立させれば『溝壑』のような道義の士たることも難しくない」[22]と説いた。こういった松陰の器量の大きさも多くの身分の人々が共に学べた要因のひとつと考えられるのではないか。

３．教育活動の実態・特色

（１）教育活動の実態

松下村塾には時間割がなく、勉強したい生徒が来れば授業が始まる、という形をとっていた。よって一対一の会読の時もあれば、数人から10人前後の者がまとまって講義をうけることもあった。また、議論や講義に熱が入り、夜を通して明け方まで語り合うということもしばしばあったようである。教科書は基本的に塾生が選ぶ。また、松陰が良いと思ったもの、読みたい本も次々とテキストにしていったため『武教前書』や『武教小学』など山鹿流兵学のバイブル的存在の書物[23]を始め、中国の史書の他に『大日本史』『日本政記』『明徳記』などの国史、『長井記』『吉田物語』『陰徳太平記』など長州藩関係の史書も盛んに取り上げられた。

時間割り等は不規則だったものの、教授方法には工夫があった。授業形態は講釈・会読・輪講・討論・対読・看書・対策・私業に分けられる[24]。安政3(1856)年に再開された『孟子』の授業は、「孟子会」「孟子会講」「孟子講」などと呼ばれているがいずれも講義・講釈の意味である。松陰の講釈は、藩校あたりでごく普通にみられた課書の字義・解釈に終始する類ではなくそこに登場する事実や教訓を日常卑近の生活、さらには時務に関連させな

がら自らの思想信条を展開していくというやり方であった。扱った教材は孟子など儒学のものが多かったものの、その講釈の中で水戸学や陽明学的な思想も取り入れ柔軟な解釈をしていたという。古川薫は著書『松下村塾』において「仮に長生きしていたら、いわばそれら(陽明学や朱子学などの学派）を止揚して「松陰学」とも称すべき学統を建てたかもしれない。」と述べている[25]。

来学者が一人や二人しかいない場合はよく対読が行われた。対読とは一人が読んで一人が聴き、誤読を直したり読めない箇所や意味のわからない部分などをともに考える勉強法である。また対読のような少人数の授業は教室の外でも行われ、米を搗く第の上に台を置き、師弟が相対して本を読んだり、村塾の周辺にあった畑地に出て草取りをしながら読書の方法や歴史について語るという田園調の教育もなされていた。

会読とは、何人かが会集して課書を読むことであるが、その際、読むとは単なる素読ではなく読みながら意味・内容を理解していくいわば読解であり、同程度の学力を有する人びとによりなる協同学習である。しかし松下村塾には年齢や学力などのバックグラウンドが多様な塾生が集っていたため、会者が順番に読むという形式をとりながら、いきおい松陰の講ずる場面が多かったことが予想される、と海原徹は著書『吉田松陰と松下村塾』の中で述べている[26]。また安政４(1857）年に始められた『外史』の対読のように、出席者が５人も６人もいたりすると弟子が読むより教師の松陰が読みながら指導することが多く、講釈的要素がよほど強かったのではないかとも同書中で述べている。

対策は「課業作文」ともよばれ、その課題は塾生各人が選ぶことが多かったらしい。しかし松陰自身が出題することもなかったわけではなく、安政５（1858）年日米通商条約締結について再度衆議をつくせという趣旨の勅語が出ると早速松陰は「村塾策問一道」を作って塾中の意見を聞いたという[27]。

明倫館で行われていた討論会は、「討論会」という名称の授業であったかどうかは定かではないが、似たような形式の授業形態は松下村塾にもあった。会読・対読した内容についてだけでなく時事問題も多く取り上げ、松陰と塾生で活発な意見交換がなされたという。

松陰は山鹿流兵学師範、つまり武芸の教師という職業柄、松下村塾には文科の授業だけでなく兵科の授業も存在した。「今、村塾新たに興る、固より鉛槧(えんざん＝文筆)剣楯(けんじゅん＝剣術）の士を蓄ふに非ず。然れども亦此れを外にする能はず」[28]という観点から課せられた銃陣調練・剣術、水泳などであった。剣術は杉家の庭で行い、近くを流れる松本川で水練を実施し、河原では西洋銃陣の稽古もしたという。松陰は山鹿流兵学という日本の伝統的な兵法に、佐久間象山の塾や長崎の地で触れたと思われる[29]西洋の兵学に学ぶべきところを併せた独特の戦術を編み出し、それに基づいて松下村塾での行軍・陣形・戦闘展開などの訓練を行っていた。

学習形態や時間、教科書は各塾生によって異なったため、松下村塾としてどのような内容の授業がなされていたかということを言及するのは難しいが、松陰は一貫して塾生に諭して言っていたことがある。「およそ学問はひとつに的を絞って精通することが大事で、雑

駁に渉るのはいけない。宋の司馬光の『資治通鑑』、本居宣長の『古事記伝』のように畢生の努力を１つの研究に掲げている。彼らは他の書を読むにしても、その目的に沿っているのであり、他の著述があってもすべては余力から出ている。だからその説明は確かで、しかも卓越するのである。」ということである[30]。

（２）教育活動の特色

ここでは、吉田松陰の政治、人、教育に対する考えの特徴を明らかにする。こうした教育活動の背景の特色を見ることで、教育活動の特色を明らかにするものと考える。

第一に、身分の別なく全ての人に、自らの立場に基づいた政治参加を求めたことが挙げられる。

松陰はそもそも、あらゆる職業の存在理由を認め、それぞれの職業が過不足なく働き合うことによって世の中全体の調和が保たれる、と考えており、それは「士は士、農は農、工は工、商は商、皆其の職掌を治むるなり」[31] また、「農は耕し、工は家宅器皿を製し、商は有無を交易す。各々その職ありて国に益あり」[32] に明らかである。弟子達にまず、それぞれの家業を継ぐことを期待していた。医学修業の予備として来学した、増野徳民や富樫文周をはじめとする大勢の医家の子弟には、基礎学力をつけるための漢籍を選び、必要に応じて医書を読んだ。僧観界や許道らのような宗教家を目指す人々には、それにふさわしい教養が用意された。骨董商の子溝三郎が家業を嫌い、医者になりたいといったとき、商人も医者も人間的修養を下敷きにすれば何ら異なるところはなく、安易な転職こそ心得違いであると戒めた。

そうした、自らの置かれた境遇や地位を踏まえた上で、政治的論議を戦わせることを推奨したのである。彼らは、私たちが普通に思い浮かべる政治的世界で権謀術数をめぐらすタイプでなく、各人の生活する場で地道に家業に励みつつ天下国家に熱い想いを寄せる、有為の人材であり、松陰の言う「奇傑非常の人」「千秋の人」「天下の英才」などが、まさにこれに当たる。士農工商に属しながら、それぞれの立場でこれを領導するインテリ的存在であったといっても良い[33]。つまり、家職を継ぐことを当然視し、転職を不可とした松陰が、村塾にやってきた士農工商全ての人々に、結局は政治的人間たることを期待したのである。

第二に、村塾の教育で、身分、年齢、性別など一切を問わなかったことが、特徴として挙げられる。松陰の交遊範囲は士農工商、老若男女すべてに及んでおり、徹底した平等主義、人間愛に満ちた出処進退であった。弟子の一人、冷泉雅二郎は「先生の交遊極めて広し、敢へて異同を撰ばず。故に単に学者に止まらず、医師あり畫家あり武術家あり神官・僧侶あり、農工商に熱心又は熟達する者、凡そ一芸一能に秀でたる者は皆先生の家に出入りせざるはなく、遠隔の人は常に書信を以て往復せり」と述べている。士農工商の別は、封建的な身分関係というより、ほとんど職掌や役割分担の違いでしかなかった[34]。

第三に、松陰が人性の善に絶対的な信頼をおき、その発現に導くことを教育の核心とす

る考えを持っていたことから、教育不可能な被教育者は存在しないと見ていたことがある。個性尊重、一人ひとりを生かす教育を目指し、すべての人間の性を真に善と篤信し、良心の発見、惻隠・羞悪・恭敬・是非等を拡充していこうとした。しかし、だからといって、賢愚の別や才不才、能不能などの個人的差異に眼を背けようとしたのではなく、様々の個人的差異をあるがままに認めたがゆえに、それを踏まえた教育、すなわち各人の個性にふさわしい、その特長を生かした教育の必要性を強調したのである[35]。どのような環境や状態にあろうとも見捨てず、一人ひとりを生かす工夫を凝らしていた。これは教育に対するほとんど全幅の信頼であり、その好例として、松陰は弟子達に次々と、各人の長所を伸ばし短所を矯めるための名や字などを与えていた[36]。

４．松下村塾の歴史的意義

松下村塾の歴史的意義は、第一に、なんといっても歴史に名を残した人物を多数輩出したことであろう。幕末では、多くの村塾出身者が先頭に立って討幕運動に加わっていった。池田屋事件では吉田稔麿、禁門の変では、入江杉蔵、久坂玄端といった松下村塾四天王に数えられた人物が中心にいたが、それぞれ命を落とした。もうひとりの四天王である高杉晋作は奇兵隊を創設し長州藩の意見を倒幕論に確定させるなどしたが、第二次長州征伐の戦いの勝利後、肺結核により病死した。池田諭[37]はその著書の中で村塾四天王を「一様に、松陰と深く思想的に交錯し、幕府を倒すということはどういうことであり、新しい日本はどうあるべきかを徹底的に論議していた」[38]者達であるとし、その死を嘆いている。このように、明治維新を前に松下村塾の中心人物は命を落とすことが多かった。中には、桂小五郎、伊藤博文、山県有朋など後の明治政府に深く関わっていった者もいるが、桂は別として伊藤や山県が松陰から直接指導を受けた期間は非常に短く、１年にも満たない。松下村塾の教えは松陰の死後もその弟子たちにも受け継がれたが、その指導力は松陰に及ぶものではなかった。池田は松陰の教えを長く受けられなかった者達がその後の日本の中心人物になったことについて、「倒幕が目的であると錯覚したような塾生が明治日本を指導した。また、そのように考える明治政府の指導者に若い塾生たちは易々と迎合し、流された」[39]と評している。しかし、松下村塾が内閣総理大臣になる程の人物を輩出したのも事実である。ではなぜこれだけの人物を輩出することができたのだろうか。

まずは松陰個人の求心力が挙げられる。古川薫[40]は、松陰の学徳とは並外れた感化力であるとし、「松陰の強烈な感化力の秘話は、生得身につけていた人間的な魅力であったにちがいないが、あらゆる機会をとらえて親しく塾生に接近していく指導者としての努力と、するどい観察の視線、相手を選ばない誠実な姿勢にあるといえるだろう」[41]と述べている。松陰は身分や年齢を気にしていなかった。

次にその授業の形式である。海原徹[42]は「もと私塾における教養は、個人の人格性の陶冶にかかわり、またその延長線上で社会有用の人材の育成をめざしたが、松下村塾の教育はそうした大前提をふまえながら、眼前の危機的状況を打開するという強烈な問題意

識に支えられ、いっそう具体的かつ現実的な目標設定をしていた」[43]とし、松下村塾が他の私塾よりもより時勢を踏まえながらの講義であったことを強調している。すでに述べたように松下村塾では軍事訓練や政治的実践の計画なども行われており、それは現実的な目標設定に沿った、それを成し遂げるために現実的に何をしたら良いか考えたうえでのものであった。このような実践的スタイルには強い政治色があり、「松陰は全く狂気沙汰である」[44]と子供の入塾を断固拒否する親が出るほどその教育活動は特異なものであった。しかし、その様な他の私塾とは一線を画す教育形態であったからこそ歴史に名を残すものたちが出たことも確かである。

そして、松陰の死も大きかったであろう。彼の死によって彼の門下生がそれぞれに考え、それを実践していった。松陰が門下生達に時勢を読み取る力、またそれを実践に移す力を与えていたこともまた事実である。

第二に、私塾史上例を見ない村塾の実践主義的教授体系についてである。松陰は、講義を常に時勢に関連付けて進める、政治的実践をするなど私塾という枠組みに収まり切らないようなことをした。後に村塾出身者の多くが幕末から明治の世にかけて大成したことから、学んだことを実際に生活する上で生かしていく力を養うことができるものと考えることができるのではないだろうか。実際の生活に照らし合わせて学ぶことで応用力をつけたのだ。これは現在の総合的な学習の時間に通ずるものがあるのではないか。但し松陰は基礎もしっかりやっていたことを忘れてはならない。

〔註〕

（1）16、17 歳の頃の同窓生に久保清太郎、安田辰之助、深栖多門、浅野往来、佐々木小次郎、斉藤貞甫、松本文祥、藤原貞美らがいた（海原徹『吉田松陰と松下村塾』ミネルヴァ書房、1990 年、106 頁）。

（2）松陰の養母久満が、家格の関係で久保五郎左衛門の養女として入嫁したために生じた縁戚関係であり、その長男清太郎は外弟にあたる（同上、111 頁）。

（3）同上 107 頁。

（4）藩士。明倫館に学び、13 歳で藩世子に大学を講じる。同僚の讒言により遠島、野山獄に移され、松陰と知り合う。松陰はその学識を惜しみ、出獄後彼の釈放運動に成功、松下村塾の賓師とした（古川薫『松下村塾』新潮選書、1995 年、180 頁）。

（5）前掲『吉田松陰と松下村塾』、108 頁。

（6）富永有隣が松陰に代わって記述した（『吉田松陰全集』第 4 巻、岩波書店、1938-40 年、91-92 頁）。

（7）前掲『吉田松陰と松下村塾』、107 頁。

（8）前掲『松下村塾』、31 頁。

（9）萩藩（長州藩を構成する支藩のひとつ。他に長府・徳山・岩国がある）の藩校。入学資格は中

級以上の武士に限られていた（前掲『吉田松陰と松下村塾』、75-76 頁）。

(10) 孝明天皇から水戸藩に、正式な手続きを経ず勅書を下賜されたという事件。朝廷を無視した日米修好通商条約調印を攻め、外患を目前とした内憂を早急に収拾するために攘夷を推し進める幕府改革をせよという内容（同上、122 頁）。

(11) 安政６(1859)年３月、参勤途上の藩主を塾中から選ばれた「十死士」が伏見で迎え、大原ら革新公卿を擁して上洛し、勅を奉じて一挙に幕政の失策を正そうとしたもの。塾生の大方は賛成せず行動に移さなかったため、松陰は「是れ諸友は則ち政府の奴隷なり」(「要駕策主意、上」安政６年２月 27 日、全集、第５巻 423 頁）と罵倒し、久坂玄瑞や岡部富太郎、佐世八十郎などをと次々に絶交していった（前掲『吉田松陰と松下村塾』203-104 頁、192-193 頁)。

(12) 藩士。明倫館に学び、司典助役兼助講となる。後江戸遊学、佐藤一斉らに指示。嘉永４年のそのころ江戸で松陰と親交を結び、同６年松陰の妹寿と結婚。安政４年、明倫館都講兼助教となるが、松陰の松下村塾を助け、塾生らと交わった。松陰没後は塾生指導にあたった（前掲『松下村塾』、163 頁)。

(13) 医師。安政４年、14 歳の時に入塾、松陰は「塾中第一流の才」として将来を期待したという。入獄の時に松下村塾の後のことを依頼されるがいったん断る。しかし松陰の死後慶応元年からしばらく松下村塾で教える傍ら松陰の遺稿整理にあたる（前掲『松下村塾』、184 頁)。

(14) 前掲『吉田松陰と松下村塾』、209 頁。

(15) 奈良本辰也『吉田松陰のすべて』新人物往来社、1984 年、33 頁。

(16) 池田諭『吉田松陰』大和選書、1985 年、101 頁。

(17) 海原徹『近世私塾の研究』思文閣出版、1983 年、448-490 頁。

(18) 同上、493 頁。

(19) 同上、493 頁。

(20) 古川薫『松下村塾』新潮選書、1995 年、49 頁。

(21) 同上、50 頁。

(22) 海原徹『松下村塾の人びと』ミネルヴァ書房、1993 年、91 頁。

(23) 『武教全書』は儒学・兵学者山鹿素行の主著であり、その終わりに『武教小学』が載せられている。

(24) 看書は自習。対策は塾生に課題を与えて答案を書かせ、松陰が批評し添削するというレポートのようなもの。私業は任意の読書で、読了後に皆の前で所感を述べ、批評を受けるというもの（古川薫『松下村塾』新潮社、1995 年 95-96 頁)。

(25) 前掲 『松下村塾』、89 頁。

(26) 海原徹『吉田松陰と松下村塾』ミネルヴァ書房、1990 年、163 頁。

(27) 前掲『吉田松陰と松下村塾』、165 頁。

(28) 安政５年２月５日付「佐藤・岡部・谷茂に与ふる書」吉田松陰全集第４巻、309 頁。

(29) 海原徹『松下村塾の人々―近世私塾の人間形成』ミネルヴァ書房、1993 年、39 頁。

(30) 前掲『松下村塾』、90-91 頁。

(31) 「講孟余話」、安政三年五月二九日、全集、第三巻、366 頁（海原徹『吉田松陰と松下村塾』ミネルヴァ書房、1990 年、147 頁、参照)。

(32) 「講孟余話」、安政三年五月二六日、同前書、384 頁（前掲『吉田松陰と松下村塾』、147 頁、参照)。

(33) 前掲『松下村塾の人びと』、412 頁、参照。
(34) 前掲『松下村塾の人びと』、410 頁、参照。
(35) 前掲『松下村塾の人びと』、413,414 頁、参照。
(36) 前掲『吉田松陰と松下村塾』、169 頁、参照。
(37) 実践的思想家。高校教諭のかたわら「藤園塾」及び文化組織「新生会」をつくる。
(38) 池田諭『松下村塾』社会思想社、1984 年、21 頁。
(39) 同上、24 頁。
(40) 小説家。山口大学卒業。
(41) 前掲『松下村塾』、63 頁。
(42) 京都大学教養部助教授、教育学博士。
(43) 海原徹『近世私塾の研究』思文閣出版、1983 年、 493-494 頁。
(44) 同上、500 頁。

＜石井洋輔・磯谷多美、村田絢子＞

第六章　鈴屋―江戸期を代表する国学塾―

はじめに

本章では、本居宣長の私塾鈴屋についてとりあげる。鈴屋は、学問の中心が儒学であった江戸時代に国学塾として興隆し、庶民教育に主眼をおいて通信教育を実施するなど、さまざな特色をもっていた。ここでは「鈴屋設立の経緯」、「設立の歴史的・社会的背景」、「塾主の経歴及び学問的背景」、「門人たちの身分・範囲」、「教育活動の実態と特色」、を明らかにし、これらをふまえた上で「歴史的意義」を考察する。なお、原典としては『本居宣長全集』（筑摩書房、全二十巻・別巻一～三、1993 年完結）を用いる。

１．鈴屋設立の経緯

本居宣長主宰の私塾・鈴屋は、その初期聴講者の顔ぶれ[1]から、嶺松院歌会を母胎に形成・発達したと言われている。

まずこの嶺松院歌会がどのようなものかを簡単に説明し、歌会と宣長との関わりを考察する。これらを通じて鈴屋設立の経緯を見ていく。

嶺松院歌会は享保 8（1723）年、松坂新町の本居家菩提寺樹敬寺の塔頭嶺松院において、小津長正により始められた。創設時の会員 10 名のうち、4 名が宣長の親族であった。同 14 年、長正が死去したため中断したが、住職・茂鮮によって享保 16（1731）年 4 月に再開された。その後、会員や式日の変化はあるものの、再開以後だけでも 78 年間継続した。歌会の当番は持ち回りで、基本的に毎月 25 日午前に開かれたが、宣長が参加するころには 11 日と 25 日の午後となっていた[2]。

宣長が嶺松院歌会に初めて参加した時期は明確ではないが、宝暦 8 年 2 月 11 日の会に彼の名が見られることから、宝暦 2 年 1 月から同 7 年 10 月にかけて行った医学修行のための京都遊学後という説が有力のようである[3]。彼がこの歌会で詠んだ最も古い歌も宝暦 8 年 10 月 25 日のものである[4]。異説には、桜井裕吉が『松阪文芸史』の中で、宣長の和歌への関心の深さ・親族と歌会の関わりから推測して遊学前に参加したのではないかとしているものがある。

岡中正行によると、この歌会に血縁上ゆかりがあったことが、宣長にそもそもの和歌への関心を植え付けたようである。岡中はさらに、京都遊学自体の経験と、そこで宣長の和歌の師である有賀長因の歌会に参加していたことなどから、歌会から参加を望まれたのだろうと述べている[5]。

宣長が歌会開催の通知を出したり、歌会のために『嶺松院会和歌書』を記したり、歌の優劣を比較し勝敗を判定していたことなどから、彼は歌会の中心的存在になっていたと山中芳和は述べている[6]。しかし当番は持ち回りであったという事実があるため、宣長が通知を出していることについては、彼が主導的存在であったと考えられる理由にはならな

いだろうとも考えられる。

宝暦８年の夏、歌会会員を相手に宣長は松坂の自宅奥座敷で『源氏物語』の講釈を開始した。山中によれば、歌会会員である浅原十左衛門（義方）が発起人であることから、会員たちは京都遊学を終えてきた宣長から学問的裏付けのある教養を吸収し、歌会の中に取り込もうして講義を求めたと推定できるという[7]。宣長自身の意向もあるだろうが、鈴屋は、彼を取り巻く在郷の文化人達の「学び」への要求によって成立したと言える。

宣長が医者でありながら講義活動を行ったのは、彼が「よるひるとはずいそしみつとめ」ることが、「皇朝のまなび」である[8]と考えていたからである。

２．鈴屋設立の時代的・社会的背景

鈴屋設立の時代的・社会的背景としては、当時の松坂という土地が持っていた特色やそこに暮らす人々について見ていきたい。

宣長自身の言葉を借りれば、松坂という都市は「ことによき里にて、里の広き事は、山田につぎたれど、富る家おほく、江戸に店といふ物をかまへおきて、手代といふ物おほくあらせて、あるじは、国にのみ居てあそびおり、うはべはさしもあらで、うちうちはいたくゆたかにおごりてわたる」[9]といった性格を持っていた。伊勢において山田[10]に次ぐ都市であった松坂は、伊勢商人の根拠地であり、経済活動が活発な土地であった。後に三井財閥として発展した三井家も、松坂を本拠地とする伊勢商人である。宣長も木綿商小津家の一員であり、本来は商人になるべくして生まれてきたようなものだった。

また、松坂は伊勢街道の重要な宿駅となっており、当時流行していた「伊勢参り」の参宮客で賑わう宿場町であった。「一生に一度の伊勢参り」という諺があったほど庶民の間でも伊勢参りは流行し、『玉勝間』にある記録によれば、宝永 2（1705）年 4 月 9 日からの 50 日間に 362 万人もの参宮者があったという[11]。そればかりでなく、松坂は大和や京都に至る街道へも連絡する陸路の要衝であり、かつ大口港・松が崎港から海路も開かれていた。そうして諸国の人々と常に接することで、松坂の人間は進取の精神に富むようになった。松坂は京都や大坂・江戸とは異なる一地方都市でありながらも、商業都市・そして交通の要衝として活気のある土地なのであった。

このような都市にあっては、やはり経済効率が一番に重視され、学問はさほど重視されなかったようである。宣長が医者の仕事が終わった夜間に『源氏物語』を講じていたことが、文芸の世界が松坂の機能の中心にはなかったことの現れである、とする説もある[12]。つまり裕福な商人を中心としては、文化人気質が築かれていたと考えることもできるのである。しかしそのような知的欲求を満たしてくれるような機関が当時の松坂にはなく、在郷商人の間でその設立が待ち望まれている状態であったと推測される。

３．宣長の経歴と思想

宣長は、享保 15 年 5 月 7 日（1730 年 6 月 21 日）、伊勢国松坂本町にて、商家である小

津家の次男として生まれた。元文 5（1740）年に父と死別し、翌年、曽祖父が隠居していた家に移り住み、母の手によって育てられることになった。

宝暦 2（1752）年に京都へ遊学するまでの時期に、宣長は中流以上の家庭一般の、かつ武道よりも文化の道を志すような、上方の商家の教養を身につけている。すなわち、手習いや習字、四書の素読、猿楽や謡曲、さらには茶湯や射術、和歌・俳諧も習った[13]。また、幼少から読書を好み、多くの和漢の書を雑然と読んだことで、宣長の思想の素地が作られていったと考えられる[14]。

しかし宣長の思想形成にもっとも大きな影響を与えたのは、京都への遊学であった[15]。宝暦元（1751）年、兄が病死し、宣長は家督を継いだが、母親が商人として適当でないことを見抜き、彼を医者にしようとした。こうした母の勧めによって、すでに述べたように、宝暦 2（1752）年、宣長は京都に遊学した。医学の準備として儒学を修めるために、まずは堀景山[16]の門人となり、景山没後、その息子蘭沢、武川幸順[17]に師事した。

5 年 8 ヶ月にわたる遊学中に漢学を学び、読解力を養った。五経の素読に始まり、『史記』や『春秋左氏伝』、『荘子』や『荀子』などの会読・講釈で学んだ。医学については『霊枢』、『局方発揮』、『素問』、『運気論』の講説を聞き、『本草綱目』、『嬰童百問』、『千金方』などを会読した[18]。これら以外にも独学で漢学者の著書を読み漁り、また、詩文を作ったり、和歌や国文も学んだりもした。宣長は「歌は到底詩に如かない」[19]と述べ、和歌を深く好んだ[20]。そして、最も彼の思想形成に影響を与えたのは、在京中に契沖の著書に接したことであり、村岡典嗣は「こは彼をして、生涯の学問に入るの端を開かしめたものをいふべく、彼の京都遊学をして、最も有意義ならしめたものである」[21]と評している。また、四季折々の行楽や乗馬、観劇を嗜んだ。京の美しい自然と人と古典的な雰囲気の中で、このような広い教養や経験を積んだことにより、その思想が形成されていったと考えられる[22]。

宝暦 7（1757）年、宣長は帰郷し、医業を開いた。翌年から門弟をとって『源氏物語』の講義を開く一方で、国典の研究に励んだ。宝暦 13（1763）年、機会に恵まれ、かねてより著書を読んで思慕の情をささげていた賀茂真淵と会談し、国学を究めていくことになる。この後、『古事記伝』や『直毘霊』、『玉くしげ』などを著し、国学を大成していくのである。

このような宣長の学問観であるが、宣長は、学問とは道を明らかにして真理の探究を目指すものであると考えていた。道とは『うひ山ぶみ』の中で述べられているとおり、上のもの（君主、あるいは自然）が掟を施して行い、下のもの（小人）が私的に定め行うものではない、というのが宣長の考え方である[23]。その中でも、道を行い施す主体ではない小人が道と関わるときに求められたのが、「自然の神道を奉じながら和歌を詠む」[24]ことであった。

これは宣長の学問的背景に根ざしたものであると言える。自著『玉勝間』の中で宣長は、自らの京都遊学以前の学問のあり方について振り返っている[25]。『玉勝間』に示された

遊学以前、及び遊学時の学問のあり方は、大きく三つに分類できる。第一に、和漢・新旧さまざまな書物を濫読したこと。第二に、十七八歳のころに歌を詠もうと志し、二十歳にして山田の宗安寺の住職である法幢に師事して歌に親しんだこと。そして第三に、「よのつねの儒学」を医術・本草学を学ぶ基礎教養として学んだことである。これらの読書、詠歌、儒学を三本柱として宣長は遊学時代を過ごした、と菅野は指摘している[26]。若い頃の読書を好み和歌を好むという趣向が、自らの道との関わり方と大いに関わっていったのであろう。

その「道を明らかにする学問」としての国学の学問対象となったのは、言うまでもなく『源氏物語』を始めとする日本古典である。

第一節で述べたとおり、宣長の鈴屋での教育活動は、『源氏物語』の講釈からスタートしている。第五節で詳しく見ることとなるが、その後も絶えず『源氏物語』の講釈は行われており、源氏の講釈が鈴屋での教育活動の上で重要な役割を担っていたということが出来る。

宣長の『源氏物語』についての論考である『紫文要領』は宝暦 13（1763）年に成立している。これは鈴屋での源氏講釈の第一回目の半ばにさしかかる頃である。

この書の中で宣長は、『源氏物語』の主題を「もののあはれ」[27]に求めている。このことは倫理学者の和辻哲郎が評価したように、物語を道徳的教戒を目的としない、純粋な文芸として捉えた解釈として今日まで評価されている[28]。

「おほよそこの物語五十四帖は、物のあはれを知るといふ一言にて尽きぬべし」[29]と『紫文要領』で述べているとおり、『源氏物語』は「もののあはれ」を描き出すことに主題をおいていたため、この物語を読めば誰でも容易に「もののあはれ」を知ることが出来るというのが宣長の論である。それゆえ、日本独自の文化や思想あるいは精神世界を日本古典に求める国学の本質と照らし合わせても、『源氏物語』を読むことは国学を学ぶ上で理にかなった活動であると言え、宣長が教育活動上『源氏物語』を重視する傾向の基となったと考えられる。

このように、学問が道を明らかにすることを目指しているため、学問や教育は開放的でなければならないとされ、批判的精神を持って学ぶことの重要性を強調した[30]。つまり、無批判的に師の説を踏襲することは学問の道に反することであり、道を明らかにするためには積極的に師の説を批判の対象にする必要があると説いたのである。

４．門人たちの身分・範囲

鈴屋の門人たちの身分や範囲を知るためには、「授業門人姓名録」[30]を参照する必要がある。この「授業門人姓名録」には鈴屋が始まる 1758 年から、終焉に至る 1801 年まで、総計 489 名の名前が記されており、この資料に基づいてさまざまな分類、解釈がなされている。

まず門人の身分について、分類や身分の特定に関してはそれぞれの研究に差があるが、

一致している点としては、農・町民を中心とする一般庶民が多かったということである。庶民といっても豪農・豪商クラスがほとんどであるが、学問の中心が武士であった当時、私塾も武士の子弟を多く集めているところがある中で、鈴屋では一般庶民の教育に主眼があったということは注目に値する。参考までに、芳賀登の分類をのせておく。

身分	門人数	割合
町人	166 名	33.8%
農民	114 名	23.2%
神官	69 名	14.1%
医師	27 名	5.5%
僧侶	23 名	4.7%
武士	68 名	13.8%
女性	22 名	4.5%
その他	2 名	0.4%

＜芳賀登『幕末国学の展開』塙書房、1963 年、292 頁「国学者の門人階層表」より一部引用＞

また、女性の門人についてはあまり明らかにされていない点が多いが、大半が夫・父等の縁故で入門し、詠歌に励んだり文学を学んだりした。この点は国学塾特有の分野が影響している。海原徹は、直接来学して男女が一緒に学ぶのではなく、書簡による通信教育が可能であったという鈴屋独特の教育方法も、入門を容易にした一因ではないかと述べている[32]。

次に来学者の範囲について、授業門人姓名録によると 43 カ国から門人が集まったことが分かる。中村一基は出身地について次の三つの特徴を挙げている[33]。

第一に、鈴屋があった伊勢の門人が多い点である。伊勢出身者は全体の 40%を占め、中でも松坂の出身者が多い。

第二に、伊勢についで尾張出身者が多く、17.8%を占める点である。東海地方、特に遠江からの入門者も多いが、これは宣長の師匠である賀茂真淵の郷国で、真淵の門人及び真淵に私淑した国学者が鈴屋の門人となった例が多かったからと考えられる。

第三に、三都の門人が少ない点である。三都あわせても、全門人の 5%に満たない。これには様々な理由があると考えられているが、おもにこれらの都市では儒学の影響がつよかったことや、これらの都市の国学は「歌学」の域を脱せず、宣長の国学のような神道の哲理を主張するような学問は好まれなかったことが指摘されている[34]。

また、他国人が始めて入門したのは安永 9（1780）年のことであり、それまでの門人はすべて伊勢の出身である。寛政元（1789）年ころから、他国出身者が急増するが、これは宣長の諸国への訪問や講演活動、歌会の開催によるものだと考えられている[35]。

５．教育活動の実態と特色

この節では、鈴屋塾で行われた教育について詳しい考察がなされている、山中芳和の『近

世の国学と教育』[36] という著書の論に沿って、鈴屋塾の教育活動の実態と特色について考察していく。

宣長の講義活動は、宝暦 8（1757）年の夏に『源氏物語』の講談を開始したことに端を発する。「設立の経緯」の項で挙げたとおり、初期の講義の対象のほとんどは「嶺松院歌会」のメンバーであり[37]、京都遊学を終えた宣長から教養を吸収しようとする歌会会員たちの要求に促される形であったため、会読ではなく宣長からの一方的な講義という形式から、鈴屋での教育は始まった。

宣長が昼の時間帯は医業に従事していたことにより、ほとんどの講義は夕食後に行われたようである。講じられた書物は、『源氏物語』、『万葉集』、『古今集』、『新古今集』を主とし、『伊勢物語』、『土佐日記』、『枕草子』、『百人一首』、『神代紀』、『栄華物語』、『史記』、『狭衣物語』、『公事根源』、『祝詞式』などであった。また、『源氏物語』は 2、6、10 の夜、『万葉集』を 4 の夜といった具合に、書物によって式日が定められ、規則正しい学課が組まれた[38]。以下、各々の書物の合計講義回数、講義の行われた期間、式日を表で示す。

	講義回数	講義年	式日
源氏物語	4回目途中	1758～、1766～、1775～、1788～	2、6(、10)
万葉集	3回目途中	1761～1773、1775～、1786～	4→2
古今集	4回講了	※	8→4→10→不定
新古今集	2回講了	1766～1769、1787～1791	8→6
神代紀	1回講了	1764～1766	8
伊勢物語	2回講了	1759、1791～1792	8
職原抄	1回講了	1771～1773	8
百人一首	2回講了	1760、 1784	10
直毘霊	1回講了	1774	2、6、10
栄華物語	1回講了	1772～1775	3
狭衣物語	1回講了	1775～1776	3

＊古今集は 1770～1771、1774～1775、1780～1784、1792～1795 に講義された。
＜村岡典嗣著、前田勉校訂『増補本居宣長１』平凡社、2006 年、95～98 頁より作成＞

表を見て分かるとおり、『源氏物語』が絶えず講義され、式日が他の書物が 10 日に 1 度であるのに対して源氏は 3 度（晩年は 2 度）設定されていたことから、『源氏物語』の講釈が本居宣長の教育活動の上で終始重要な役割を担っていたと言えよう。これは、宣長の「学問的背景」でふれられたとおりである。

なお、講義で取り上げられる書物は、聴講者の側の関心に応じて変更されることもあり、例えば出席者が江戸へ下向せねばならない期間にそれまでの源氏・枕草子をいったん休止して『百人一首改観抄』に変更したり、新しく入ってきた聴講者のために途中まで読み進めていた源氏をまた頭から読み始めたり、といったこともあった。

教育活動の特色としては次の 2 点があげられる。

まず 1 点目は、大半の講義は宣長の論を講釈するという、鈴屋塾創始時のスタイルが貫

かれているということである。これは宣長自身の教育形態の捉え方が影響したものである。『玉勝間』の「こうさく　くわいどく　聞書」という項に、初学者の場合、「いさゝかもみづから考へうるちからはなきに、これもかれも聞えぬことがちなるを、ことごとにとひ出むこともつゝましくて、聞えぬながらに、さてすぐしやる」ことが考えられ、そういった初学者に対しては「猶講釈ぞまさりては有ける」と述べてある[39]。つまり、講釈というスタイルの方が初学者に対しては有効である、ということである。それに対し会読は、学習者の側に自説を述べうるだけの学力があり、それを基として討議する学習意欲がある場合にのみ効果的であるとされている。これは荻生徂徠が主張した会読重視の学問観を批判しているとも解釈できる。

その会読形式が採られた珍しい例として、万葉集の第二回目の講義が挙げられる。宝暦11（1761）年からの第一回目の講義では他の書物と同じように講釈形式が採られたが、安永4（1775）年からの第二回目の講義では、宣長の養子である本居大平の残した記録[40]などにより、会読形式であったことが明らかになっている。

この会読形式の授業を分析することにより、山中は自著の中で、鈴屋においては「学び」とは、「師の教えをそのまま受容するということでは決してなかった」[41]と指摘している。宣長本人も『玉勝間』の中で、「師の説なりとて、かならずなづみ守るべきにもあらず、よきあしきをいはず、ひたぶるにふるきをまもるは、学問の道には、いふかひなきわざ也」[42]と述べており、たとえ師の教えであっても間違っていると思ったら批判していい、そういった自由な批判によって未知なるものを明らかにすることができる、という宣長の学問に対する考え方が表れている言葉である。

特色の2点目としてあげられるのが、書簡による通信教育である。これは門人たちの身分・範囲とも大きく関係している。遠方の門人が宣長の教育を受けられたのも、女性の門人が多かったのも、この書簡による通信教育によるところが大きい。

第4節でも見たとおり、伊勢国人以外が入門し出したのは開塾の23年後の安永9(1780)年であり、その後寛政元（1789）年ころから他国出身者が増加している。これは、社会的活動が活発となった時期[43]にあたり、寛政元年から没年に至るまでに、名古屋、京都、和歌山へそれぞれ3回ずつ訪れて国学の普及を試みている。これらの活動を通して全国へ普及していった鈴屋門人への教育手段が書簡による通信教育であった。

例えば、名古屋地方で宣長社中が形成される上で大きな存在となった田中道麿[44]との書簡のやり取りは『万葉問聞抄』、『万葉集問答』に収められている。安永7年9月12日付の道麿宛の書簡に「とかく古書ハ左様成物ニて、次第次第ニ済かたき事出候物也、此方（＝万葉集）も御同然ニ候也、尚追々幾遍も幾遍もくりかへし御穿鑿可被成候」[45]というように、学問の取り組み方などに関しても指導が行われていた。

宣長自身は地方門人に対して鈴屋での講義に参加することを勧めていた[46]が、やはり遠方の門人には困難なことであり、書簡を通じての質疑応答や、詠歌の添削を受けるのが主たる学びの方法であった。

また、女性に関しても、書簡が多数残されており、ほとんどの女性が書簡による教育を受けたということがわかっている。しかし、女性の中には伊勢松坂に住むものも多く、歌会に女性が参加していたという事実がある[47]ことから、直接授業を受けた女性がいるという可能性はあるだろうが、はっきりしたことはまだわかっていない。

講義で取り上げる書物が聴講者の要望によってある程度流動的であったように、この通信教育でも、学ぶ内容は学習者によってまちまちであったようである。その点では、学習者の意欲を重視した自由な教育が行われていたとも言える。

６．歴史的意義―むすびにかえて―

それではむすびにかえて、鈴屋の歴史的意義について述べていくが、これは 3 つあると考えられる。1 つ目は「秘事口授」を排除しようとしたこと、2 つ目は庶民に受け入れられたということ、そして、3 つ目は多彩な教育方法によって支えられていたということである。

まず 1 つ目であるが、これは第 2 節で述べた宣長の学問観から生まれる。鈴屋に入門する際は四カ条の誓詞を提出して師弟の契を結ばなければならなかったが、その中に「秘伝口授なと申儀曽而無之旨堅相守」[48]と、秘伝口授を申し立てないことがあった。

では、なぜ宣長が「秘伝口授」を否定するようになったのかということであるが、それは、宣長が道を明らかにする、つまり真理の探究を和歌の世界によって可能であるとしたからである。宣長にとって和歌の道とは人間の道であった。当時は、古典文学の教授は家元や流派により、秘伝で継承されてきた知識の独占という伝統を有する領域の 1 つであった。だが、それにとらわれていては、和歌を作る際に、自由に心情を表現することができない。そこで「秘事口授」を批判、すなわち学問や教育の封鎖性を拒絶したのである。このことは、ほかの私塾ではあまり見られなかった画期的なものだったといえる[49]。

この「秘事口授」を排し、「開放的」な教育のやり方が、2 点目の庶民に広く迎えられるということにつながる。第 4 節で取り上げた表に基づいて考えると、庶民の範囲を武士とその他以外としたとき、その割合は驚くべきことに、85.8%となる。では、なぜこうも多くの庶民を巻き込むことができたのだろうか。

武士階級の占有物である昌平校や藩校はともかく、官公立学校の補充や代替の役割を果たすことが多かった漢学塾には武士の師弟が多く入門していた[50]。漢学、特に朱子学は支配階級の教養であったからである。一方、振興の学問である国学は、主に被支配階級すなわち市井の町人や草間の農民層に迎えられていった。こういう理由があり、鈴屋には農・町民を中心とする一般庶民が多く入門してきたと考えられる。

また、女性門人の存在も見逃せない。七去三従的な婦道をよしとする江戸時代にあって、女子教育への機会はきわめて小さく、せいぜい女寺子屋的な教養で十分とされていたので、私塾に学ぶ女性の姿はほとんどなかったからである。他の私塾、例えば咸宜園は、90 年にわたって存続し、4600 名あまりの来学者のあったのに、わずか 2 名の尼僧が入門したに

過ぎない。一方、鈴屋には 22 人の女性が入門したいたということは注目に値するが、その理由は、『源氏物語』や『伊勢物語』などの文学を学ぶという国学塾に特有の分野が、女性の興味や関心をそそったのだろう。

女性も含め、多くの庶民に迎えられたのは、多彩な教育方法があったからであり、これが 3 点目の歴史的意義である。第 4 節や第 5 節で述べた出張講義や通信教育は、鈴屋において、大きな特徴といえる。

松坂地方以外からの入門者が増えてくる寛政元年 1789 年になると、宣長は松坂を出て精力的に各地を回り講演を行っている(51)。もともと国学者は、公家や大名の屋敷に招かれて講義をすることが珍しくなかったが、彼らはまた、地方の門人宅へもしばしば出かけて講義を行った。この講義によって、松坂へ出かけるために農地や店を離れるわけにはいかない人々は宣長と接触ことができた。また、たびたびの出張講義を行ったことで、地方からの入門者を多数輩出させることになった。

また、地方の門人を教育するために確立したが、通信教育という手法であった。遠隔地のため直接来塾できない人々は、「短冊の表」といわれるものに必要な事項―姓名、住所、日付、紹介者の名を書き込み、書簡によって入門することができた。入門後、彼らは質問を手紙に書いて送り、師の指導を受けることができたのである。

遠隔地に居住する門人がはるばる松坂まで遊学する場合、授業料だけでなく、旅費や滞在費などの学費を工面し、またその間、家業を休まなければならず、そう簡単にはできなかった。しかし、通信教育であれば、そのような障害はほとんど関係がない。鈴屋の場合、門人の大方が家業を有する成人であったので、この教育方法がとりわけ有効であったといえるだろう。

鈴屋は、そこでの講義だけでなく、通信教授や出張講義などの教育方法を用いることにより、庶民を中心に広く対象に教育を行い、そのことが「秘事口授」という旧来の慣習の打破につながったといえるであろう。こうして、19 世紀日本の小さな町や村のいたるところで教育水準が向上し、学習のチャンスが増大するといったような、注目すべき教育機能が発揮されたのである(52)。

〔註〕

（1）『源氏物語湖月抄』の「識語」より、聴講者 9 人のうち 5 人が歌会のメンバーであったことが分かる。『本居宣長全集』別巻 1、筑摩書房、1976 年、241 頁。

（2）本居清造編『本居宣長稿本全集』第一輯、博文館、1923 年、40-41 頁。

（3）『詠草会集 第 6 冊』宝暦 7 年 2 月 11 日の条に記載あり。前掲『本居宣長全集』第 18 巻、41 頁。

（4）『石上稿』の「宝暦八年戊寅詠総百五十七【二千七十四】」。前掲『本居宣長全集』第 15 巻、

243 頁。

（5）岡中正行他『本居宣長と鈴屋社中―『授業門人姓名録』の総合的研究―』錦正社、1984 年、494 頁。

（6）山中芳和『近世の国学と教育』多賀出版、1998 年、26 頁。

（7）同上、27 頁。

（8）『家のむかし物語』宝暦 7 年 7 月 10 月の条にあり。前掲『本居宣長全集』第 20 巻、29 頁。

（9）『玉勝間』十四の巻 998 番「伊勢國」の項目に記載。前掲『本居宣長全集』第 1 巻、1968 年、445 頁。

(10) 現在の伊勢市。伊勢神宮の門前町として栄える。1955 年までは宇治山田市と言った。

(11) 『玉勝間』三の巻、120 番「大神宮御蔭参り」の項目に記載。前掲『本居宣長全集』第 1 巻、97 頁。

(12) 高野敏夫『本居宣長』河出書房新社、1988 年、51 頁。

(13) 西村三郎兵衛や斎藤松菊、岸江之中、浜田瑞雪、山村吉衛門らに師事している。

(14) 村岡典嗣著・村田勉校訂『増補本居宣長 1』平凡社、2006 年、28 頁。

(15) 出丸恒雄編『宣長の青春―京都遊学時代―』光出版、1977 年、11 頁。

(16) 朱子学派の学者で、藤原惺窩の高弟杏庵の四世の裔。

(17) 京都の人で、小児科の名医。宣長入門当時は 30 歳。

(18) いずれも漢方医学書の名称。

(19) 前掲『増補本居宣長 1』、34 頁。

(20) 新玉津島の歌会や有賀長川の歌会に参加し、在京中に約千百首の歌を詠んでいる。

(21) 前掲『増補本居宣長 1』、35 頁。

(22) 前掲『宣長の青春―京都遊学時代―』、14 頁。

(23) 相良亨『本居宣長』東京大学出版会、1978 年、160 頁。

(24) 前掲『本居宣長全集』第 17 巻、25 頁。京都遊学中の友人に宛てて書かれた書簡の記述による。

(25) 前掲『本居宣長全集』第 1 巻、84 頁。「おのが物まなびの有しやう」より。

(26) 菅野覚明『本居宣長』ぺりかん社、1991 年、27 頁。

(27) 宣長の解釈としては、「心を動かすはずのものをもっている対象に対して、感動すること」。山崎良幸『「あはれ」と「もののあはれ」の研究』風間書房、1986 年、4 頁。

(28) 「文芸は道徳的教誡を目的とするものではない、また深遠なる哲理を説くものでもない、功利的な手段としてはそれは何の役にも立たぬ、ただ『もののあわれ』をうつせばその能事は終わるのである、しかしそこに文芸の独立があり価値がある」（和辻哲郎『「もののあはれ」について』1922 年）。

(29) 前掲『本居宣長全集』第 4 巻、57 頁。

(30) 海原徹『近世私塾の研究』思文閣出版、1983 年、125 頁。

(31) 前掲『本居宣長全集』第二十巻、195-224 頁。

(32) 前掲『近世私塾の研究』、137 頁。

(33) 前掲『本居宣長と鈴屋社中―『授業門人姓名録』の総合的研究―』、403-404 頁。

(34) 伊東多三郎『草莽の国学』名著出版、1992 年の中の「京坂の国学」という論考による。

(35) 前掲『近世私塾の研究』、127-128 頁。

(36) 山中芳和『近世の国学と教育』多賀出版、1998 年。

(37) 最初の源氏物語講義に出席した 9 人のうち 5 人が嶺松院歌会の会員であった。同上 27 頁。
(38) 前掲『増補本居宣長 1』、94 頁。
(39) 前掲『本居宣長全集』第 1 巻、240 頁。
(40) 『万葉会評聞書』『万葉集会評録』『万葉会評定録』『万葉後度会聞書』の 4 冊。いずれも東京大学文学部本居文庫蔵。
(41) 前掲『近世の国学と教育』、43 頁。
(42) 前掲『本居宣長全集』第 1 巻、88 頁。
(43) 村岡によって 4 つに区分された宣長の生涯のうち、晩年の 12 年間は第四期となされ、そこでの主な出来事は、「学問普及の為に、主としてなされた、旅行、出遊であ」ったと村岡は述べている。前掲『増補本居宣長 1』、58 頁。
(44) 1780 年入門。伊勢国以外の門人の中では、石見浜田の小篠大記と並んで最も早い時期の入門者であるが、正式入門の数年前から宣長と交流を持っていた。『万葉問聞抄』は入門前の安永 6（1777）年 7 月からの約一ヵ年間、『万葉集問答』は同 7 年 6 月から入門後の天明 2（1782）年 7 月までの四年余りの間の、万葉集についての道麿の質問と宣長の応答を収めたもの。前掲『近世の国学と教育』、112 頁。
(45) 前掲『本居宣長全集』第 17 巻、69 頁。
(46) 遠江の栗田土満宛の書簡に「来春は何とぞ何とぞ御参宮被成緩々御逗留も被成候様に御出くれぐれも奉待候」とある。
(47) 前掲『本居宣長と鈴屋社中―『授業門人姓名録』の総合的研究―』、370 頁。
(48) 前掲『本居宣長全集』第 20 巻、191 頁。
(49) 前掲『近世私塾の研究』、124 頁。
(50) 同上『近世私塾の研究』、137 頁。
(51) 第 1 回目は寛政元年(1789)3 月 19 日～4 月 2 日まで名古屋方面へ、第 2 回目は寛政 5 年(1793) 3 月 10 日～4 月 29 日まで京都方面へ、第 3 回目は完成 6 年（1794）3 月 29 日～4 月 26 日まで名古屋方面へ、第 4 回目は同年 10 月 10 日～12 月 4 日まで和歌山城下へ、第 5 回目は寛政 12 年（1800）11 月 20 日～享和元年（1801）3 月 1 日まで和歌山城下へ、そして第 6 回目は同年 3 月 28 日から京都へ、出講している。
(52) 前掲『近世私塾の研究』、137 頁。

＜遠藤可楠子、大野結美子、白岳　昌、萩原雅人＞

第七章　鳴滝塾―外国人塾主の到来―

はじめに

鳴滝塾は､外国人が日本で開いたという点に特徴のある私塾である｡近世私塾において、西洋人が直接教授したという点では唯一の私塾であり、後述するように、他の私塾とはその性格・教授方法などにおいて異なる。では、この鳴滝塾という存在は、いったい従来の日本の教育にどのような影響をもたらしたのであろうか。その歴史的意義を明らかにすべく、鳴滝塾とその塾主シーボルト、また、シーボルト以前の外国人宣教師の教育について調べ、考察していく。

まず、第二節では、塾主の経歴・学問的背景として、シーボルトが生まれてから来日に至るまでの経緯と、その歴史的背景について述べる。第三節では鳴滝塾が設立するまでの経緯、第四節では鳴滝塾終焉の経緯について述べる。第五節では、鳴滝塾で行われていた教育活動の実態と特色について、第六節では門人の身分と、シーボルト事件後の門人たちの活動について述べる。そして、第七節では、シーボルト以前に外国人が日本で行った学問教授に関してとりあげ、シーボルトの日本における学問教授との相違点について明らかにする。これを明らかにすることによって、シーボルトが日本にもたらしたことの重要性や、その歴史的意義を見出すことができると考えられる。最後に第八節では、以上述べてきたことを踏まえて、鳴滝塾またはシーボルトが日本にもたらした歴史的意義について考察する。

１．シーボルトが来日に至る経緯

シーボルトは医学界で名門のドイツの家庭に生まれ､自身もヴュルツブルク大学で医学、解剖学、生理学、博物学、植物学などを勉強する。卒業後は、一度ヴュルツブルク郊外で医院を開くが、在学中に何度か行っていた東洋への思いがあり、オランダにいる知人にオランダ政府への仕官に執りなしを頼む。この知人とは、ヴュルツブルク大学教授のシーボルトの父の教え子で、オランダ国王の軍医総監をしていた。そのおかげで、国王、殖民大臣、当時の東インド総督カペルレンの了解を受けて、東インド陸軍病院付外科少佐に任命される[(1)]。

その頃のオランダは、植民地バタヴィアにおいてはイギリスの東インド商社の勢力を抑制できず、また、ヨーロッパにおいてはフランス革命によりナポレオンの弟であるルイ・ナポレオンがオランダ国王になり、オランダ本国も危機に陥っていた。ナポレオンはヨーロッパにおいて敗れたものの、今度はイギリスが東インド総督にジャワ奪取を企てさせ、長崎の出島までも奪われそうになり危うくなったが、なんとか出島は危機を免れた。このような状況の中で、オランダは一刻も早く植民地や貿易の復興をはかり、国を復活させたいと考え、日蘭貿易に着目したのである。そしてその日蘭貿易を復興させる前提として、

日本の総合調査が必要となり、シーボルトを出島の医官として派遣することとなった。このようにして、シーボルトは日本へ渡航することとなったのである[2]。

以上の歴史的背景は述べたとおりそれぞれの著者の間に見解の違いはなく、以上の説だとするのが妥当であろう。

２．鳴滝塾成立の経緯

シーボルトが来日したころの出島のオランダ商館では、規定においては外出・外来者との面会が禁じられていた。しかし、実際には、シーボルトが来日後まもなく長崎に遊学中だった湊長安、美馬順三、平井海蔵、岡研介らと面会していること[3]から、外来者との面会を許可されていたのである。これは、通詞目付石橋助左衛門と出島係町年寄久松碩二郎（旧姓高島）の斡旋があったことによる。また、外出について便宜を図ってくれたのは、碩二郎とその兄、高島茂敦であった。そして、町医者の吉雄幸載と楢林栄建・宗建兄弟がシーボルトの市内への往診治療を奉行所へ出願した時、高島兄弟がそのとりなしをし、また、これによって吉雄・楢林それぞれが経営する吉雄塾・楢林塾への出張講義も認められることになった。

しかし、諸国からの学徒の数が増えてきたなどの問題が出てきた。そこで、久松が問題を長崎奉行にとりつけてくれ、長崎奉行の高橋越前守重賢が許可し、また久松や通詞中山作三郎らの斡旋により日本人名義で土地などを買い取り、鳴滝塾開設に至ったのである[4]。黒田源次[5]によれば、シーボルトが講義に参加するのは大体週に一回であり、重病患者はシーボルトが来た時に診てもらい、また、大手術を要する患者はあった場合は、あらかじめシーボルトがオランダ商館長に承諾を得、そして更に長崎奉行所に願い出て許可を得て鳴滝塾舎で手術をした[6]。

こうしてみると、鳴滝塾は見方によっては、診療治療の機関であり、それと同時に医学研究・医学教育の場所でもあり、二つの側面を持って始まったと言うことができる。

３．鳴滝塾の終焉

これまで当ゼミナールにおけるシーボルトについての文献発表は複数回行われたが、シーボルトが鳴滝塾を閉じた経緯については明確にできなかった。シーボルトが日本を去ることとなっていた時期と鳴滝塾閉塾の時期との間に時差があることが指摘されたが、その理由は疑問として残ったままであった。そこで、以下では、この時差にいかなる事情が含まれているのかを述べつつ、鳴滝塾終焉の経緯について明らかにしていきたいと思う。

シーボルトが初めて来日したのは 1823 年８月 11 日（文政６年７月６日）である[7]。シーボルトはオランダ政府によって日本に派遣されたが、その任期は 1828 年までの５年間であった[8]。つまり、シーボルトの任期満了はオランダ政府によって定められたものであり、元々シーボルトは 1828 年の８月上旬（文政 11 年の９月中旬）には任期を終えて帰国する段取りになっていたのである。実際、シーボルトが帰国する際に使用することと

なっていたコルネリウス=ハウトマン号は８月（陰暦７月頃）に長崎に到着しており、10月 28 日（陰暦９月 20 日）限り長崎港を出帆する定めであったという[9]。上記の経緯、そして、シーボルト事件のきっかけとなる 1828 年 9 月 17 日（陰暦８月９日）の暴風雨の時、すでに国禁の品物が船に運び込まれていた事実から考察するに、シーボルトはハウトマン号が到着した８月から、日本で収集した資料や医療器具、生活用品その他必要なものを船に積み込む作業を行っていたのではないかと思われる。シーボルトが日本を去ることとなっていた時期と鳴滝塾閉塾の時期との間に時差があったのは、帰国の準備期間があったためであると考えられる。

ただ、いくらシーボルトの任期が満了したとはいえ、鳴滝塾では週のほとんどで阿波出身の美馬順三と山口出身の岡研介ら塾頭が門人の指導にあたっていた[10]ことを考えると、彼らがシーボルトの後を継いで鳴滝塾を継続することも可能だったはずである。しかし、鳴滝塾が実際にはそうはいかなかった。その理由は、やはりシーボルト事件にあると思われる。シーボルトは出島に幽閉され、また、地図を渡したとされる幕府天文方兼書物奉行・高橋作左衛門のみならず、オランダ通詞数名や門人の二宮敬作、高良斎などの門人たちも一時投獄されるなどの大事件であったため[11]、門人たちは散り散りになることを余儀なくされた。実際に、身の危険を感じた高野長英などは事件発覚直後に姿をくらまし、熊本・大分・広島・京都などを転々とした後に江戸に舞い戻ったとされている[12]。

シーボルトが鳴滝塾の存続を願っていたのかいなかったのかはわからなかったが、元々シーボルトは日本を去ることになっていた。そして、シーボルトの思惑に関係なく、シーボルト事件という惨事が起きてしまった以上、どのみち鳴滝塾は閉鎖される運命にあったと言える。

４．教育活動の実態と特色

鳴滝塾として知られるこの塾は、江戸時代を通して、ヨーロッパ人が作った初めての私塾であった。シーボルトは毎週一回この塾に通った[13]。

鳴滝塾には決まった細かなスケジュールや教授法はなく、講義はオランダ語で行なわれた。シーボルトは主として医学理論と臨床、それに博物学を教え、後に薬理学も教えるようになった[14]。

シーボルトは講義だけでなく、臨床実習も積極的に取り入れた。鳴滝塾では門人だけでは治療が困難な病人をシーボルトが診断、治療した。シーボルトはその病人の症状を説明し、診断の仕方、治療方法を講じて、その処方をした。手術を行なう場合は、奉行所の許可を取ってから、門人たちの立会いの下で執刀した。この点は、大場[15]も板沢[16]も同じ見解である。このように、鳴滝塾は臨床実験が取りいれられて、日本の私塾としては画期的であったとされているが、逆に、外国人であるシーボルトが日本の伝統的な教授方法である会読などを知っていたと考えるのは難しい。そこでシーボルトが塾を開く上で手本とした方法は、自分が二年前に卒業したばかりのヴュルツブルク大学の臨床教育システ

ムであったと考えられる。加えて、シーボルトは週に一回ほどしか塾には来ていなかったので、シーボルトの来ない日は、塾頭であった美馬順三や楢林宗建などが中心となり、シーボルトの講義の補講や、自分たちだけで出来る治療などを行なっていたと考えるのが妥当であろう。

この鳴滝塾は他の私塾と違い、2 つ側面を持っていると考えられる。まず、シーボルトにとっては、この西洋医学の知識と技術の伝授は日本の資料や情報を集める手段でもあった。同時に、日本人医師にとっては鳴滝塾で個々の患者の例を見ることでヨーロッパ的な診断や治療方法に習熟していったのである。大場は、この鳴滝塾は日本で初めて、西洋医学の体系的な訓練を行なったとしている。

つまり、鳴滝塾は、日本側からは医学を教授するという役割を期待されたが、シーボルトは日本についての資料と情報を収集、分析する日本研究の役割を鳴滝塾に期待したのである。そこでシーボルトは日本のことを研究するにあたって、門人に「博士論文」あるいは「学位論文」を課した[17]。これらはシーボルトが個人的に課したものであり、ドイツの大学のシステムを真似て、卒業論文と呼ばれていたが、もちろん当時のドイツの大学が出している卒業論文とは比較になるようなものではなかった[18]。論文の課題は、医学あるいは本草学的なものに中核を置いていたが、医学と全く関係のない民族学的なものも多かった。特殊なものでは、戸塚静海に与えた「製塩法」、高野長英に与えた「捕鯨法」などがある[19]。こういった課題研究というのは、かつてツンベルクが試みた方法であるが、シーボルトはそれをさらに体系的に進めていったと久米康生[20]は述べている。彼は、論文の課題を与える際、これは学問上のどういったところに問題があり、それを研究するのにどういう方法があるか、そしてそれをどのように叙述したらよいかという学問研究の方法論を伝授した、と板沢[21]は述べている。

そして、オランダ語でその論文を書き、提出させた。これは、門人たちの知識を整理し、関連する材料を徹底的に調べるという学問の方法を教える意味で重要であった[22]。そこで、門人たちは、与えられた課題を自分で調べながら、同時に門人同士で知識を交換しあって論文を作り上げた。この知識交換の際に、門人たちの出身地が日本全国にわたっていることで、各地の情報が集め易かったことも、論文の質を上げていた要因と言える。

このようにして、シーボルトは鎖国化の行動が厳しく規制された日本で、医学以外の分野を含む多様な領域の、必要かつ質の高い資料、情報を手にいれたのである。そして、これらの論文や資料は後に彼が『日本』や『日本植物誌』、『日本動物誌』を書く上で重要な参考資料になった。これらの論文や資料が後に彼が『日本』や『日本植物誌』、『日本動物誌』を書く上で重要な参考資料になったことに加え、「臨床実習」「調査」「論文」という学問的手法を広めることに大きく貢献したと言える。

５．鳴滝塾の門人とシーボルト帰国後の展開

シーボルト事件を契機に解散することとなった鳴滝塾であるが、その門人たちはシーボ

ルトが帰国したのち、どのように活動を展開していったのであろうか。鳴滝塾の代表的な門人について、その身分および事件後の活動を紹介したいと思う。

まず、長崎出島のオランダ通詞楢林家の一族であり、西洋医学研究者の楢林鎮山（1648-1711）[23]の子孫である楢林宗建（1802-1852）は、シーボルトが長崎で試みていた種痘を受け継ぎ、嘉永二年（シーボルト事件の 21 年後）にオランダから輸入した牛痘加（かさぶた）の接種に成功した人物である。宗建が長崎に、弟の栄建が京都方面にこれを普及し、種痘として全国に広めた[24]。

鳴滝塾で最も若い門人[25]であった青木周弼（1803-1863）、研蔵（1815-1870）兄弟は、周防大島郡の医師・青木玄棟の息子[26]である。周弼は天保九年（1838 年）に藩医となり、同十三年に医学教授所である好生館の設立を建言、自らも蘭学を教授した。研蔵は嘉永二年(1849 年)に種痘法伝習のため長崎に遊学し、初めて萩藩内で種痘を実施した。のちに明治天皇の大典医に任ぜられる[27]。

長崎遊学中の半年間、蘭館内にてシーボルトの植物研究の助手として過ごした伊藤圭介（1803-1901）は、尾張国名古屋城下の医者・西山玄道の次男[28]である。伊藤は、文政十二年に、ツンベルクの『日本植物誌』(シーボルトからの贈り物）を翻訳注解した『泰西本草名疏』を刊行。この著書で本草学界の重鎮となり、本草学会の嘗百社[29]の中心となって活動した。名古屋袋町に開いた薬園・旭園では植物標本の展示などの博物会を連年開催し、天保八年には『救荒食物便覧』を著した。

ちなみに、鳴滝塾初代塾頭である美馬順三（1795-1825）は文政八年六月十一日にコレラで死去した[30]ため目覚ましい功績を残すことはなかったが、美馬もまた、徳島藩の中老・池田家の家医であった美馬与三右衛門茂則の次男、つまり医者の子であった[31]。

その他シーボルト事件以前に鳴滝塾で学んだ門人は約四十名[32]おり、久米康生によれば、それらの門人の出身地は、九州 17 名、中国 10 名、四国４名、中部５名、関東１名、東北３名である[33]。

学問の基礎が漢学である当時の時代背景からすると、鳴滝塾の門人は多かれ少なかれ蘭学を学ぶための基礎学問として、漢学を修めていたことが予測される。また、上記以外の代表的な門人の出身や身分を見ても医者や蘭学者の子孫が多いことから、門人はシーボルトの教授を受ける前から学問的にも身分的にも恵まれた立場の者であっただろう。以上のことを踏まえると、門人の残した功績をそのまま全てシーボルトや鳴滝塾の結実とするのは無理がある。しかし、楢林兄弟が普及させた種痘がシーボルトの研究を受け継いだものであることや、伊藤圭介の著書がシーボルトの贈り物に由来することを考えれば、シーボルトや鳴滝塾の存在は、その後の日本の医学、植物学の発展に貢献したと言えるのではないだろうか。

６．シーボルト以前の外国人による教育組織での教授について

医師シーボルトによる鳴滝塾での教育方法は、それまでの原書の講釈や翻訳のみに拠っ

ていた日本の教育組織に、臨床実験や論文執筆といった本格的な学問研究のあり方を提示したという意味において画期的であった。しかし、シーボルトによる教育が日本と外国の初めての接点ではない。それ以前に日本に輸入された学校教育システムの一つのあり方として代表的なものである、安土桃山時代に設立された中等教育機関・セミナリヨについてこの節では述べ、シーボルトがもたらしたものとの相違点について明らかにする。

セミナリヨは 1580 年にイエズス会の巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノによる布教拡大を前提とした教育構想を実現すべく、中等教育機関として安土（現滋賀県蒲生郡安土町）と有馬（現長崎県南松原市）に初めて成立した。ちなみに当時のキリシタン学校には、セミナリヨのほかにコレジョ（高等教育）、ノビシヤード（イエズス会会員養成）が存在する[34]。ヴァリニャーノも自身の著書の中で、

> しかし、掌中にある様々な布教事業を前進させようとも、原住民からの援助がなければ、また大勢の原住民を入会させなければ、イエズス会は日本で存続してゆくことができない。それゆえ、原住民用のセミナリヨをできるだけたくさん設け、原住民を[キリスト教の]諸習慣と語学の中で教え導き、彼らがキリスト教徒とイエズス会を援助するのに相応しい者となるようにするのが何にもまして必要なのである[35]。

と述べ、布教拡大目的のセミナリヨの重要性について指摘している。一向一揆に手を焼き仏教徒を抵抗勢力とみなしていた織田信長は、イエズス会宣教師に大いなる関心と好意を示し、安土城下で教会や神学校（セミナリヨ）の建設を許し、土地を与えたのである[36]。

生徒層は武士の子どもに限られ、安土のセミナリヨにおいては生徒数 30 人[37]、有馬セミナリオにおいては当初 12～18 才の生徒 22 名だったのが 130 人に増えた[38]。教師の構成については、禁教令発布後に有馬から移転した八良尾セミナリヨにおける記録によると、スペイン人やポルトガル人の神父・宣教師が多く名を連ねているが、日本人宣教師の名前も記されている[39]。教えられていた科目は、日本語の読み書きやキリスト教の教義のほか、ローマ字、ラテン語、楽器、さらには宇宙や地理などの西洋科学などであった[40]。やはりラテン語の教科書などにおいては、その構成が「よき教育の価値」「少年期とその諸問題」「すべての年代に、とりわけ青少年期に宗教が必要であることについて」「誠実さと正しい行動」「純潔の徳」などの 5 章からなっており、新旧約聖書中の人物、聖人、教父たちやギリシャ、ローマの英雄伝から実例としての引用も見られ、道徳色の濃いものであった[41]。学校のシステム自体は、当時の日本にはなかった日曜日、夏休み、遠足、文化祭などの行事などを組み込んだ、当時としては新しいものであった[42]。

まとめると、セミナリヨは、教授される学問領域が非常に広くルネサンス的教養を求めた点、学校のシステム自体が近代のものに非常に近いという点において日本の教育史上一定の意味を持つが、学校事態の運営目的が布教活動の一環であったこと、政治的要素が絡んでいるということ、あくまでも道徳上の規範をさまざまな科目を通じて学ぶにとどまっ

たことから、近代の研究活動に通じるシーボルト的発想はこの当時まだ存在しなかったといえる。

７．歴史的意義

シーボルトが鳴滝塾を創設し、指導をとり行った結果、とりわけ日本の医学・教育手法にはさまざまな歴史的転換がもたらされた。大場秀章[43]によれば、鳴滝塾の医学分野における功績は、日本で初めて、西洋医学の体系的な訓練を行ったことである。また、G. K. グッドマン[44]によると、外国人による直接の教授であったことが特筆に値すると述べている。つまり、それまでの蘭学者たちは、書物から知識を得ていたのであって、直接外国人から教えを受けていたわけではなかったのである。であるため、医学理論と臨床の双方を指導カリキュラムに組み込んだことは、非常に画期的なことであった。ただし、シーボルトが鎖国後の島国とヨーロッパに精神的な結びつきをもたらした最初の人物とするのは間違いである、とヴォルフガング・ゲンショレク[45]は指摘している。1719 年にすでにヨーロッパ言語で記述された書物の禁止が緩和され、オランダ語の翻訳機関は設立されており、人々の情報への欲求は高まっていた。杉田玄白・前野良沢による『解体新書』の訳述、古医方・オランダ流外科学を経た華岡青洲による麻酔薬の考案、乳がん手術、宇多川玄随による、オランダ内科書『西説内科紀要』の翻訳、またアンブロワーズ・パレやロレンツ・ヘースター著の外科学書の翻訳[46]は 1824 年の鳴滝塾以前に行われており、書物経由での知識の獲得という限定的手段であれ、進歩したヨーロッパ医学が輸入されていたのは事実である。1690 年から 1692 年まで蘭館医師（ただし出島を出ない）として日本に滞在したケンペルなどの例も見逃せない。

また、従来の教育法と比較して画期的であったのは、原書を読むことにとどまらず、「論文」を書かせた点である。ドーア[47]によれば、「講釈」（講師による原書の解説）、「会読」（単純な朗読）、「輪講」（予習した一節の解釈から始まり、教材の意味説明、広範囲に及ぶ内容検討、道徳律の実際的適用に関する論議、歴史的あるいは文学的批評、歴史上の類例の詮索 etc）が江戸時代の教育の主流であった（数学を除くが、ほとんどの科目において）。斎藤信[48]によると、蘭学の分野でも例に漏れず、文法の知識で辞書を引いて原書を読むだけだったのが、シーボルトが門人にさまざまなテーマを与えて論文を書かせ、間違ったところは清書させて自分の日本研究に利用したというその手法により、日本人に文を自ら作成するという学問の方法を教授した事実は、日本の従来の教育方法に一石を投じたといってよいであろう。

以上の 2 点から読み取れることは、鳴滝塾において「蘭学」の目新しい知識そのものが輸入され教授された点が画期的であったというわけでは決して無い。塾の意義はむしろ、蘭学（あるいは学問全般）の教えをこれまでただひたすら受動的に消化し、正確に読み取ることが日本人にとって至上命題であった時代を経て、知識をベースに、臨床実験・調査・報告書の作成といった、日本の現代の「研究活動」のあり方に近づく布石を打つ試みであ

ったと解釈するのが妥当であろう。

〔註〕

（1）以上は、呉秀三『シーボルト先生其生涯及功業』平凡社、1967 年、37-47 頁、および、宮崎道生『シーボルトと鎖国・開国日本』思文閣出版、1997 年、50-51 頁、に基づいた記述。
（2）前掲『シーボルト先生其生涯及功業』53-58・64 頁、日獨文化協曾編『シーボルト研究』岩波書店、1938 年、278-281 頁、および、前掲『シーボルトと鎖国・開国日本』、50 頁、に基づいた記述。
（3）呉秀三『江戸参府紀行』雄松堂書店、1966 年、278-282 頁。
（4）前掲『シーボルト研究』、31 頁、および、前掲『シーボルト先生其生涯及功業』88-93 頁、前掲『シーボルトと鎖国・開国日本』、53 頁、に基づいた記述。
（5）前掲『シーボルト研究』、32 頁。
（6）前掲『シーボルト先生其生涯及功業』、93 頁、および、前掲『シーボルトと鎖国・開国日本』、56 頁、に基づいた記述。
（7）同上、51 頁。
（8）板沢武雄『シーボルト』吉川弘文館、1960 年、97 頁。
（9）同上、97 頁。
(10) 岩田祐作『長崎に遊学した人々』（http://www2.ocn.ne.jp/~oine/yuugaku.html）、２章、「シーボルトの鳴滝塾」。
(11) 前掲『シーボルトと鎖国・開国日本』81 頁。
(12) 前掲『長崎に遊学した人々』２章「シーボルトの鳴滝塾」。
(13) 大場秀章『花の男シーボルト』文藝春秋、1960 年、54 頁。
(14) 同上、55 頁。
(15) 同上、54-55 頁。
(16) 板沢武雄『シーボルト』吉川弘文館、1960 年、28-29 頁。
(17) 同上、56 頁。
(18) 大森實編『PH・FR・VON シーボルトと日本の近代化』思文閣出版、1992 年、110 頁。
(19) 久米康生『シーボルトと鳴滝塾』木耳社、1989 年、66 頁。
(20) 同上、59 頁。
(21) 前掲『シーボルト』、31 頁。
(22) 前掲『シーボルトと鳴滝塾』、60 頁。
(23) 長崎大学付属図書館医学分館所蔵近代医学史デジタルアーカイブス「長崎のオランダ医学」
http://www.lb.nagasaki-u.ac.jp/ml/exhibit/nagasakioranda/nagasakioranda.html
(24) 前掲『シーボルトと鳴滝塾』、166 頁。
(25) 同上、181 頁。
(26) 萩市役所「青木周弼旧宅」
http://www.city.hagi.yamaguchi.jp/portal/bunrui/detail.html?lif_id=10188

(27) 前掲『シーボルトと鳴滝塾』、181 頁。
(28) 前掲『長崎に遊学した人々』２章、「シーボルトの鳴滝塾」。
(29) 尾張藩士水谷豊文を盟主とする本草学の研究団体。
(30) 前掲『長崎に遊学した人々』２章、「シーボルトの鳴滝塾」。
(31) 前掲『シーボルトと鳴滝塾』、44 頁。
(32) 同上、51 頁。
(33) 同上、53 頁。
(34) 南島原市『セミナリヨ』
http://www.city.minamishimabara.lg.jp/icity/browser?ActionCode=content&ContentID=1142060328503&SiteID=0&ParentGenre=1000000000046
(35) ヴァリニャーノ（高橋裕史訳）『東インド巡察記』平凡社、2005 年、201 頁。
(36) 北国新聞社『高山右近』北国新聞社、2003 年、32・35 頁。
(37) 前掲『高山右近』33 頁。
(38) 前掲『セミナリヨ』より。
(39) 片岡千鶴子『八良尾のセミナリヨ』キリシタン文化研究会、1970 年、69-78 頁。
(40) 前掲『高山右近』、33 頁。
(41) 前掲『八良尾のセミナリヨ』、46 頁。
(42) 前掲『セミナリヨ』。
(43) 前掲『花の男シーボルト』、55 頁。
(44) 大森實編『PH・FR・VON シーボルトと日本の近代化』思文閣出版、1992 年、109 頁。
(45) ヴォルフガング・ゲンショレク『評伝シーボルトー日出づる国に魅せられてー』講談社、1993 年、76 頁。
(46) 前掲『評伝シーボルトー日出づる国に魅せられてー』、77 頁。
(47) R.P.ドーア『江戸時代の教育』岩波書店、1970 年、125・130・131 頁。
(48) 前掲『PH・FR・VON シーボルトと日本の近代化』、183 頁。

＜浅見晃子、安藤由実、今泉理良香、鈴木絢子＞

第八章　適塾―自由闊達な俊秀たち―

はじめに

本章で私たちは、近世を代表する私塾のひとつである緒方洪庵の適塾について分析していこうと思う。適塾における教育はどのような特徴を持っていたのか、そしてその歴史的意義はどのようなものなのかを明らかにすべく、その実態を探っていく。

適塾の著名な門人の一人に、我が慶應義塾の創設者である福澤諭吉が名を連ねていることからも、慶應義塾の学生の一人として我々が適塾の教育について考察を深めていくことは非常に意義のあることだと私たちは考える。

１．設立・終焉の経緯と歴史的背景

まず適塾設立の背景として述べておきたいのが、大阪における蘭学の伝統である。

大阪に蘭学の基礎を置いたのは豊後国出身の麻田剛立（1734～1799）である。彼は脱藩して明和八（1771）年ごろ大阪に来、天文学・暦学を研究した人物である。その実証的な研究[1]が有名になり、麻田剛立を中心として大阪における天文学･暦学は江戸の幕府天文方よりも進んでいたと言われている[2]。一方医学者としては小石元俊（1743～1809）が挙がる。彼は明和六（1769）年大阪で医者として開業し、大阪の西洋医学の基礎を築いた[3]。

そして、このように蘭学が大阪に根を下ろしたのは、大阪の経済発展にともなって、町人の間に数理的観念が普及したことが蘭学の合理性を理解し受容する素地となったと思われる[4]。大阪は蘭学が発展するためには好条件であったと言えるだろう。

その後天保九（1838）年三月、緒方洪庵が大阪瓦町にて開いたのが蘭学塾である適塾（適々斎塾）[5]であった。この時期の歴史的背景としては、前年に大阪で大塩平八郎の乱[6]が勃発して封建社会が崩れ行く転換期であった。また翌年には蛮社の獄[7]が起こって蘭学者に対する迫害が続き世間に大きな衝撃を与えていた。しかし混乱した世相であっても蘭方医術の価値と必要性は変わらなかった。そして洪庵も学問の自由のない当時の社会に屈することなく、その技術と人格をもって名声は高まっていった[8]。

弘化二（1845）年末には、日々増える門下生に対して手狭になった瓦町をあとにして、過書町に移転し塾を拡張した。この過書町のある北浜と呼ばれる地域には、長崎貿易と関係が深い銅座があったほか、この辺りは船着所に近く、船頭・船具商や宿屋・問屋・両替商が多く栄えていた。全国の情報が入手しやすく、さらに海外の文化の入り口であった長崎と近いことでヨーロッパの文化や技術、思想があふれていた[9]。このように蘭学塾としてこの上ないこの土地に塾を移し、これからますます成長していくのである。

文久二（1862）年、洪庵は幕府による奥医師任命を受諾し、江戸に赴いた。当時の洪庵の心境は、長崎で学んでいた二男平三・三男城次郎に宛てた手紙[10]によってうかがい

知ることが出来る。交渉を断りきれず受け入れたことについては、「俗にいふ有難迷惑なるもの」であるがしかしながら「道の為討死の覚悟でいる」と決意のほどを書き送っている[11]。

洪庵が江戸に赴いた後の適塾には、洪庵の養子である拙斎が居住して塾生の教育を行っており、姓名録には元治元（1864）年 7 月までの間に 25 名の署名がなされている。なお、海原徹『近世私塾の研究』には「適塾はおよそ 24 年間継続した」[12]とあるが、これはあくまで洪庵本人による運営の期間であり、適塾それ自体の運営は 1862 年以降も続いている。また、明治 2（1869）年より明治 19（1886）年に至る間の明治期の「大阪適塾門人帳」（緒方惟之氏所蔵）が発見されており[13]、幕末から引き続いて拙斎やその他門人が適塾を守り続けていたことが分かる。ただし、明治 2 年大阪府による医学校設立[14]の際に、洪庵の実子である緒方惟準、義弟である郁蔵、養子である拙斎、その他適塾門下生達が参加しており、洪庵適塾の精神はここで、間接的ではあるが、ある程度医学校に受け継がれたといえそうである。なお、医学校はのちに変遷を遂げて、現在は大阪大学医学部となっている。

２．緒方洪庵の経歴・学問的背景

適塾を知るにあたって、その塾自体もさることながら、「門人と塾主の関係でありながら実父のようであった」[15]と、代表的な門人である福沢諭吉が記しているような、塾主緒方洪庵の人となりも無視できるものではない。塾主緒方洪庵自身のことを知ることは適塾を知る際に重要なことなのである。

緒方洪庵は文化七（1810）年 7 月 14 日、備中の足守で佐伯瀬左衛門惟因の三男として誕生した。父惟因は木下候に仕える藩士であった。幼少の頃の洪庵がどのような教育を受けたか詳しいことは分かっていないが、おそらく一般の武士の子と同様、いくばくかの漢学教育を受けたものであろう[16]。

文政八（1825）年 2 月 5 日 16 歳の時に元服。同年 5 月 18 日、父が藩用で大阪に出かけた際に同伴し、その二ヵ月半後の 8 月に足守へと戻った。これが洪庵にとって初めての大阪だった。10 月 5 日、再び父の藩用に同伴し大阪へ発った。

翌文政九（1826）年 7 月。17 歳となった洪庵は医学を修める決心をし、中天游の塾の門人となり四年間在籍することとなった。このことは、『病学通論』[17]の自序の中に記されており、訳すと「病気がちで十分に勉強が出来ないが、たまたま中天游という先生は西洋の医学を専門とし、人の体のことを良く調べていて、病気のことに詳しく、人をはっとさせるような意見を言われる、偉い学者であることを聞き、洪庵はすっかり今までの方針を改めて、先生につくことにした」[18]と記されてある。ここから、備中足守の藩士の家に生まれた洪庵がこれを期に武士を捨てて医者を志したのが分かる。またこの時期に、文政六年に来日したシーボルト（Philipp Franz von Siebold, 1796 年 2 月 17 日 - 1866 年 10 月 18 日）の影響も大きかったのではないかと考えられる[19]。二人が接触したという

記録は見られなかったが、オランダでも有名な医師であり日本人に医学を始め学術上の新知識を伝えるために来日したシーボルトは非常に有名であり、この洪庵入塾の二ヶ月前に江戸から長崎への道中に来坂しており、少なからぬ影響を与えたことは想像するに難くない。

文政十三（1830）年四月、中天游の勧めで江戸へ赴き、翌天保二（1831）年、坪井信道の塾、安懐堂に入り、以降四年間在籍することとなる。この間、多くの蘭書を読破し、数篇を翻訳。また、信道の学問の宗家筋にあたる宇田川榛斉にも就き、西洋薬物学を学んだ。

天保六（1835）年二月、父が江戸詰の任を終え帰郷するのに同伴し、三月足守へ帰郷。その後師である中天游の死をうけ間もなく大阪へ向かって発っている。これは、中天游とかねてから天游の塾で蘭学を教えることを約束していたためで、天游の子耕介を援け、蘭学を教えた。

天保七年一月、足守をたち大阪へ出た後、翌月耕介を伴い長崎へ発ち以降二年間遊学がなされる。この長崎遊学に関しては詳しい資料が無く、また当時師事するような医師の来日もみられないため長崎遊学の期間どのような勉強をしていたのかは定かではない。

天保九年一月、足守へ帰郷。三月に大阪へ出て川原町に蘭学塾を開いた。また、この年の七月に摂津名塩の医師、憶川百記の娘、八重と結婚。以後二十四年間大阪に住み着き、蘭学者、開業医、教育者として過ごすこととなる。この時洪庵は二十九歳であった。

蘭学者として洪庵はこの時期に彼の代表作である『病学通論』『扶氏経験遺訓』(20)『虎狼痢治準』(21)を刊行している。他にも本を訳したり、著したりしていた。

開業医としては嘉永元（1848）年の大阪の医者を格付けしたもののなかで最高位をつけられているなど評判も高く、他にも今日の予防医学・公衆衛生の仕事、そして種痘館を京都新町や足守に築き種痘(22)を広める活動に力を尽くした。

教育者としては、適塾において多くの師弟の蘭学・医学の教育と人間形成に努め、明治維新期、またそれ以後も活躍する人物を多く輩出することになった。

このような大阪での生活の後、第１節でも少し触れたが、文久二（1862）年には幕府に召しだされて奥医師、つまり将軍家の侍医に就任した。これはかねてから幕府が洪庵の学識を認めており江戸に呼ぶ動きはあったものの、洪庵が固辞し続けていたのを伊東玄朴や林洞海が幕命の厳重なことを伝えてきたのを期に断りきれず受けた結果であった。そして同時に江戸の西洋医学所(23)の頭取にも就任。これによって自由に蘭学者、医学者、教育者として振舞うことが出来た生活が一変し、奥医師として、また同時に西洋医学所頭取としての公の義務を負うこととなった。この頃の生活については『謹仕向日記』(24)に事細かに書かれている。そして、江戸へ赴任してわずか十ヶ月しか経たない文久三（1863）年六月十日、突然の多量の喀血により五十四歳で息を引き取った。

３．教育活動の実態と特色

この節では、適塾の塾則・階級制度などの考察を通じて、その教育活動の実態に迫り、

特色を明らかにする。福澤諭吉、長与専斎[25]、池田謙斎[26]らの著作は適塾生としての実体験を盛り込んでいる為、実態を探る上では最も有益となるが、その中でも福澤の『福翁自伝』と長与の『松香私志』は、この節で扱うテーマに関する体験談を豊富に含んでいるため、主にこの両者の著作を参考にしながら、考察を進めたい。

まず、適塾の最も基本的な教育方針を示してくれるはずの塾則・階級制度についてであるが、その全容は実をいうと明らかになっていない。ただ、それがどのようなものであったのかについて推測、想像することは可能である。これに関しては、洪庵の義弟緒方郁蔵[27]が開いた独笑軒塾（適塾の姉妹塾）[28]の塾則や「階級課業次第」が、その一端をうかがう手がかりを提供してくれる。というのも、適塾における教育、指導には郁蔵が陰に陽によき協力者であった為、その長年の協力者が掲げた独笑軒塾の塾則は、そのまま適塾の精神を示すものだったと言えるからである[29]。

また、福澤の『福翁百話』によれば、「緒方に入門して掲示の塾則を見れば、其第一条に学生の読書研究は勿論のことなれども、唯原書を読むのみ、一枚たりとも漫に翻譯は許さずとあり」[30]との記述があり、塾則第一条に限ってはここで判明していると言えよう。塾則第一条が原書読解第一主義に徹し、また翻訳文書の作成厳禁を標榜していることは、翻訳文書の流出によって政治権力から学問の自由が脅かされることの無いようにという、洪庵の深慮の現れであったと指摘できるだろう。第二条以下については前述の通り明らかになっていないが、それが咸宜園のものなどと異なり細則を定めていないことは、同じく『福翁自伝』に描かれた塾の日常生活などをみることからも明らかである。同窓生と遊郭の話や茶屋の話をしたことや、酒を飲み交わした描写、また「塾風は不規則といわんか不整頓といわんか、乱暴狼藉まるでものごとに無頓着」[31]という言葉などから、その自由な気風を感じ取ることができる。さらに、現存する旧緒方洪庵住宅二階の塾生大部屋の柱には無数の刀痕が残されており、ここからも洪庵が塾生に自由闊達な塾生活をさせていたことがうかがえる。

＜適塾・塾生大部屋。山本正身撮影＞

適塾の階級制度に関しては、その参考になり得る独笑軒塾の「階級課業次第」によれば、塾長、塾監、一等、二等、三等（万物窮理書会読）、四等（文法書後編会読）、五等（文法書前編会読）、六等（文法書素読生）、級外（訳書研究）に分けられていた[32]。適塾の等級制度については、『福翁自伝』には「およそ塾中の等級は 7、8 級ぐらいに分けてあった」[33]との記述があり、『松香私志』には「輪講は学生を 8 級に分ち」[34]とある。その階級制度は、独笑軒塾のものとおよそ類似するものであったと考えてよいだろう。なお、福澤は

塾長の階級について、「塾長になったからといって、元来の塾風で塾長に何も権力のあるではなし、ただ塾中一番むずかしい原書を会読するとき、その会頭を勤めるくらいのことで、同窓生の交際に少しも軽重はない。」(35) と述べており、適塾の塾風はここにも示されているといってよいだろう。

適塾に入門した初学者は、まずガランマチカ、続いてセインタキス(36) という二冊の文典を順に学んだのち、原書の会読に加わることができた。会読は学力に応じて級を分け、自分に割り当てられた箇所を順に講じるものであり、会頭がその日の成績によって△・○・●印をつけた。『福翁自伝』には「解し得た者は白玉、解しそこのうた者は黒玉、自分の読む領分をちょっとでも滞りなくりっぱに読んでしまったという者は白い三角をつける。これはただの丸玉の三倍ぐらい優等な印で」(37) とある。そして、一ヶ月間の成績を調べて優秀者を上席とし、三か月首席を占めた者が進級できるという規定があった。

入門時は上級生が手引きをしてくれるが(38)、会読の段階になると、他人に頼ることは許されなかった。全て自力で勉強するというのが適塾の原則であり、それは福澤が「会読本の不審は一字半句も他人に質問するを許さず、また質問を試みるような卑劣な者もない」(39) と述べていることからも分かる。このような状況で塾生の一番の頼りは和蘭辞書になるのだが、塾内に辞書はヅーフの写本(40) が一冊あるのみで、塾生は立ち替わりこの本がある部屋、通称ヅーフ部屋に昼夜を問わずこもり勉強したのである(41)。このような学習を経て昇級を勝ち取った者のみが、塾主洪庵自らの講義を拝聴することが出来るのだった。

適塾の大きな特色として、まず、前述の通り和蘭語の学習に特化していたことによって、非政治的なあり方を貫いたことがあげられるだろう。『福翁自伝』に「医師の塾であるから政治談はあまり流行せず、国の開鎖論をいえばもとより開国なれども、はなはだしくこれを争うものもなく」(42) とあるように、塾主、塾生ともに政治を度外視し、確たる目的もなく苦学することでかえって勉学に打ち込める環境にあったのであると福澤も分析している。また、塾生の自治的運営があったことも見逃せない。咸宜園のように厳密なカリキュラムではなく、整備されていない塾生による自主運営の下、激しい競争が行われた。そしてそのような塾生には医師志望の者だけでなく様々な出身地、身分の者があったが、この多様性に富んだ環境は、勉学面だけでなく人間形成にも少なからず影響を及ぼし、多くの人材を輩出した理由の一つになったのではないだろうか。

そしてやはり、塾主緒方洪庵のあり方にも適塾の特色が出ているといえよう。適塾同様多くの逸材を輩出した松下村塾の塾主吉田松陰は、塾主自らの講義により人格的感化を塾生に及ぼしたが、洪庵の場合は、彼自ら講義を行ったのは最上級生の求めに応じる時ぐらいであった(43)。しかしそれでも、註 15 で挙げたように、その人柄故に多くの塾生から慕われており、また、前述した自由な塾風からも分かるように、塾生が狼藉を働いても容認し塾生を信頼し、その信頼に応えるように塾生も洪庵の信頼を裏切らないよう、ハメを外しながらも超えてはならない一線は守っていた。このような師弟間の信頼関係が塾生た

ちの発奮を誘い、勉学に向かわせたのだと想像するに難くない。教育者としての洪庵の見識はこのようなあり方に凝縮されていると考えられる。

また、適塾の教育を最もリアルに伝えてくれる福澤、長与の著作は、ただ学習法を我々に伝えるだけでなく、そこで学んだ塾生の学問に対する熱意を伝えるものでもある。「此の塾は適塾と称へ、四方より来り学ぶもの常に百人を超え、四時の輪講絶ゆることなく、当時全国第一の蘭学塾なりき」(44) という長与。そして「緒方の書生は学問上のことについては、ちょいとも怠ったことはない。……大阪からわざわざ江戸に学びに行くという者はなく、行けばすなわち教えるという方であった」(45) という福澤。この両者の言葉から推察するに、当時の蘭学書生にとっての適塾は日本で最も優れた教育を行う場所であって、福澤の「西洋日進の書を読むことは日本国中の人にできないことだ、自分たちの仲間に限ってこんなことができるのだ」(46) という言葉からも、適塾で学ぶ書生の心情をうかがい知ることができよう。

４．門人たちの身分と範囲

適塾の門下生の研究に関しては、大阪大学の「適塾記念会」で行われている研究に詳しい。門人たちの身分や範囲に関しての記述では、資料としては『姓名録』や『適塾門下生調査資料』などが望ましい。しかし『姓名録』原本は日本学士院に寄贈されているほか、『適塾門下生調査資料』も一次史料を精査することが困難であるので、適塾研究者の研究を引用する事を先に記しておく。本節を書くにあたり、文献は海原徹の『近世私塾の研究』を主な参考文献として調査を進めた。

洪庵が適塾を開いたのは 1838 年であるが、入門者の記名帳である『姓名録』は 1844 年からつけられた。1862 年の夏までに 612 名の署名があった。その後 1864 年までに合計 637 名が記されている (47)。急激に入門者が増えるのはペリー来航の前後である。入門者が最も多かったのは 1859 年の 51 名である (48)。門下生の総計は署名をしていない者を入れると、千人以上になると思われる (49)。

出身地としては、青森県を除く全都道府県にわたっており、主に塾のある大坂に近い関西の出身者が多かった。福澤諭吉や大村益次郎等、中央で活躍した門人の活躍以外にも、次節で述べるが、地方に帰った門人がその地方の社会の向上に尽力したことで、近代日本の進展に重要な役割を果たしたということもあり、極めて大きな歴史的意義を持っている (50)。

次に門人の身分であるが、『姓名録』に出身の藩名や主君名を記している人々は、637 名中 111 名であるが、入門者全履歴を対象にした『適塾門下生調査資料』第 1・2 集によると、111 名中 61 名（54.9%）が武士身分である。さらに医師身分も多く 111 名中 80 名が医師（そのうち 46 名は武士身分）であった。武士の多くは藩費留学生として来学しており、概して身分は高かったようである (51)。

さらに、医師が多い適塾の中で農民・町民の子弟も門人として存在していた。ただ蘭学

を学ぶ上で漢学の素養が必要だったため、比較的余裕のある庄屋・豪農・豪商クラスの人々であったと考えられる[52]。門人で在学期間が判明しているのは、『姓名録』記述の 637 名中 38 名と少ないが、大半は 2,3 年程度継続して学んでいた[53]。

門人たちの平均年齢も他の蘭学塾同様、22.9 歳と高いものとなっている[54]。海原徹の『近世私塾の研究』によれば、漢学塾で基礎学力を習得した後に来学した蘭学書生の年齢が比較的高かったのには、諸藩藩校の秀才が選抜されて公費留学生として送り込まれたためであろうと仮説が述べられている。

以上のように、適塾の門人には武士それも医師身分が多く、多くが公費留学生として遊学に来ているということがわかる。さらに門人の身分が全国にまたがっており、門人たちが社会の進展に貢献したという点（後述）からも、適塾が近代日本に与えた影響は大きいことがわかる。

５．歴史的意義

適塾は、福澤諭吉や橋本左内、大村益次郎など幕末から明治維新にかけて活躍した人物を多く輩出した私塾であり、そこに歴史的意義があると考えられる。ではなぜ有望な人物を輩出しえたのだろうか。それを二つの視点からアプローチしていこうと思う。一つ目は、適塾の教育機関としての性格の評価である。二つ目は適塾の蘭学（洋学）に対する見方から見る歴史的評価である。

まず、第一に、教育機関としての適塾の性格から、なぜ多くの人物を輩出しえたかを考察していこうと思う。適塾の教育機関としての性格を評価する際に、その基本的性格を医学塾と見るか語学塾と見るかに焦点を向けねばならないだろう。医学塾の側面では、梅溪昇の『洪庵・適塾の研究』によると弘化 2（1845）年には洪庵自ら解剖研修を行ったり、文久 2（1862）年に塾生が解剖実習に参加したとある。また安政 4（1857）年以降は『扶氏医戒之略』[55]の執筆や『扶氏経験遺訓』の刊行に没頭し、洪庵自ら医学者としての本務に精励し、適塾の声価を高めた[56]という評価もある。

だが、教育活動の実態と特色の節でも述べたように適塾は医学塾という側面に加えて語学塾としての要素も強かったようである。長与専斎によれば「元来適塾は医家の塾とはいえ、その実蘭書解読の研究所にて、諸生には医師に限らず、兵学家もあり、砲術家もあり、本草家も舎密家[57]も、凡そ当時蘭学を志すほどの人は皆此塾に入りてその支度をなす」[58]というように、専門を問わずオランダ語の解読に力が注がれていて[59]医学塾と見ると同時に語学塾としても基本的性格を有していたと捉えられる。この事を裏付ける説として、藤野恒三郎は適塾の教育的性格を二面性において理解している。それは、すでに藩医であったり開業医の経験のある入塾生と、それ以外の初めて蘭学を志す入塾生で異なるというものであり、今日の大学課程で言えば前者の塾生にとっては大学院課程のようなもの、後者の塾生にとっては一般教養過程に相当するものがあったとするものである[60]。門人の身分や範囲が多様性に富んだ適塾において、適塾の教育機関としての性格が二面性

を持ち、それぞれの門下生に合う形で適塾が存在しえたことにまず意義があるのではないだろうか。

第二に適塾の蘭学に対する見方から見る評価であるが、1960 年に片桐一男が、法政史学第 13 号の『蘭学者の地域的・階層的研究』の中で適塾に対する歴史的意義を述べている。それによると、塾生は非常に勉強熱心であると同時に自由奔放であるが、それは藩の後ろ盾があってのものであり、根本には幕府や藩に隷属することになるとし、適塾は研究史における封建制補強論的な評価をされている。

ところが長尾政憲の 1975 年法政史学第 27 号『幕末洋学史における適塾の地位』では、片桐が支持する適塾を体制補強的な側面で捉えることはあたらないとしている。長尾は、適塾門人の多くが医師身分でもあったことと、適塾出身者の医師としての活躍からみても適塾を体制補強的な側面で捉えることは正しいといえないとしている。つまり幕府や藩のための学問という見方ではなく、医師として患者のための学問（医学）という見方である。医師の活躍については田崎哲郎が自ら調査した塾生の在郷民間医としての活躍や、洪庵とその医師らとの関係から「草莽（そうもう。志士のこと）の洋学」が民衆に浸透していた[61]と評価しており片桐とは対の評価を下している。

薩摩藩出身の大田恕斎の例をとると、適塾において修学したのち、当時蘭学者を軍事技術的面の要素の強い蘭学塾に通うよう要請していた藩の意向に背き、地元へ帰り明治維新以降も医者として活躍した[62]。また守屋庸庵や西有慶は、洪庵が天然痘治療の為の足守における除痘館開設事業の際に、洪庵と牛痘法普及に尽力し、開設後は庸庵は足守に残り開業し牛痘法で名を挙げ、有慶の方は芸州に帰郷し牛痘法普及に邁進した[63]。また除痘法は大阪だけでなく、西日本全体に急速に広まっていった。これは適塾出身の在村の蘭方医たちが適塾で習得した牛痘法を各地に普及させていったからである[64]。

このように適塾が､在野でも最大級の規模の私塾として多数の民間医の門下生を養成し、学問を庶民のためという見方をしていたことが、上述のような医療技術の普及などに寄与したことはいえると考えられる。また、長尾説においては適塾を体制補強的な側面で捉えること、つまり学問を体制補強的な側面で捉えられることは否定されている。これは結果論に過ぎないかもしれないが、佐野常民（大蔵卿、枢密院顧問官など）・大村益次郎（陸軍創立者）・大鳥圭介（枢密院顧問官、元老院議官など）など、明治政府中枢で活躍する人材も輩出していることからも、あながち間違った説ではないのではないかと考える。

仮説であるが、医師経験がある門下生にとっての蘭学は庶民のためという見方で、それ以外で蘭学を初めて志した門下生にとっては体制補強のためという見方だったのではないだろうか。上述の門人たちが政府の中枢、つまり「体制」側で活躍していることからそれがわかると思う。

以上のように適塾が多くの優秀な人材を輩出しえたのには、①教育機関としての性格が「医学塾」と「語学塾」の二面性を持ち、それぞれの門下生のニーズに合う形で適塾が存在しえたこと、②蘭学の教授も「庶民のための蘭学」と「体制のための蘭学」の二面性を

持っていたという二つの理由があると考えられる。この事から言えることは、適塾の教育が可塑性に富み、柔軟性があったことで多くの優秀な人材を輩出しえたということであり、それが歴史的意義といえるのではないだろうか。

〔註〕

（1）測量の機械を製作して実測するなどして日食を正しく予報したり、独学でケプラーの法則を発見した。
（2）梅溪昇『緒方洪庵と適塾』大阪大学出版会、1996 年、3 頁。
（3）刑屍を解剖して西洋内景説の正しいことを確認し、国内初病理解剖学的記録を残した。
（4）前掲『緒方洪庵と適塾』、5 頁。
（5）緒方洪庵の号である適々斎に基づいて「適々斉塾」、また略して「適塾」と呼ばれ、瓦町に開業したこの頃からあった名のようである。
（6）町奉行所元与力大塩平八郎と門人らが天保の大飢饉における幕府の対応に不満を持ち起こした江戸幕府に対する民乱。
（7）幕府が渡辺崋山や高野長英などの蘭学者に加えた弾圧事件。
（8）前掲『緒方洪庵と適塾』10 頁。後にも述べる。
（9）梅溪昇『大坂学問史の周辺』思文閣出版、1991 年、25 頁。
(10)「病弱の体質、老後の勤め、中々苦労の至、殊に久々住馴たる土地を放れ候事、経済に於ても甚だ不勝手。実に世に謂ふ有難迷惑なるものに在之候。乍併道の為子孫の為め、討死の覚悟に罷在候」（文久 2 年 6 月 17 日付）、緒方富雄『緒方洪庵伝』岩波書店、1963 年、所収、17 頁。
(11)『緒方洪庵と適塾』適塾記念会、1980 年、23 頁。　30・31 頁に資料掲載。
(12) 海原徹『近世私塾の研究』思文閣出版、1983 年、251 頁。
(13) 前掲『緒方洪庵と適塾』84 頁。
(14) 大福寺（中央区上本町４丁目）に仮病院とともに設立。
(15) 福沢諭吉『福翁自伝』（慶應義塾大学出版会、2007 年）には、例えば、「わたしは真実緒方の家のもののように思い、また思わずにはいられません」（44 頁）や、「先生だから本当の親と同じことで何も隠すことはない」（54 頁）などの福澤の言葉が記されている。
(16) リチャード・ルビンジャー／石附実・海原徹訳『私塾』サイマル出版、1982 年、114 頁。
(17) 緒方洪庵著。嘉永二（1849）年出版。日本最初の病理学書。
(18) 原文は緒方洪庵『病学通論』、訳文は前掲『緒方洪庵伝』、7 頁。
(19) 芝哲夫『適塾の謎』大阪大学出版会、2005 年、8 頁。
(20) 文久元（1861）年全巻出版。フーフェランドの内科書 Enchiridion Medicum（医学必携）第二版のハーヘマンによるオランダ語訳の重訳。全 30 巻。
(21) 安政五（1858）年出版。コレラの流行に際して、手元にあった三冊の医学書のコレラの項を訳し、洪庵の経験を交えて記したもの。
(22) 痘苗を人体に摂取し、天然痘に対する免疫性を得させ、感染を予防する方法（新村出編『広辞苑』第五版、岩波書店、1998 年）。

(23) 神田お玉ヶ池につくられた種痘所が発展し幕府管轄となったもの。後の東京大学医学部。

(24) 洪庵が江戸に着いた日、八月十九日から翌文久三年三月十三日までの記録が載っている。

(25) 天保九年長崎県に生まれる。文部省医務局長、東京医学校長などを歴任し、日本の医事行政、公衆衛生の基礎を確立した人物と評価される。明治三十三年出版の自叙伝『松香私志』に適塾の内情をうかがわせる記述がある。

(26) 天保十二年新潟県に生まれる。後に外科の権威として東京医学校長、宮内省侍医局長官などを歴任。大正八年出版の著作『回顧録』に適塾の様子を描く。

(27) 備中国後月郡簗瀬村に生まれる。旧名は大戸郁蔵。のち洪庵と義兄弟の約を結び、緒方の姓を名乗る。洪庵と『扶氏経験遺訓』を共訳し、維新後は大坂医学校・病院に勤務。ボードウィン、エルメレンスの医学講義を翻訳した。

(28) 海原徹によれば、弘化元(1844)年開塾とされているが、適塾記念会編『緒方洪庵と適塾』によれば、万延元(1860)年開塾と記されており、両者に開塾年代の食い違いが生じている（前掲『近世私塾の研究』、262 頁。前述『緒方洪庵と適塾』、43 頁。)。

(29) 前掲『緒方洪庵伝』95 頁。

独笑軒塾則第一条「蘭学を学ぶと雖も、常に我朝の道を守り、国体を失すべからず」。

(30) 福澤諭吉『福翁百話』、『福澤諭吉全集』第 6 巻、岩波書店、1969-71 年、305-6 頁。

(31) 福澤諭吉『福翁自伝』慶應義塾出版会、2007 年、63 頁。

(32) 前掲『近世私塾の研究』、240-41 頁。

(33) 前掲『福翁自伝』、81 頁。

(34) 前述『松香私志』上巻（伴忠康『適塾と長与専斎―衛生学と松香私志』創元社、1987 年、所収)、9 頁。

(35) 前掲『福翁自伝』、59 頁。

(36) ガランマチカは天保十三年九月に「和蘭文典前編」として、セインタキスは嘉永元年九月に「和蘭文典後編成句論」として、江戸で復刻されたものである。

(37) 前掲『福翁自伝』、81 頁。

(38) この実際に関して、たとえば長与専斎は、「前後文典の会は初学なれば随意に他人の講義を受けて輪講を為すことを得れども、多くは同級の人揃ひて先輩の講義を聴くを常とせり」と記している。ここから、文典の授業は講義形式が中心であったことがうかがえる。

(39) 前掲『福翁自伝』、79 頁。

(40) ヅーフ・ハルマのこと。長崎商館長ヘンドリック・ヅーフが文化十三年原稿を完成した蘭和辞書。

(41) このエピソードに関して、たとえば福澤・長与が以下の記述を残しているので挙げておく。

「いよいよ明日が会読だというその晩は、いかな懶惰生でもたいてい寝ることはない。ヅーフ部屋という字引のある部屋に、5 人も 10 人も群をなして、無言で字引を引きつつ勉強している」（前掲『福翁自伝』81 頁)。

「生徒皆此一部のヅーフを杖とも柱とも頼むものなれば、立替り入代り其部屋に詰め込みて前後左右に引張り合ひ、容易に手に取ることも叶はさる程なり」（前掲『松香私志』上巻、10 頁)。

(42) 前掲『福翁自伝』、89 頁。

(43) この点に関して、たとえば、洪庵に講義を願い出てその講義を聴聞していた福澤が以下のよう

な感想を述べている。「先生の説を聞いて、その緻密なること、その放胆なること、実に蘭学界の一大家、名実ともにたがわぬ大人物であると感心したことは毎度のことで、講義終わり、塾に帰って、朋友相互に『きょうの先生のあの卓説はどうだい。なんだかわれわれは頓に無学無識になったようだ。』などと話したのはいまに覚えています」（同上、81 頁）。

(44) 前掲『松香私志』上巻、9 頁。

(45) 前掲『福翁自伝』、88 頁。

(46) 同上、89 頁。

(47) 実際には再入門者が 1 名いるので人数は 636 名（梅溪昇『洪庵・適塾の研究』思文閣出版、1993 年より）。

(48) 前掲『近世私塾の研究』253 頁。

(49) 前掲『適塾と長与専斎』、11 頁。

(50) 前掲『洪庵・適塾の研究』、161-162 頁。

(51) 同上。

(52) 同上、258 頁。

(53) 同上、259 頁。

(54) 同上。

(55) 洪庵が、医師が守るべき戒めを 12 か条にまとめ門人に教えたもの。

(56) 前掲『洪庵・適塾の研究』、15 頁。

(57) せいみか。化学者を指す。

(58) 小川鼎三、酒井シヅ『松本順・長与専斎自伝』平凡社、1980 年、111 頁。

(59) 沖田行司『日本人を作った教育』大巧社、2001 年、154-155 頁。

(60) 前掲『洪庵・適塾の研究』、15 頁。

(61) 長尾政憲『幕末洋学史における適塾の地位』法政史学、1975 年、57 頁。

(62) 田崎哲郎『在村の蘭学』名著出版、1985 年、210 頁。

(63) 有坂隆道・浅井弁晶編『論集 日本の洋学』清文堂出版、1997 年、275 頁。

(64) 前掲『在村の蘭学』

＜川上祐以、勢良幸太郎、矢野高志、渡辺早紀子＞

2007 年度 山本ゼミ共同研究報告書

近世私塾の教育史的研究

2008 年 1 月 31 日　発行
発行者　慶應義塾大学文学部教育学専攻山本研究会
＜代表 山本正身＞

〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45
慶應義塾大学文学部内
℡ 03-3453-4511（内）23112